

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集

坂戸市

かな い
金井遺跡 B 区

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

—IX—

(第2分冊)

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序
例 言
凡 例

【第1分冊】

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査・報告書作成の経過	3
4	調査と整理の方法	4
II	立地と環境	7
1	立 地	7
2	歴史的環境	9
3	入西遺跡群の概観	14
III	遺跡の概観	18
IV	古代の遺構と遺物	23
1	住居跡	23
2	掘立柱建物跡	91
V	中世の遺構と遺物	112
1	第1区の遺構と遺物	115
(1)	鑄造跡	117
(2)	掘立柱建物跡	136
(3)	溝 跡	145
(4)	井戸跡	147
(5)	土 壇	162
(6)	火葬墓	172
2	第2区の遺構と遺物	174
(1)	鑄造跡	176
(2)	鑄造関連遺構	191
(3)	掘立柱建物跡	196
(4)	溝 跡	205
(5)	井戸跡	226
(6)	土 壇	233
(7)	火葬墓	256

【第2分冊】

3	第3区の遺構と遺物	258
(1)	鋳造跡	260
(2)	掘立柱建物跡	434
(3)	溝跡	441
(4)	井戸跡	452
(5)	土壌	455
4	第4区の遺構と遺物	457
(1)	鋳造跡	457
(2)	溝跡	470
(3)	土壌	472
5	第5区の遺構と遺物	475
(1)	溝跡	475
(2)	土壌	478
6	第6区の遺構と遺物	482
(1)	溝跡	482
(2)	土壌	482
7	第7区の遺構と遺物	486
(1)	溝跡	486
(2)	井戸跡	489
(3)	土壌	489
(4)	火葬墓	491
8	第8区の遺構と遺物	492
(1)	土壌	492
VI	その他の遺構と遺物	494
VII	参考資料	499

【第3分冊】

VIII	調査のまとめ	503
1	鋳造遺構と遺物	503
(1)	鋳造遺構について	503
(2)	鋳造遺物について	512
2	金井遺跡の鋳物師	581
3	中世の土器と遺構	596
4	古代の土器と遺構	611
附編		627

【写真図版】

挿 図 目 次

(第1分冊)

第1図	未調査区の範囲	5
第2図	グリッド配置図	6
第3図	地形断面模式図	7
第4図	金井遺跡B区地形図	8
第5図	埼玉県の地形図	9
第6図	金井遺跡A・B区と足洗遺跡	10
第7図	金井遺跡B区と入西遺跡群	11・12
第8図	周辺遺跡の分布図	11・12
第9図	金井遺跡B区全体図	21・22
第10図	古代の遺構全体図	23
第11図	第1・2号住居跡	25
第12図	第1・2号住居跡カマド	26
第13図	第1・2・3号住居跡遺物分布図	27
第14図	第1号住居跡出土遺物(1)	28
第15図	第1号住居跡出土遺物(2)	29
第16図	第1号住居跡出土遺物(3)	29
第17図	第2号住居跡出土遺物	30
第18図	第3号住居跡	31
第19図	第3号住居跡カマド	32
第20図	第3号住居跡出土遺物	32
第21図	第4号住居跡出土遺物(1)	33
第22図	第4号住居跡出土遺物(2)	33
第23図	第4号住居跡・カマド	34
第24図	第5号住居跡出土遺物	35
第25図	第5号住居跡・カマド	36
第26図	第6号住居跡遺物分布図	37
第27図	第6号住居跡・カマド	38
第28図	第6号住居跡出土遺物	39
第29図	第7号住居跡・カマド・貯蔵穴	40
第30図	第7号住居跡出土遺物	41
第31図	第8号住居跡	42
第32図	第8号住居跡遺物分布図	43
第33図	第8号住居跡出土遺物(1)	44
第34図	第8号住居跡出土遺物(2)	45
第35図	第8号住居跡出土遺物(3)	45
第36図	第9号住居跡	46
第37図	第9号住居跡カマド・貯蔵穴	47
第38図	第9号住居跡出土遺物	48
第39図	第10・12号住居跡	49
第40図	第10・12号住居跡カマド	50
第41図	第10号住居跡出土遺物	50
第42図	第12号住居跡出土遺物	51
第43図	第161号土壌出土遺物(1)	52
第44図	第161号土壌出土遺物(2)	52
第45図	第11号住居跡カマド	53
第46図	第11号住居跡・貯蔵穴	54
第47図	第11号住居跡出土遺物	55
第48図	第13号住居跡・遺物分布図	57

第49図	第13号住居跡カマド	58
第50図	第13号住居跡貯蔵穴	59
第51図	第13号住居跡出土遺物(1)	60
第52図	第13号住居跡出土遺物(2)	61
第53図	第14号住居跡・カマド	62
第54図	第14号住居跡出土遺物	63
第55図	第15号住居跡・カマド	63
第56図	第16号住居跡出土遺物	64
第57図	第16号住居跡・カマド・貯蔵穴	65
第58図	第17号住居跡出土遺物	66
第59図	第17号住居跡・カマド	67
第60図	第18号住居跡・カマド	68
第61図	第18号住居跡出土遺物	69
第62図	第19号住居跡	70
第63図	第19号住居跡出土遺物	70
第64図	第20号住居跡カマド	71
第65図	第20号住居跡	72
第66図	第20号住居跡出土遺物(1)	73
第67図	第20号住居跡出土遺物(2)	73
第68図	第21号住居跡	74
第69図	第21号住居跡出土遺物	74
第70図	第22号住居跡	75
第71図	第22号住居跡カマド	76
第72図	第22号住居跡出土遺物	77
第73図	第23号住居跡	78
第74図	第23号住居跡出土遺物	79
第75図	第24号住居跡出土遺物	79
第76図	第24号住居跡	80
第77図	第25号住居跡カマド	81
第78図	第25号住居跡	82
第79図	第25号住居跡出土遺物	83
第80図	第26号住居跡出土遺物	84
第81図	第26号住居跡・カマド	84
第82図	第27号住居跡	85
第83図	第28号住居跡出土遺物	86
第84図	第28号住居跡	86
第85図	第29号住居跡	87
第86図	第29号住居跡出土遺物	88
第87図	第30号住居跡	89
第88図	第30号住居跡出土遺物	90
第89図	第1号掘立柱建物跡(1)	92
第90図	第1号掘立柱建物跡(2)	93
第91図	第2号掘立柱建物跡	94
第92図	第3号掘立柱建物跡	96
第93図	第4号掘立柱建物跡	97
第94図	第5号掘立柱建物跡	98
第95図	第6号掘立柱建物跡	100
第96図	第7号掘立柱建物跡	101
第97図	第8号掘立柱建物跡	102

第98図	第9号獨立柱建物跡	104	第149図	第1区土壇(3)	167
第99図	第10号獨立柱建物跡	105	第150図	第1区土壇(4)	168
第100図	第11号獨立柱建物跡	106	第151図	第1区土壇(5)	169
第101図	第12・13号獨立柱建物跡	107	第152図	第1区土壇出土遺物	170
第102図	第25号獨立柱建物跡	108	第153図	第1区火葬基	173
第103図	第26号獨立柱建物跡	109	第154図	第2区遺構配置図	175
第104図	獨立柱建物跡出土遺物	110	第155図	第2号鑄造遺構群全体図(1)	177・178
第105図	中世の遺構全体図	113・114	第156図	第2号鑄造遺構群全体図(2)	179
第106図	第1区遺構配置図	116	第157図	第2群第2号鑄造土壇	179
第107図	第1号鑄造遺構群全体図(1)	118	第158図	第2群第1・3号鑄造土壇	180
第108図	第1号鑄造遺構群全体図(2)	119	第159図	第2群第4・5号鑄造土壇	181
第109図	第1群第1号鋤込み跡	120	第160図	第2群第1号鋤込み跡(1)	182
第110図	第1群第1号鋤込み跡遺物出土状態	121	第161図	第2群第1号鋤込み跡(2)・第1号炉跡	183
第111図	第1群第2号鋤込み跡(1)	122	第162図	第2号鑄造遺構群出土遺物(1)	186
第112図	第1群第2号鋤込み跡(2)	123	第163図	第2号鑄造遺構群出土遺物(2)	187
第113図	第1群第2号鋤込み跡遺物出土状態	124	第164図	第2号鑄造遺構群出土遺物(3)	187
第114図	第1号鑄造遺構群遺物分布図	125	第165図	第2号鑄造遺構群出土遺物(4)	187
第115図	第1号鑄造遺構群出土遺物(1)	129	第166図	第3・4号鑄造遺構群	189
第116図	第1号鑄造遺構群出土遺物(2)	130	第167図	第1号粘土探掘跡(1)	192
第117図	第1号鑄造遺構群出土遺物(3)	131	第168図	第1号粘土探掘跡(2)	193
第118図	第1号鑄造遺構群出土遺物(4)	132	第169図	第2号粘土探掘跡	194
第119図	第1号鑄造遺構群出土遺物(5)	133	第170図	第3号粘土探掘跡	195
第120図	第1号鑄造遺構群出土遺物(6)	134	第171図	第1号炭焼き窯跡	195
第121図	第14号獨立柱建物跡	137	第172図	第19号獨立柱建物跡(1)	197
第122図	第15号獨立柱建物跡(1)	138	第173図	第19号獨立柱建物跡(2)	198
第123図	第15号獨立柱建物跡(2)	139	第174図	第19号獨立柱建物跡(3)	199
第124図	第16号獨立柱建物跡	140	第175図	第20号獨立柱建物跡	200
第125図	第17号獨立柱建物跡	141	第176図	第21号獨立柱建物跡	201
第126図	第18号獨立柱建物跡(1)	142	第177図	第2区溝跡・井戸跡・土壇配置図	202
第127図	第18号獨立柱建物跡(2)	143	第178図	第2区溝跡土層図(1)	203
第128図	第1区の溝・井戸・土壇配置図	144	第179図	第2区溝跡土層図(2)	204
第129図	第1区溝跡土層図	145	第180図	第7号溝跡出土遺物(1)	206
第130図	第1区溝跡出土遺物	146	第181図	第7号溝跡出土遺物(2)	207
第131図	第1号井戸跡・出土遺物(1)	148	第182図	第7号溝跡出土遺物(3)	208
第132図	第1号井戸跡出土遺物(2)	149	第183図	第7号溝跡出土遺物(4)	209
第133図	第1号井戸跡出土遺物(3)	150	第184図	第12号溝跡出土遺物	212
第134図	第2号井戸跡	151	第185図	第22号溝跡遺物分布図(1)	214
第135図	第2号井戸跡出土遺物	152	第186図	第22号溝跡遺物分布図(2)	215
第136図	第3号井戸跡・出土遺物(1)	153	第187図	第22号溝跡出土遺物(1)	216
第137図	第3号井戸跡出土遺物(2)	154	第188図	第22号溝跡出土遺物(2)	217
第138図	第3号井戸跡出土遺物(3)	155	第189図	第22号溝跡出土遺物(3)	218
第139図	第3号井戸跡出土遺物(4)	156	第190図	第22号溝跡出土遺物(4)	219
第140図	第3号井戸跡出土遺物(5)	157	第191図	第22号溝跡出土遺物(5)	220
第141図	第4号井戸跡	159	第192図	第22号溝跡出土遺物(6)	221
第142図	第4号井戸跡出土遺物(1)	160	第193図	第22号溝跡出土遺物(7)	222
第143図	第4号井戸跡出土遺物(2)	161	第194図	第22号溝跡出土遺物(8)	224
第144図	第4号井戸跡出土遺物(3)	162	第195図	第2区溝跡出土遺物	225
第145図	第1～6号土壇	163	第196図	第6・7号井戸跡	227
第146図	第7～10号土壇	164	第197図	第6号井戸跡出土遺物(1)	228
第147図	第1区土壇(1)	165	第198図	第6号井戸跡出土遺物(2)	229
第148図	第1区土壇(2)	166	第199図	第7号井戸跡出土遺物	230

第200图	第5·8·9号井戸跡	231
第201图	第8·9号井戸跡出土遺物	232
第202图	第85号土壤・鍛冶炉	233
第203图	土壤群全体図(1)	234
第204图	第86~89号土壤	235
第205图	第90·91号土壤	236
第206图	第92·93号土壤	238
第207图	土壤群全体図(2)	239
第208图	第94~99号土壤	240
第209图	土壤群全体図(3)	241
第210图	第101~104号土壤	242
第211图	第105~110号土壤	243
第212图	第111~116号土壤	244
第213图	第117·118号土壤	245
第214图	第2区土壤出土遺物(1)	247
第215图	第2区土壤出土遺物(2)	248
第216图	第2区土壤(1)	250
第217图	第2区土壤(2)	251
第218图	第2区土壤(3)	252
第219图	第2区土壤(4)	253
第220图	第2区火葬墓	256
(第2分冊)		
第221图	第3区遺構配置図	259
第222图	第5鑄造遺構群全体図(1)	260
第223图	第5鑄造遺構群全体図(2)	261
第224图	第5鑄造遺構群全体図(3)	262
第225图	第5群第1号溶解炉跡	264
第226图	第5群第2号溶解炉跡	265
第227图	第5群第3号炉・第1号鑄込跡	266
第228图	第5群第1·2号土壤遺物分布図	268
第229图	第5群炉体1~4号遺物分布図	269
第230图	第5群炉体5号遺物分布図	270
第231图	第5群第10号鑄造土壤遺物分布図	271
第232图	第5鑄造遺構群出土遺物(1)	275
第233图	第5鑄造遺構群出土遺物(2)	276
第234图	第5鑄造遺構群出土遺物(3)	278
第235图	第5鑄造遺構群出土遺物(4)	279
第236图	第5鑄造遺構群出土遺物(5)	280
第237图	第5鑄造遺構群出土遺物(6)	282
第238图	第5鑄造遺構群出土遺物(7)	283
第239图	第5鑄造遺構群出土遺物(8)	284
第240图	第5鑄造遺構群出土遺物(9)	286
第241图	第5鑄造遺構群出土遺物(10)	288
第242图	第5鑄造遺構群出土遺物(11)	289
第243图	第5鑄造遺構群出土遺物(12)	290
第244图	第5鑄造遺構群出土遺物(13)	291
第245图	第5鑄造遺構群出土遺物(14)	292
第246图	第5鑄造遺構群出土遺物(15)	294
第247图	第5鑄造遺構群出土遺物(16)	295
第248图	第5鑄造遺構群出土遺物(17)	296
第249图	第5鑄造遺構群出土遺物(18)	297

第250图	第6鑄造遺構群全体図(1)	303
第251图	第6鑄造遺構群全体図(2)	304
第252图	第6群第1号炉跡	305
第253图	第6群第1·2·8号鑄造土壤遺物分布図	306
第254图	第6群第3~7号鑄造土壤遺物分布図	308
第255图	第6群第11·12号鑄造土壤	309
第256图	第6鑄造遺構群出土遺物(1)	313
第257图	第6鑄造遺構群出土遺物(2)	314
第258图	第7鑄造遺構群全体図	316
第259图	第7群第1号鑄造土壤	317
第260图	第7群第1~3号炉跡	318
第261图	第7鑄造遺構群出土遺物(1)	322
第262图	第7鑄造遺構群出土遺物(2)	323
第263图	第7鑄造遺構群出土遺物(3)	324
第264图	第7鑄造遺構群出土遺物(4)	326
第265图	第8鑄造遺構群全体図(1)	329
第266图	第8鑄造遺構群全体図(2)	330
第267图	第8群第1号鑄造土壤	332
第268图	第8群第2·3号鑄造土壤・円形還元状遺構	333
第269图	第8群第1号炉跡	334
第270图	第8群第1·2号炉跡	335
第271图	第8群炉体1号	335
第272图	第8群第2号炉跡・第8·9·15号炭滓	336
第273图	第8鑄造遺構群炭滓分布図(1)	337
第274图	第8群第11·12号炭滓	338
第275图	第8鑄造遺構群炭滓分布図(2)	339
第276图	第8群第1·2·6·11·12号炭滓	343
第277图	第8鑄造遺構群出土遺物(1)	344
第278图	第8鑄造遺構群出土遺物(2)	345
第279图	第8鑄造遺構群出土遺物(3)	346
第280图	第8鑄造遺構群出土遺物(4)	347
第281图	第8鑄造遺構群出土遺物(5)	347
第282图	第8鑄造遺構群出土遺物(6)	348
第283图	第8鑄造遺構群出土遺物(7)	349
第284图	第8鑄造遺構群出土遺物(8)	350
第285图	第8鑄造遺構群出土遺物(9)	351
第286图	第8鑄造遺構群出土遺物(10)	352
第287图	第8鑄造遺構群出土遺物(11)	353
第288图	第8鑄造遺構群出土遺物(12)	354
第289图	第9鑄造遺構群全体図	359
第290图	第9鑄造遺構群出土遺物(1)	362
第291图	第9鑄造遺構群出土遺物(2)	363
第292图	第10鑄造遺構群全体図	366
第293图	第10群第1·5鑄造土壤	368
第294图	第10群第5号鑄造土壤遺物分布図	369
第295图	第10群第2·6·8·9号鑄造土壤	370
第296图	第10群第3·4号鑄造土壤	371
第297图	第10群第7号鑄造土壤遺物分布図	372
第298图	第10群第1~3号炉・第1号鑄込跡	373
第299图	第10群第4号炉跡	375
第300图	第10鑄造遺構群出土遺物(1)	379

第301図	第10号跡遺構群出土遺物(2)……………	380
第302図	第10号跡遺構群出土遺物(3)……………	381
第303図	第10号跡遺構群出土遺物(4)……………	382
第304図	第10号跡遺構群出土遺物(5)……………	383
第305図	第10号跡遺構群出土遺物(6)……………	384
第306図	第10号跡遺構群出土遺物(7)……………	385
第307図	第10号跡遺構群出土遺物(8)……………	386
第308図	第11号跡遺構群全体図(1)……………	392
第309図	第11号跡遺構群全体図(2)……………	393
第310図	第11群第1号跡・第1・2号跡遺土壌……………	394
第311図	第11群第3・5～7号跡遺土壌……………	395
第312図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号跡遺土壌(1)……………	396
第313図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号跡遺土壌(2)……………	397
第314図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号跡遺土壌(3)……………	398
第315図	第11群遺物分布図……………	399
第316図	第11号跡遺構群出土遺物(1)……………	405
第317図	第11号跡遺構群出土遺物(2)……………	406
第318図	第11号跡遺構群出土遺物(3)……………	407
第319図	第11号跡遺構群出土遺物(4)……………	408
第320図	第11号跡遺構群出土遺物(5)……………	409
第321図	第11号跡遺構群出土遺物(6)……………	410
第322図	第11号跡遺構群出土遺物(7)……………	411
第323図	第11号跡遺構群出土遺物(8)……………	412
第324図	第11号跡遺構群出土遺物(9)……………	413
第325図	第11号跡遺構群出土遺物00……………	414
第326図	第11号跡遺構群出土遺物01……………	415
第327図	第11号跡遺構群出土遺物02……………	416
第328図	第12群第1号跡遺土壌……………	421
第329図	第12号跡遺構群グリッド遺物分布図……………	421
第330図	第12号跡遺構群出土遺物(1)……………	424
第331図	第12号跡遺構群出土遺物(2)……………	425
第332図	第13号跡遺構群全体図……………	427
第333図	第13号跡遺構群遺物分布図……………	428
第334図	第13号跡遺構群出土遺物(1)……………	431
第335図	第13号跡遺構群出土遺物(2)……………	432
第336図	第13号跡遺構群出土遺物(3)……………	433
第337図	第22号掘立柱建物跡(1)……………	435
第338図	第22号掘立柱建物跡(2)……………	436
第339図	第23号掘立柱建物跡(1)……………	437
第340図	第23号掘立柱建物跡(2)……………	438
第341図	第24号掘立柱建物跡……………	439
第342図	第3区溝跡・井戸跡・土壌配置図……………	440
第343図	第3区溝跡土層図……………	441
第344図	第27号溝跡遺物分布図……………	442
第345図	第26・27号溝跡出土遺物……………	442
第346図	第30号溝跡遺物分布図……………	444
第347図	第30号溝跡……………	445
第348図	第30号溝跡出土遺物(1)……………	446

第349図	第30号溝跡出土遺物(2)……………	447
第350図	第30号溝跡出土遺物(3)……………	448
第351図	第30号溝跡出土遺物(4)……………	449
第352図	第30号溝跡出土遺物(5)……………	450
第353図	第10・12・13号井戸跡・出土遺物……………	453
第354図	第11号井戸跡・出土遺物……………	454
第355図	第3区土壌出土遺物……………	455
第356図	第3区土壌……………	456
第357図	第4区遺構配置図……………	458
第358図	第14号跡遺構群全体図……………	459
第359図	第14群第1号跡込み跡……………	460
第360図	第14群第1号跡……………	461
第361図	第14号跡遺構群出土遺物(1)……………	463
第362図	第14号跡遺構群出土遺物(2)……………	464
第363図	第14号跡遺構群出土遺物(3)……………	465
第364図	第15群第1号跡遺土壌……………	466
第365図	第15群第1・2号廃滓……………	467
第366図	第15号跡遺構群出土遺物……………	469
第367図	第4区溝跡土層図……………	470
第368図	第4区溝跡・土壌配置図……………	471
第369図	第4区土壌……………	472
第370図	第4区土壌出土遺物(1)……………	473
第371図	第4区土壌出土遺物(2)……………	474
第372図	第5区溝跡土層図……………	475
第373図	第5区溝跡・土壌配置図……………	476
第374図	第41号溝跡出土遺物……………	477
第375図	第5区土壌(1)……………	478
第376図	第5区土壌(2)……………	479
第377図	第5区土壌(3)……………	480
第378図	第6区溝跡・土壌配置図……………	482
第379図	第6区溝跡土層図……………	483
第380図	第6区土壌(1)……………	484
第381図	第6区土壌(2)……………	485
第382図	第7区溝跡土層図……………	486
第383図	第7区溝跡・土壌配置図……………	487
第384図	第50・51号溝跡出土遺物……………	488
第385図	第14号井戸跡出土遺物……………	489
第386図	第14号井戸跡……………	489
第387図	第7区土壌出土遺物……………	489
第388図	第7区土壌(1)……………	490
第389図	第7区火葬墓……………	491
第390図	第8区土壌配置図……………	492
第391図	第8区土壌……………	493
第392図	第8区土壌出土遺物……………	493
第393図	第1・2号集石土壌……………	494
第394図	グリッド出土遺物(1)……………	495
第395図	グリッド出土遺物(2)……………	496
第396図	グリッド出土遺物(3)……………	497
第397図	表採遺物(1)……………	498
第398図	表採遺物(2)……………	498
第399図	金井遺跡A区第160号土壌出土遺物(1) ……	499

第400図	金井遺跡A区第160号土壌出土遺物(2) ……500	第450図	梵鐘鑄型集成・乳 ……565
第401図	二反田遺跡出土溶解炉 ……501	第451図	容器鑄型 ……566
第402図	二反田遺跡出土遺物 ……502	第452図	容器鑄型集成(1) ……567
(第3分冊)		第453図	容器鑄型集成(2) ……568
第403図	梵鐘鑄造土壌 ……504	第454図	獸脚鑄型 ……569
第404図	フイコ掘え跡 ……505	第455図	獸脚鑄型集成(1) ……570
第405図	鑄造土壌・整穴状遺構 ……507	第456図	獸脚鑄型集成(2) ……571
第406図	推定溶解炉 ……509	第457図	仏像鑄型集成 ……572
第407図	溶解炉出土部位復元図 ……510	第458図	仏具鑄型 ……573
第408図	溶解炉集成 ……511	第459図	飾り金具鑄型集成 ……574
第409図	鉄塊系遺物(製品) ……512	第460図	磬鑄型集成 ……574
第410図	鑄造遺物総計 ……513・514	第461図	つまみ鑄型集成 ……575
第411図	鑄造遺構群分割図 ……517	第462図	注ぎ口・鑄型集成 ……575
第412図	鉄塊系遺物(1) ……518	第463図	猿貝北遺跡出土遺物 ……576
第413図	鉄塊系遺物(2) ……519	第464図	三叉状土製品使用法 ……576
第414図	鉄塊系遺物(3) ……520	第465図	道具集成(1) ……577
第415図	炉壁集成 ……521	第466図	道具集成(2) ……578
第416図	炉壁(1) ……522	第467図	道具集成(3) ……579
第417図	炉壁(2) ……523	第468図	道具集成(4) ……580
第418図	炉壁(3) ……524	第469図	全国鑄造・製鉄遺跡分布図(古代) ……582
第419図	羽口集成 ……528	第470図	全国鑄造遺跡分布図(中世・近世) ……583
第420図	羽口(1) ……529	第471図	埼玉県内の製鉄・鑄造遺跡 ……584
第421図	羽口(2) ……530	第472図	中世鋳物師の本貫地 ……585
第422図	羽口(3) ……531	第473図	遺跡周辺分布図 ……586
第423図	銅(1) ……533	第474図	第10群第7号鑄造土壌出土梵鐘復元図 ……587
第424図	銅(2) ……534	第475図	現存する中世の梵鐘 ……588
第425図	銅(3) ……535	第476図	梵鐘蓮座集成 ……590
第426図	鉄滓(1) ……537	第477図	花菱形文様 ……591
第427図	鉄滓(2) ……538	第478図	見玉党分布図 ……592
第428図	鉄滓(3) ……539	第479図	金井周辺小字名 ……593
第429図	黒鉛化木炭集成 ……540	第480図	見玉党の家紋とスタンプ状石製品 ……594
第430図	木炭(1) ……541	第481図	土器接合関係図 ……597
第431図	木炭(2) ……542	第482図	中世土器編年図(1) ……599
第432図	木炭(3) ……543	第483図	中世土器編年図(2) ……601
第433図	白色滓(1) ……545	第484図	在地鉢分類図 ……602
第434図	白色滓(2) ……546	第485図	在地内耳輪分類図 ……603
第435図	白色滓(3) ……547	第486図	在地壺分類図 ……605
第436図	石(1) ……549	第487図	中世第Ⅱ期の集落(鑄造跡) ……607
第437図	石(2) ……550	第488図	鑄造遺構概念図 ……608
第438図	石(3) ……551	第489図	中世第Ⅲ期の集落 ……609
第439図	鑄型総計 ……552・553	第490図	古代の土器(第Ⅲ期) ……611
第440図	鑄型(1) ……555	第491図	古代の土器(第Ⅳ期) ……612
第441図	鑄型(2) ……556	第492図	古代の土器(第Ⅴ期) ……613
第442図	鑄型(3) ……557	第493図	古代の土器(第Ⅵ・Ⅶ期) ……613
第443図	鍋・羽釜・容器・犁先鑄型 ……558	第494図	古代の土器(第Ⅷ・Ⅷ期) ……614
第444図	各種鑄型(1) ……559	第495図	古代の土器(第Ⅸ・Ⅹ期) ……615
第445図	各種鑄型(2) ……560	第496図	古代集落変遷図(1) ……617
第446図	梵鐘鑄型 ……561	第497図	古代集落変遷図(2) ……618
第447図	梵鐘鑄型集成・攝座 ……562	第498図	古代集落変遷図(3) ……619
第448図	梵鐘鑄型集成・龍頭(1) ……563	第499図	掘立柱建物跡の変遷(1)・(2) ……620
第449図	梵鐘鑄型集成・龍頭(2) ……564	第500図	掘立柱建物跡の変遷(3) ……621

表 目 次

(第1分冊)

第1表	入西遺跡群一覽表	16
第2表	住居跡一覽表	90
第3表	掘立柱建物跡一覽表	111
第4表	第1鈔造遺構群遺物計量表	126
第5表	第1鈔造遺構群一覽表	135
第6表	第1区掘立柱建物跡一覽表	143
第7表	第1区溝跡一覽表	147
第8表	第1区天井跡一覽表	162
第9表	第1区土壇一覽表	170
第10表	第1区火葬墓一覽表	172
第11表	第2鈔造遺構群遺物計量表(1)	184
第12表	第2鈔造遺構群遺物計量表(2)	185
第13表	第3鈔造遺構群遺物計量表	188
第14表	第4鈔造遺構群遺物計量表	190
第15表	第2・3・4鈔造遺構群一覽表	191
第16表	第2区掘立柱建物跡一覽表	200
第17表	第2区溝跡一覽表	225
第18表	第2区天井跡一覽表	232
第19表	第2区土壇一覽表	254
第20表	第2区火葬墓一覽表	256

(第2分冊)

第21表	第5鈔造遺構群遺物計量表(1)	272
第22表	第5鈔造遺構群遺物計量表(2)	273
第23表	第5鈔造遺構群一覽表	301
第24表	第6鈔造遺構群遺物計量表(1)	311
第25表	第6鈔造遺構群遺物計量表(2)	312
第26表	第6鈔造遺構群一覽表	315
第27表	第7鈔造遺構群遺物計量表(1)	320
第28表	第7鈔造遺構群遺物計量表(2)	321
第29表	第7鈔造遺構群一覽表	327
第30表	第8鈔造遺構群遺物計量表(1)	340
第31表	第8鈔造遺構群遺物計量表(2)	341
第32表	第8鈔造遺構群一覽表	357
第33表	第9鈔造遺構群遺物計量表(1)	360
第34表	第9鈔造遺構群遺物計量表(2)	361
第35表	第9鈔造遺構群一覽表	361
第36表	第10鈔造遺構群遺物計量表(1)	376
第37表	第10鈔造遺構群遺物計量表(2)	377
第38表	第10鈔造遺構群一覽表	390

第39表	第11鈔造遺構群遺物計量表(1)	402
第40表	第11鈔造遺構群遺物計量表(2)	403
第41表	第11鈔造遺構群一覽表	419
第42表	第12鈔造遺構群遺物計量表(1)	422
第43表	第12鈔造遺構群遺物計量表(2)	423
第44表	第12鈔造遺構群一覽表	425
第45表	第13鈔造遺構群遺物計量表(1)	429
第46表	第13鈔造遺構群遺物計量表(2)	430
第47表	第13鈔造遺構群一覽表	433
第48表	第3区掘立柱建物跡一覽表	436
第49表	第3区溝跡一覽表	452
第50表	第3区天井跡一覽表	455
第51表	第3区土壇一覽表	455
第52表	第14鈔造遺構群遺物計量表	462
第53表	第15鈔造遺構群遺物計量表(1)	468
第54表	第15鈔造遺構群遺物計量表(2)	469
第55表	第14・15鈔造遺構群一覽表	470
第56表	第4区溝跡一覽表	470
第57表	第4区土壇一覽表	474
第58表	第5区溝跡一覽表	477
第59表	第5区土壇一覽表	481
第60表	第6区溝跡一覽表	483
第61表	第6区土壇一覽表	485
第62表	第7区溝跡一覽表	488
第63表	第7区天井跡一覽表	489
第64表	第7区土壇一覽表	491
第65表	第7区火葬墓一覽表	491
第66表	第8区土壇一覽表	492

(第3分冊)

第67表	鉄塊系遺物分類表(1)	515
第68表	鉄塊系遺物分類表(2)	516
第69表	炉壁分類表	525
第70表	羽口推定口径(1)	527
第71表	羽口推定口径(2)	532
第72表	白色埴形状分類	544
第73表	埼玉県の中世梵鐘一覽	589
第74表	物部氏製作梵鐘一覽	591
第75表	児玉家系図	594
第76表	三福寺出土遺物	595

付 図

付 図 金井遺跡B区全測図(1/400)

写真図版

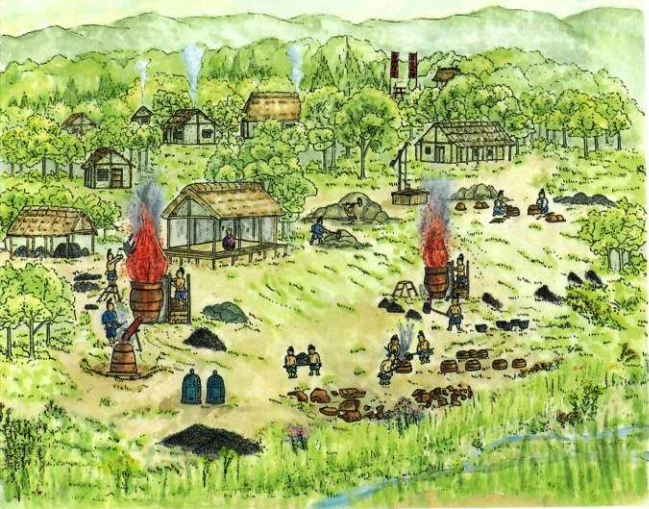
- | | |
|--|---|
| <p>図版1 金井遺跡B区全景</p> <p>図版2 西側調査区全景
東側緩斜面全景</p> <p>図版3 第1・2号住居跡
第3号住居跡
第4号住居跡</p> <p>図版4 第4号住居跡
第5号住居跡遺物出土状況
第6号住居跡</p> <p>図版5 第7号住居跡
第8号住居跡
第8号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版6 第8号住居跡遺物出土状況
第8号住居跡カマド遺物出土状況
第9号住居跡</p> <p>図版7 第10号住居跡
第11号住居跡
第11号住居跡カマド</p> <p>図版8 第13号住居跡
第13号住居跡カマド
第14号住居跡</p> <p>図版9 第16号住居跡
第17号住居跡
第17号住居跡カマド</p> <p>図版10 第17号住居跡カマド
第18号住居跡
第19号住居跡</p> <p>図版11 第19号住居跡遺物出土状況
第20号住居跡
第20号住居跡カマド</p> <p>図版12 第21号住居跡
第22号住居跡
第22号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版13 第22号住居跡カマド
第23号住居跡
第23号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版14 第24号住居跡
第24号住居跡遺物出土状況
第25号住居跡</p> <p>図版15 第27号住居跡
第29号住居跡
第30号住居跡</p> <p>図版16 第1号掘立柱建物跡
第2・7～9号掘立柱建物跡
第3号掘立柱建物跡</p> <p>図版17 第4・6・11号掘立柱建物跡
第5号掘立柱建物跡
第10号掘立柱建物跡</p> | <p>図版18 第12号掘立柱建物跡
第13号掘立柱建物跡
第14号掘立柱建物跡</p> <p>図版19 第15号掘立柱建物跡
第19号掘立柱建物跡</p> <p>図版20 第20号掘立柱建物跡
第21号掘立柱建物跡
第22号掘立柱建物跡</p> <p>図版21 第23号掘立柱建物跡
第24号掘立柱建物跡
第25・26号掘立柱建物跡</p> <p>図版22 西側調査区
第1鈣造遺構群
第1群第1号鈣込み跡</p> <p>図版23 第1群第1号鈣込み跡
第1群第2号鈣込み跡
第1群第2号鈣込み跡</p> <p>図版24 第2鈣造遺構群
第2群第2号鈣造土壇確認状況
第2群第5号鈣造土壇</p> <p>図版25 第2群第1号鈣込み跡
第2鈣造遺構群遺物出土状況1
第2鈣造遺構群遺物出土状況2</p> <p>図版26 第2鈣造遺構群古銭出土状況
第3鈣造遺構群
第3鈣造遺構群</p> <p>図版27 第4鈣造遺構群鉾沖出土状況
第4鈣造遺構群</p> <p>図版28 第5鈣造遺構群粘土貼床
第5鈣造遺構群
第5鈣造遺構群</p> <p>図版29 第5群第1～8号鈣造土壇
第5群第1号鈣造土壇</p> <p>図版30 第5群第1号鈣造土壇梵鐘型出土状況
第5群第1号鈣造土壇梵鐘型出土状況
第5群第2号鈣造土壇遺物出土状況
第5群第9号鈣造土壇</p> <p>図版31 第5群第1号溶解炉
第5群第1号溶解炉断面
第5群第2号溶解炉</p> <p>図版32 第5群第2号溶解炉
第5群第1号鈣込み跡
第5群炉体5号炉壁出土状況</p> <p>図版33 第5群炉体5号トリベ出土状況
第6鈣造遺構群遺物出土状況
第6群第3号鈣造土壇</p> <p>図版34 第6群第4号鈣造土壇
第6群第6号鈣造土壇</p> |
|--|---|

- 第6群第1号炉跡
 図版35 第7群第1号鋤造土壇
 第7群第1号鋤造土壇遺物出土状況
 第7群第3号炉跡
 図版36 第8鋤造遺構群確認状況
 第8鋤造遺構群確認状況
 第8鋤造遺構群
 図版37 第8群第3号鋤造土壇
 第8群第1号鋤造土壇
 第8群第1号炉跡
 図版38 第8群第2号炉跡
 第8群円形還元状遺構
 第8群第2号虎滓
 図版39 第8群第7号虎滓
 第9群第1号虎滓
 第9群第2号虎滓
 図版40 第10鋤造遺構群
 第10群第1・5号鋤造土壇
 第10群第1号鋤造土壇
 図版41 第10群第1号鋤造土壇
 第10群第1号鋤造土壇金類出土状況
 第10群第1号鋤造土壇梵鐘鋤型出土状況
 図版42 第10群第2号鋤造土壇
 第10群第3号鋤造土壇
 第10群第5号鋤造土壇
 図版43 第10群第5号鋤造土壇
 第10群第7号鋤造土壇
 第10群第7号鋤造土壇梵鐘鋤型出土状況
 図版44 第10群第7号鋤造土壇梵鐘鋤型出土状況
 第10群第1号炉跡粘土貼床
 第10群第1号炉跡粘土貼床
 図版45 第10群第2・3号炉跡
 第10群第1号鋤込み跡鋤型出土状況
 調査区東側緩斜面
 図版46 第11鋤造遺構群
 第11群第2号鋤造土壇
 第11群第2号鋤造土壇遺物出土状況
 図版47 第11群第3号鋤造土壇
 第11群第4号鋤造土壇・第1・2号鋤込み跡
 第11群第4号鋤造土壇
 図版48 第11群第2号鋤込み跡・第4号鋤造土壇・
 第10号井戸跡
 第11群第2号鋤込み跡
 第11群ビット7鋤型出土状況
 図版49 第11群P-14グリッド仏像鋤型出土状況
 第11群P-13-hグリッド仏像鋤型出土状況
 第12群第1号鋤造土壇
 図版50 第13群第1号虎滓
 第14鋤造遺構群
 第14鋤造遺構群
 図版51 第14鋤造遺構群
 第14群第1号鋤込み跡
 第14群第1号鋤込み跡
 図版52 第14群第1号鋤込み跡
 第15群第1号鋤造土壇
 第15群第2号虎滓
 図版53 第85号土壇
 第1号炭焼き空跡
 第2区土壇群1
 図版54 第2区土壇群2
 第2区土壇群3
 第1号土壇
 第4号土壇
 図版55 第89号土壇
 第90号土壇
 図版56 第90号土壇断面
 第91号土壇
 第92号土壇遺物出土状況
 図版57 第117号土壇
 第117号土壇鋤型出土状況
 第118号土壇
 図版58 第161号土壇
 第174号土壇羽口出土状況
 第183号土壇遺物出土状況
 図版59 第1号井戸跡
 第1号井戸跡木杭出土状況
 第1号井戸跡木杭出土状況
 図版60 第2号井戸跡
 第3号井戸跡
 第3号井戸跡出土状況
 図版61 第3号井戸跡曲物出土状況
 第3号井戸跡板碑出土状況
 第4号井戸跡
 図版62 第4号井戸跡井戸枠出土状況1
 第4号井戸跡井戸枠出土状況2
 第4号井戸跡井戸枠出土状況3
 図版63 第4号井戸跡井戸枠出土状況4
 第5号井戸跡
 第6号井戸跡
 図版64 第7号井戸跡
 第8号井戸跡
 第9号井戸跡
 図版65 第10号井戸跡
 第11号井戸跡木製品出土状況
 第12号井戸跡
 図版66 第13号井戸跡
 第14号井戸跡
 第7号溝跡
 図版67 第7号溝跡遺物出土状況
 第7号溝跡遺物出土状況

- 第22号溝跡遺物出土状況
 図版68 第22号溝跡遺物出土状況
 第22号溝跡遺物出土状況
 第22号溝跡獸脚鎚型出土状況
 図版69 第30号溝跡 1
 第30号溝跡 2
 第30号溝跡鎚型出土状況
 図版70 第30号溝跡・第174号土塊
 第30号溝跡 3
 第50号溝跡
 図版71 第1号粘土探掘跡
 第1号粘土探掘跡
 第2号粘土探掘跡
 第2号粘土探掘跡
 第3号粘土探掘跡
 第3号粘土探掘跡
 図版72 第1号集石土塊
 第1号火葬墓
 第5号火葬墓
 第8号火葬墓
 第2号集石土塊
 第4号火葬墓
 第8号火葬墓確認状況
 第13号火葬墓
 図版73 住居跡出土遺物 1
 図版74 住居跡出土遺物 2
 図版75 住居跡出土遺物 3
 図版76 住居跡出土遺物 4
 図版77 住居跡・井戸跡出土遺物
 図版78 土器・石器
 図版79 木器碗・曲物
 図版80 白磁・青磁碗
 図版81 青磁碗
 図版82 青磁碗・常滑甕
 図版83 常滑片口鉢
 図版84 常滑片口鉢
 図版85 瀬戸四耳壺・鉢・備前播鉢・志野
 図版86 瀬戸皿・鉢・盤
 図版87 瀬戸碗
 図版88 濯美・瀬戸壺・在地土師質皿
 図版89 在地壺・在地内耳鍋
 図版90 在地片口鉢
 図版91 炉壁
 図版92 炉壁
 図版93 炉壁
 図版94 炉壁
 図版95 炉壁：クライ・羽口・ノミ口
 図版96 羽口
 図版97 鍋・容器・鞆先・鏡・つまみ・注ぎ口鎚型
 図版98 三叉状土製品・半球状土製品・木製品
 図版99 仏像鎚型
 図版100 梵鐘鎚型（隔鐘文字）・獸脚鎚型
 図版101 獸脚鎚型
 図版102 獸脚鎚型
 図版103 容器・獸脚鎚型・猫足鎚型
 図版104 飾り金具鎚型
 図版105 三叉状土製品
 図版106 三叉状土製品・砥石
 図版107 トリベ・鍛冶羽口・道具・紡錘車・土鍾
 図版108 銅塊・銅滓
 図版109 鉄塊系遺物
 図版110 ハタまわし（X線写真）
 図版111 鉄塊系遺物（X線写真）
 図版112 鉄製壺（X線写真）
 鉄塊系遺物（X線CT写真）
 図版113 鑄造関連分析資料 1・2
 図版114 鑄造関連分析資料 3・4
 図版115 自然化学分析（炭化材）
 図版116～143 顕微鏡組織
 図版136～145 CMA
 図版146～153 顕微鏡組織
 図版154～161 CMA

金井遺跡B区想像図

—平成2年現地説明会資料より転載—



3 第3区の遺構と遺物

本区は金井遺跡の中心的鑄造遺構群が展開する東側の二段からなる緩斜面部分にあたる。台地上の標高は30.0m、一段目の斜面を下がったテラス部分は標高28.2m、二段目の緩斜面を下った部分では標高27.0mである。全体の比高差は3mとなる。

台地を切り込んで平坦面を造りだし作業場としたのが第7・8鑄造遺構群第1号土壇や第4号土壇である。また、第5・10鑄造遺構群は第1斜面部を利用して梵鐘鑄造の作業をしている。第6鑄造遺構群は台地上の平坦面から第1斜面にかけてやや大型の仏具用品の鑄造作業をしており、第11鑄造遺構群は第1と第2斜面の平坦なテラス部分を利用して仏具製品の鑄造作業をしていることが明らかとなった。この他、第9・12鑄造遺構群は廃滓場として役割を担っていたものと考えられる。

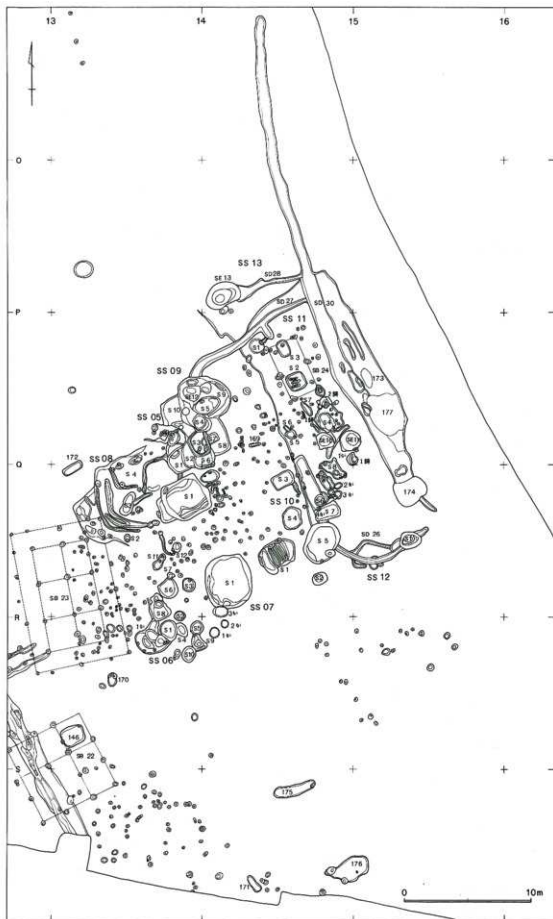
特に注目すべき点は鑄造のための溶解炉を2基原位置で確認できたことである。第1号溶解炉は炉底部が、第2号溶解炉は炉底から「ル」の胴部が一部残り全国的に見ても貴重な資料と思われる。

出土した鑄造遺物は大量である。緩斜面の堆積層は1mの小グリッドを設定し取り上げ、遺構の検出された部分は遺構名を付したが遺物の取り上げは小グリッドを基本とした。中でも、第5鑄造遺構群の第1～10号鑄造土壇内からはまとめて梵鐘鋳型を検出したり、溶解炉片を検出した。

本区は台地上に第7号溝が南北に走り、溝中央には本区鑄造遺構群の入口の形態をもつ第8号溝が存在する。また、東側は地形にそって斜面裾部を第30号溝が南北に走る。遺構の広がりには斜面に直交する形であるが、東西は両溝によって区切られている。



東側緩斜面（南側から）



第221图 第3区遺構配置図

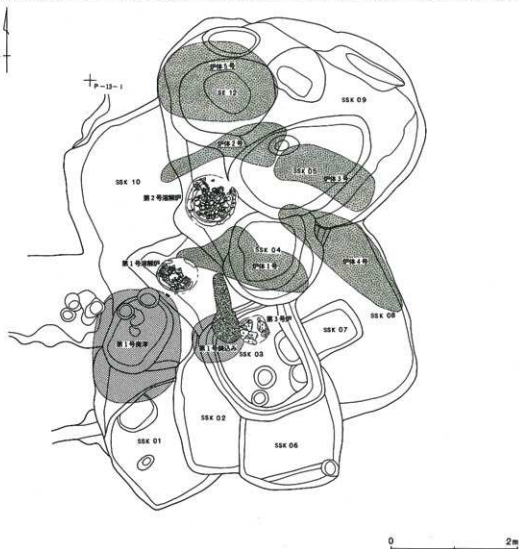
(1) 鋳造跡

a 第5鋳造遺構群

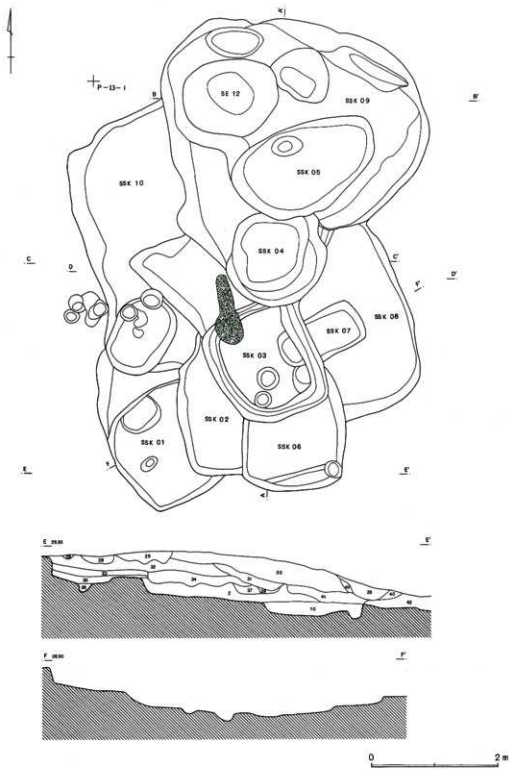
調査区東側の第1斜面に展開する鋳造遺構群である。西側には第8鋳造遺構群、東側の第2斜面上には第10・11・12鋳造遺構群、北側には第13鋳造遺構群、南側に第6・7鋳造遺構群が存在する。これらの第5～13鋳造遺構群は東側の二段からなる第1・2斜面に展開し梵鐘を始めとして小仏像、磬、飾り金具、獣脚等の仏具用品を生産する一大鋳造遺構を形成していたと考えられる。本群はその中でも中心的位置のP-13・14区にあたる。

本群は第1・2・3号溶解炉、第1～10号鋳造土塊、炉体1～5号、第1号鋳込み跡、第1号廃滓で構成されている。

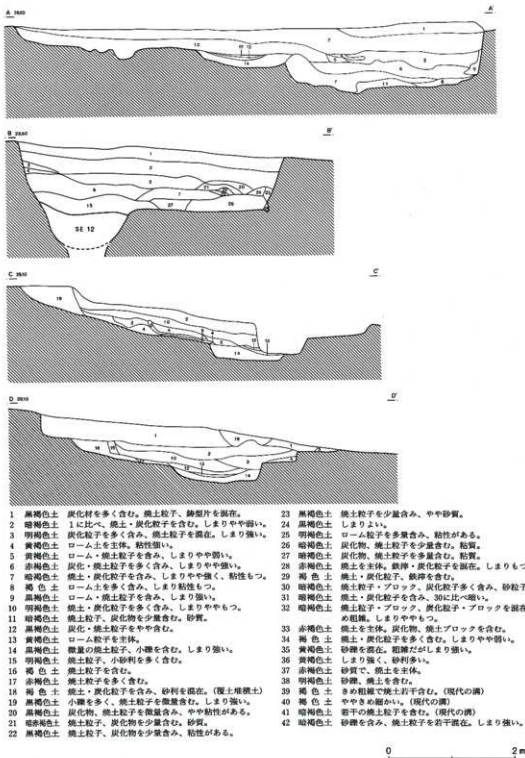
第1～3号溶解炉は確認面あるいは確認面から約10cm程の高い位置で検出した。また、第3号溶解炉に隣接した西寄り第1号鋳込み跡を検出。第1～10号土塊は確認面では形態を把握すること



第222図 第5鋳造遺構群全体図(1)



第223图 第5 铸造道構群全体図(2)



- | | | | |
|----------|----------------------------|---------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 炭化材を多く含む。焼土粒子、鈍型片を混在。 | 23 黒褐色土 | 焼土粒子を少量含む、やや砂質。 |
| 2 暗褐色土 | 1に比べ、焼土・炭化粒子を含む。しまりやや弱い。 | 24 黒褐色土 | しまりよい。 |
| 3 明褐色土 | 炭化粒子を多く含む。焼土粒子を混在。しまり強い。 | 25 明褐色土 | ローム粒子を多量含む、粘性がある。 |
| 4 黄褐色土 | ローム土を主体。粘性強い。 | 26 暗褐色土 | 炭化物、焼土粒子を少量含む。粘質。 |
| 5 黄褐色土 | ローム・焼土粒子を含む、しまりやや弱い。 | 27 暗褐色土 | 炭化物、焼土粒子を少量含む。粘質。 |
| 6 赤褐色土 | 炭化・焼土粒子を多く含む、しまりやや強い。 | 28 赤褐色土 | 焼土を主体。鉄滓・炭化粒子を混在。しまりもつ。 |
| 7 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む、しまりやや強く、粘性もつ。 | 29 褐色土 | 焼土・炭化粒子を含む。鉄滓を含む。 |
| 8 褐色土 | ローム土を多く含む、しまり粘性もつ。 | 30 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む、砂粒子混在。 |
| 9 黒褐色土 | ローム・焼土粒子を含む、しまり強い。 | 31 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含む、30に比べ強い。 |
| 10 明褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む、しまりややもつ。 | 32 暗褐色土 | 焼土粒子・ブロック、炭化粒子・ブロックを混在。きめ粗雑。しまりややもつ。 |
| 11 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を少量含む。 | 33 赤褐色土 | 焼土を主体。炭化物、焼土ブロックを含む。 |
| 12 黒褐色土 | 炭化・焼土粒子をやや含む。 | 34 褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりやや弱い。 |
| 13 黄褐色土 | ローム粒子を主体。 | 35 黄褐色土 | 砂礫を混在。粗雑だがしまり強い。 |
| 14 黒褐色土 | 微量の焼土粒子、小礫を含む。しまり強い。 | 36 黄褐色土 | しまり強く、砂利多い。 |
| 15 明褐色土 | 焼土粒子、小砂利を多く含む。 | 37 赤褐色土 | 砂質で、焼土を主体。 |
| 16 褐色土 | 焼土粒子を含む。 | 38 明褐色土 | 砂礫、焼土を含む。 |
| 17 赤褐色土 | 焼土粒子を多く含む。 | 39 褐色土 | きめ粗雑で焼土若干含む。(現代の溝) |
| 18 褐色土 | 焼土・炭化粒子を含む、砂利を混在。(覆土堆積土) | 40 褐色土 | ややきめ細かい。(現代の溝) |
| 19 黒褐色土 | 小礫を多く、焼土粒子を微量含む。しまり強い。 | 41 暗褐色土 | 若干の焼土粒子を含む。(現代の溝) |
| 20 黒褐色土 | 炭化物、焼土粒子を微量含む、やや粘性がある。 | 42 暗褐色土 | 砂礫を含む、焼土粒子を若干混在。しまり強い。 |
| 21 暗赤褐色土 | 焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。 | | |
| 22 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化物を少量含む、粘性がある。 | | |

第224図 第5鈔遺構群全体図(3)

ができなかったが、厚い堆積層を掘り進んで地山の砂利混じりのローム土に達して形態を把握することができた。これらの土壌は連続して重なり合っていた。特に、南側の第1・2・3・6・7・8号土壌の覆土中からは多くの梵鐘鋳型片を出土した。炉体1～5号は溶解炉片の投棄されたままとまりを意味し、主に北側の第4・5・9号土壌底面付近で検出された。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口の鋳造遺物を検出した。特に、鋳型は梵鐘鋳型33395gを計量し、このことは、本遺構群が梵鐘鋳造に関わっていたことが窺える。

遺構

第1号溶解炉 (第225図)

東側緩斜面の肩部確認面から第1号溶解炉を検出した。溶解炉(こしき)は「[倉吉の鋳物師]」によれば上こしき・こしき・下こしき・湯だめ(ル)にわけられている。また、こしき炉の総称を溶解炉としていることから本書でも溶解炉と呼ぶ。第1号溶解炉は、滓・炉壁等の鋳造遺物を含む堆積層の上に粘土(第9層)を張り込み作業面を形成し、第3・8層の間層をもって第1層の上に溶解炉を自立させたものと考えられる。確認面で炉壁片が集中し外側にリング状の焼土を検出した。断面観察の第2層がこの部分にあたる。炉壁は原位置を留めているものと考えられ、いずれも炉底部の破片であり、ル(釜)にあたる部分と考えられる。炉の規模は焼土の径が58cm、炉壁の厚さが5cmである。注意される点は炉底部中央の炉壁が残存していないことである。また、固定式と考えられる。炉壁は内面の湯滓が厚く1.1cm程付着し、表面には0.5cm前後の気泡が見られ、やや鈍い黒色の滓に径1.1～0.5cmの鉄粒が多く付着している。湯滓に接する中間粘土は2cm程の厚さで還元され青灰色である。裏面は赤色の粘土が1cmほどある。

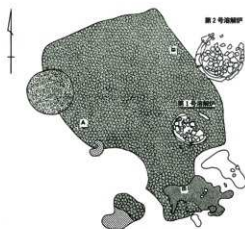
第2号溶解炉 (第226図)

第1号溶解炉の北側30cmの位置に検出した。第2号溶解炉は第1号溶解炉を構築した際に張り込んだと考えられる粘土面の一部を壊して構築されている。炉底部のみの検出であるが基設されていた位置から動いていないと考えられる。断面観察によると6～8・10～14層の堆積層を切り込んで第15層を埋め戻し第1・3・9層で埋めて炉底部を支えていると考えられる。炉はまず第1面としたものが確認段階の状態である。炉形はほぼ円形に回る厚さ5～7cmの炉壁で、内面は溶解物の湯滓が厚さ2.2cm付着している。炉内には炉壁の小片が数多く検出された。これらの炉壁片を取り除いてみると、大きな礫石を5個と小礫を同じ高さから検出した。いずれも、整然と敷き詰められ、石と石の間は粘土を充填しており、炉内底部を形成しているものと考えられる。溶解物の付着は認められず充填された粘土も石も被熱された様子はない。炉の規模は外径で77cmである。

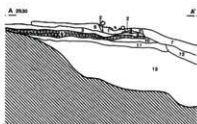
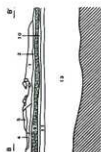
遺物の特徴は鋳型片を殆ど含まず、炉壁2の炉底部部分が多い。炉の湯滓面には径0.3～0.5cm程の円形をした気泡をもつ。また、銅滓1を数点検出した。このほかの特徴として滓4'が数点認められた。

第3号炉 (第227図)

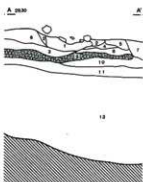
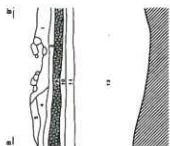
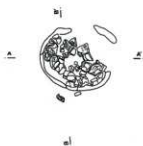
第5群の中央やや南よりで検出された。近接して梵鐘鋳型をまとまって出土した第1号鋳込み跡が存在する。本炉は第1・2号溶解炉と異なり炉壁を伴わず、径20cm前後の礫が47cm程の範囲で据



14 m



0 2 m

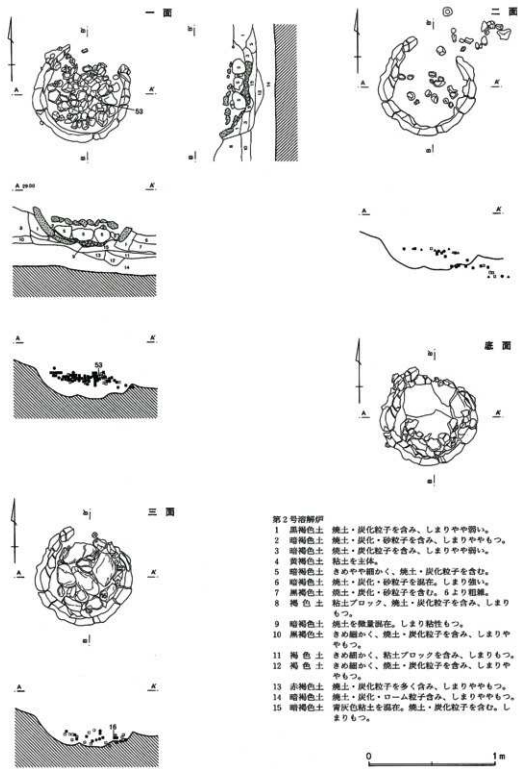


第1号溶解炉

- 1 褐色土 焼土・炭化粒子を含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子を多量含み、粘土粒子を少量混入。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒子、石、焼土塊を含む。
- 4 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。
- 5 黒褐色土 焼土・炭化粒子微量含む。
- 6 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、砂粒、小石を混在。
- 7 黒褐色土 焼土・炭化粒子を含む、しまり弱く、ザラザラ。
- 8 褐色土 焼土塊、銅型片を混在。
- 9 淡灰色土 粘土をブロック状に含む。焼土・炭化粒子を混在。
- 10 暗褐色土 粘土ブロックを混在。焼土・炭化粒子を含む。
- 11 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、小石を若干混入。しまりややもつ。
- 12 暗褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりもつ。(斜面堆積土)
- 13 暗褐色土 砂質土を主体。炭化・焼土粒子を混在。

0 1 m

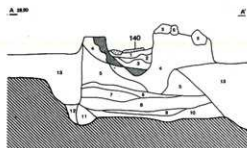
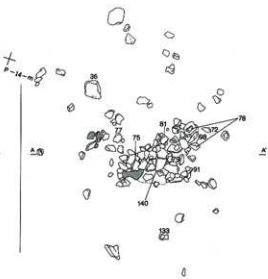
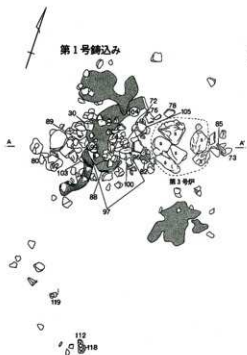
第225図 第5群第1号溶解炉跡



第2号溶解伊

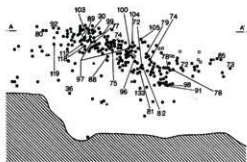
- 1 黒褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化・砂粒子を含み、しまりややもつ。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。
- 4 黄褐色土 粘土を主体。
- 5 暗褐色土 きめやや細かく、焼土・炭化粒子を含む。
- 6 暗褐色土 焼土・炭化・砂粒子を混在。しまり強い。
- 7 黒褐色土 焼土・炭化・砂粒子を含む。6より粗雑。
- 8 褐色土 粘土ブロック、焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。
- 9 暗褐色土 焼土を微量混在。しまり粘性もつ。
- 10 黒褐色土 きめ細かく、焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 11 褐色土 きめ細かく、粘土ブロックを含み、しまりもつ。
- 12 褐色土 きめ細かく、焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 13 赤褐色土 焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
- 14 暗褐色土 焼土・炭化・ローム粒子含み、しまりややもつ。
- 15 暗褐色土 青灰色粘土を混在。焼土・炭化粒子を含む。しまりもつ。

第226図 第5群第2号溶解伊跡



第3号跡・第1号跡込み

- 1 褐色土 焼土・炭化粒子も含まない砂質土。
- 2 赤褐色土 焼土塊、炭化粒子を含む。しまり弱い。
- 3 赤褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりやや弱い。
- 4 褐色土 炭化物多く、焼土・炭化粒子を混在。小砂利を混入。
- 5 褐色土 4に比べ、明るい。炭化・炭化粒子、小石を混在。
- 6 黄褐色土 粘土を主体として粘っている。
- 7 暗褐色土 炭化粒子を多量、粘土ブロックを少量含む。焼土粒子、小礫を混入。
- 8 暗褐色土 焼土・炭化粒子、礫を混在。しまりややもつ。
- 9 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物の塊層。
- 10 褐色土 焼土・炭化粒子を少量含む。しまりもつ。
- 11 褐色土 径5mm前後の焼土粒子、1cmほどの炭化粒子を含む。
- 12 茶褐色土 径1~2mmの焼土・炭化粒子を含む。
- 13 暗褐色土 焼土・炭化粒子、沖、礫などを含む。



第227図 第5群第3号跡・第1号跡込み跡

えられた状態でまとめて検出し、炉台として考えられる。

第1号鋳込み跡 (第227図)

第3号炉の西側に第244図140の不明鋳型を検出した。この鋳型は掘り込みをもつ地焼炉のような遺構内の第1層の砂質土上面から検出された。覆土第2・3層は焼土・炭化粒子を多く含む赤褐色土である。本遺構の上面からは梵鐘鋳型を多く検出し、第1・2・3号鋳造土壌上面から検出された梵鐘鋳型と同一個体と考えられる。

第1号鋳造土壌 (第223・224図)

本遺構は南側にあたり、第2・6号鋳造土壌よりも新しいと考えられる。形態は方形であり東側は第2鋳造土壌と重複関係にある。規模は南北1.80m、東西の長さは正確なところが不明である。しかし第2号鋳造土壌の上に堆積した覆土を伴い、また、同一レベルから出土している梵鐘鋳型の分布範囲から推定すると南北の長さとはほぼ同一と考えられる。深さは30cm程で底面はわずかに東に向けて傾斜し径28cmのピットが存在する。

第2号鋳造土壌 (第223・224図)

本遺構は南側にあたり、第1と第6号鋳造土壌の中間に位置する。北東側には第3号土壌と重複関係にある。形態は長方形と推定される。規模は南北1.80m、東西の長さは正確なところが不明である。底面は平坦で第1鋳造土壌の底面の高さからさらに25cm深く掘り下げられていた。

遺物は銅滓・銅粒を検出。また、緑青を吹く炉壁4も検出した。白色滓や炉3を多く検出し、滓4'も他に比べ多く計量した。特に滓4'は径1cm程の白色の石をかみ径3〜4cmほどで20〜30gの重さである。

第3号鋳造土壌 (第223・224図)

本遺構は第2・6号鋳造土壌の北側壁を壊して造られ新しいと考えられる。形態は長方形であり底面は平坦である。底面の中央やや南寄りにピットを検出した。壁には幅20cm前後、深さ10cmの周溝を全周させる。東寄りには第7鋳造土壌の浅い掘り込みが重複して見られる。新旧関係は不明である。規模は南北1.85m、東西1.54m、深さは第2鋳造土壌よりさらに10cm深い。北側は炭化材集集中区で炭化材が覆っている。

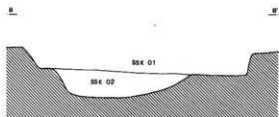
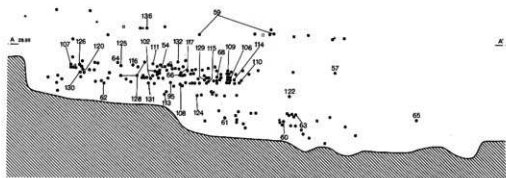
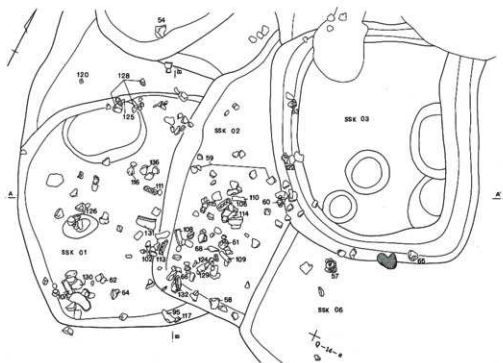
第4号鋳造土壌 (第223・224図)

本遺構は鋳造土壌群のほぼ中央にあたり、第3・5・8号鋳造土壌よりも古いと考えられる。形態は円形に近く、規模は径1.50m、深さは第8鋳造土壌の底面よりもさらに35cm程低く、底面の状態は平坦であるが周辺部がやや高く皿状をしている。断面観察によると覆土は第14層の微量の焼土粒子、小礫を含みしりの強い黒褐色土が堆積している。上層には貼床と考えられるローム粒を主体とした黄褐色土が厚さ2cm程張り込まれていた。また、南側に検出された炉体4号の残片を検出した。

第5号鋳造土壌 (第223・224図)

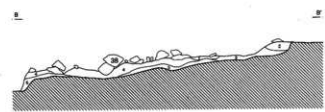
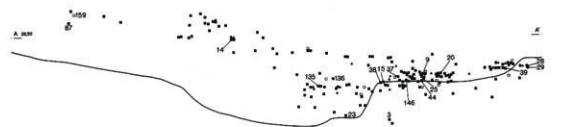
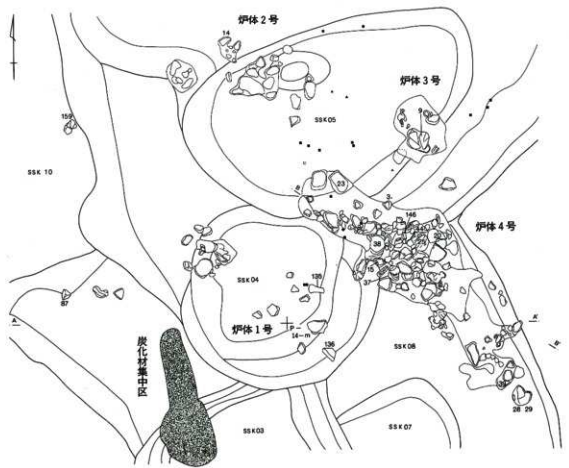
本遺構は北側にあたり、第9号鋳造土壌よりも新しいと考えられる。形態は楕円形であり北側に第9号、南側に第4号鋳造土壌と重複関係にある。規模は南北1.41m、東西2.34m、深さは確認面から90cmを測り土壌群内で最も深い。覆土上層には炉体3号が検出されている。

遺物は大型滓を含み鉄塊も大きい。滓1には黄白色のものを数点検出した。



0 1 m

第228图 第5群第1・2号土墙遗物分布图



- 炉体 4号
- 1 赤褐色土 焼土を主体。
 - 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。
 - 3 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。ややハード。
 - 4 黒褐色土 焼砂を主体。焼土粒子、炭化物多量。砂質。
 - 5 赤褐色土 炭化物を多量含む。砂質。
 - 6 黒褐色土 暗茶褐色ローム・焼土粒子を少量含む。



第229図 第5群炉体1～4号遺物分布図

第6号鑄造土塊 (第223・224図)

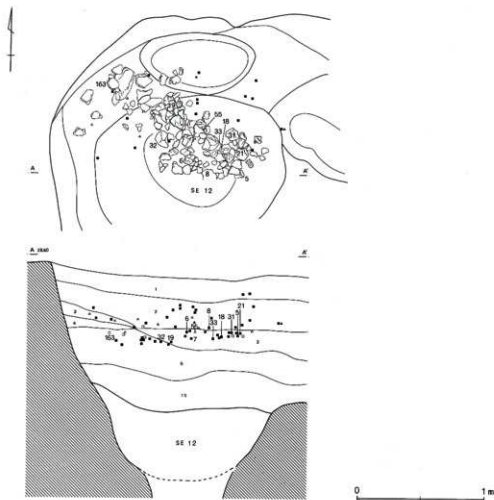
本遺構は南側にあたり、第2・3・8号鑄造土塊と重複関係にある。形態は長方形であり北側は第3号鑄造土塊と重複し正確な規模は不明であるが、推定される規模は南北2.00m、東西1.63m、深さ35cmである。底面は小砂利混じりのローム土であり平坦で徐々に北に向けて傾斜する。底面の高低差は最大で10cmである。

第7号鑄造土塊 (第223・224図)

本遺構は南東側にあたり、第3・8号鑄造土塊と重複関係にある。形態は長方形であり東西方向に主軸をもつ。西側は第3号鑄造土塊に壊されている。東側は第8号鑄造土塊と重なり新しいと考えられる。規模は本群内で最も小さく東西1.40m、南北0.68m、深さは5～10cm程である。

第8号鑄造土塊 (第223・224図)

本遺構は南東側にあたり、北側から西側にかけて第3～7号鑄造土塊と重複関係にある。形態は



第230図 第5群炉体5号遺物分布図

やや大型の長方形であると推定される。規模は南北2.30m、東西の長さは正確なところが不明であるが残存長は1.63m、深さは13cmである。北よりの覆土上層中には炉体4号を検出している。

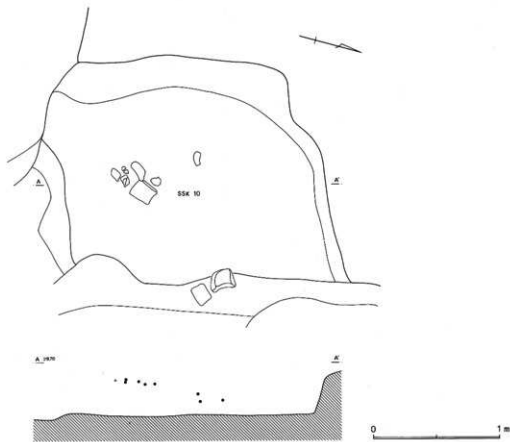
第9号鑄造土壙 (第223・224図)

本遺構は北側にあたり、第5号鑄造土壙と重複関係にあり、また、本遺構より古い第12号井戸跡を確認した。形態は大型の楕円形と推定される。規模は南北4.06m、東西4.40m、深さ1m以上である。覆土の堆積土中からは多量の炉壁や羽口、鉄滓等を出土した。

遺物は湯滓面がさまざまな表状をもつ炉1を検出した。中でも、湯滓面が黒色でタール状のものや灰褐色で細かな気泡をもつものなどが出土している。滓は、滓1が大ききもので径6cm×100g、径5cm×50g、小さいものは径3cm×15g程である。大型滓は径10cm前後×200g以上である。

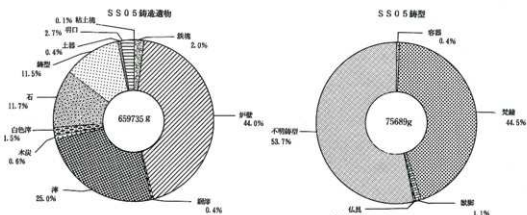
第10号鑄造土壙 (第231図)

本遺構は北西側にあたる。形態は方形であり東側は第9号鑄造土壙と重複関係にある。規模は南北2.30m、東西1.82mである。掘り込みの深さは25cm程であり、底面は小砂利を混在するローム土を利用し平坦である。



第231図 第5群第10号鑄造土壙遺物分布図

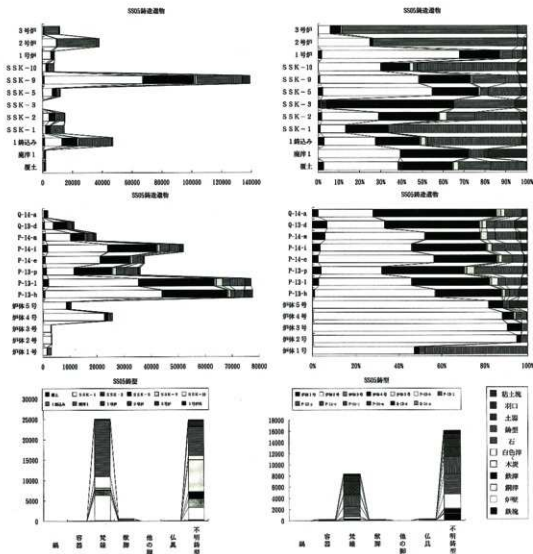
第21表 第5 鈎造遺構群遺物計量表(1)



小遺物	鉄塊	伊 壁	銅片	鉄片	木炭	白色母	石	土器	鋼口	粘上土
覆土	56	747	51	496	10	50	329	350	8	10
1 鈎込み	1	820	0	885	1	10	139	40	380	0
S.S.K-1	1369	11933	112	9925	304	971	487	2104	20	1155
S.S.K-2	169	172	3	2848	37	50	94	508	42	278
S.S.K-3	270	4124	15	4365	70	535	2015	3360	1	380
S.S.K-5	2	0	5	159	0	0	50	0	0	70
S.S.K-9	256	22939	10	2865	130	0	440	1919	15	919
S.S.K-9	1234	85999	813	3817	845	1010	11979	8609	316	4786
S.S.K-10	17	5654	15	1097	26	189	196	3830	15	385
1号母	157	5997	21	1589	40	41	422	393	46	118
2号母	12	964	32	493	18	24	28821	1061	0	523
3号母	30	172	15	374	0	88	9919	525	0	13
伊壁1号	0	1480	0	71	0	0	75	1508	0	0
伊壁2号	12	3184	0	65	0	0	0	98	0	0
伊壁3号	0	2883	0	212	0	0	0	90	0	0
伊壁4号	84	22846	89	1321	5	249	984	624	25	100
伊壁5号	0	8688	0	707	27	33	153	371	657	0
P-13	824	43392	330	28654	457	919	1612	3139	420	2971
P-13-1	2210	35130	355	47672	742	2340	2779	5469	257	2059
P-13-2	1445	10183	112	17795	498	1276	3084	5010	119	677
P-14	1006	23348	91	19119	118	613	1325	3079	75	112
P-14-1	1937	22039	318	17857	347	986	3418	3842	75	1278
P-14-2	1199	92120	93	5040	89	563	739	1984	371	663
Q-12-a	802	3144	99	3577	163	320	450	1094	48	655
Q-14	95	521	0	1177	45	35	81	95	19	45
合計	13170	590137	2578	199278	4972	19143	77900	75688	2484	17699

小遺物	鋼	容筒	瓦礫	脱脚	他の脚	仏具	不明物	日用品小計	仏具小計	銅型合計
覆土	0	0	110	0	0	0	240	0	110	350
S.S.K-1	0	0	5183	0	0	0	3073	0	6182	9266
S.S.K-2	0	0	1200	80	0	0	2089	0	1280	3360
S.S.K-5	0	0	175	0	0	0	1735	0	175	1910
S.S.K-9	0	0	38	440	211	0	29	7891	0	714
S.S.K-9	0	0	2883	0	0	0	987	0	2883	3836
S.S.K-10	0	0	13715	300	0	0	7068	0	14015	21084
覆土1	0	0	0	0	0	0	135	0	0	135
1号母	0	0	116	0	0	0	142	0	116	254
2号母	0	0	0	0	0	0	1981	0	0	1981
3号母	0	0	243	0	0	0	282	0	243	525
1号伊壁	0	0	18	0	0	0	188	0	18	135
伊壁1号	0	0	292	0	0	0	1216	0	292	1508
伊壁2号	0	0	6	0	0	0	92	0	6	98
伊壁3号	0	0	0	0	0	0	90	0	0	90
伊壁4号	0	0	32	16	0	0	578	0	48	624
伊壁5号	0	0	0	0	0	0	151	0	0	151
P-13	0	0	265	0	0	174	2900	0	265	3139
P-13-1	0	0	1831	19	0	0	2618	0	1850	5489
P-13-2	0	0	1930	0	0	0	3080	0	1930	5010
P-14	0	0	183	304	8	0	1624	0	435	2079
P-14-1	0	0	2236	47	0	0	1557	0	2293	3840
P-14-2	0	0	87	334	115	0	95	860	0	1191
Q-12-a	0	0	39	365	0	0	35	0	463	1094
Q-14	0	0	10	0	0	0	79	0	10	89
合計	0	0	281	3325	791	0	3031	40911	3475	75688

第22表 第5 鑄造遺構群遺物計量表(2)



遺物

鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊13170g、炉壁290197g、銅滓2576g、鉄滓166076g、木炭4072g、白色滓10143g、石77300g、鑄型75689g、土器2484g、羽口17686g、粘土塊342gを計量した。遺物は各遺構覆土および上層を厚く覆っていた堆積層内から検出したグリッド出土遺物の合計である。遺物は計量比から見ると遺構内とグリッド出土遺物がほぼ半々のものとどちらか一方が極端に多いものがあることが窺える。鉄塊・鉄滓・白色滓・木炭の溶解時にできる廃滓遺物はグリッド出土の方が多い。このことは、堆積層が自然の堆積物で構成されたのではなく鑄造遺物の組成から推定すると溶解炉の廃滓場として利用されていたものと考えられる。また、遺構内

からは鋳型が多く本遺構が鋳込み土壌としての性格を持っていたことが推測できる。さらに、注意されることは炉壁と羽口の溶解遺物がどちらも半々の同量であった。特に、炉底部を検出した第1・2号溶解炉や土壌内からまとまって検出した炉体1～5号の検出が梵鐘鋳造時の溶解炉として関連性があるものと考えられる。

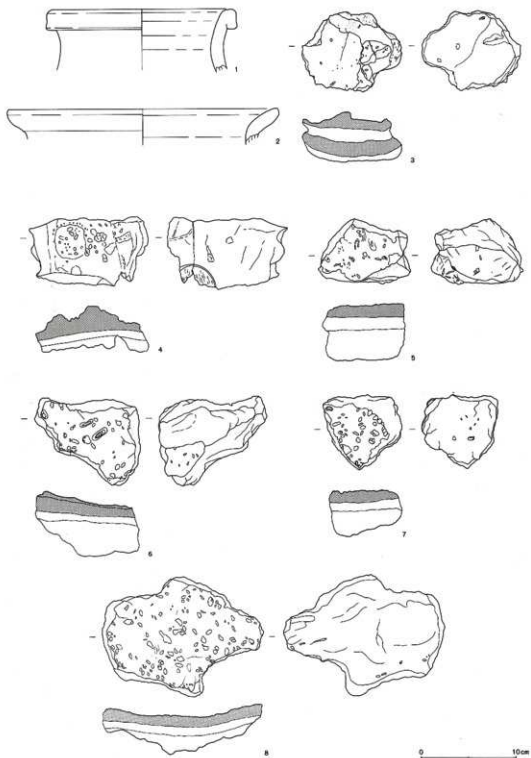
鋳型種類は、容器286g、梵鐘33395g、獸脚791g、仏具303g、不明40914gを計量し、圧倒的に梵鐘鋳型を多く検出した。また、グリッドから幅3.1cmの木炭を検出した。溶解炉内に使用する木炭の大きさが推定される。

土器は、1が常滑の広口壺である。第9号鋳造土壌出土。2が渥美の壺である。P-14-m-1出土であるが、第1号井戸跡出土の渥美壺破片と同一個体の可能性を持つ。

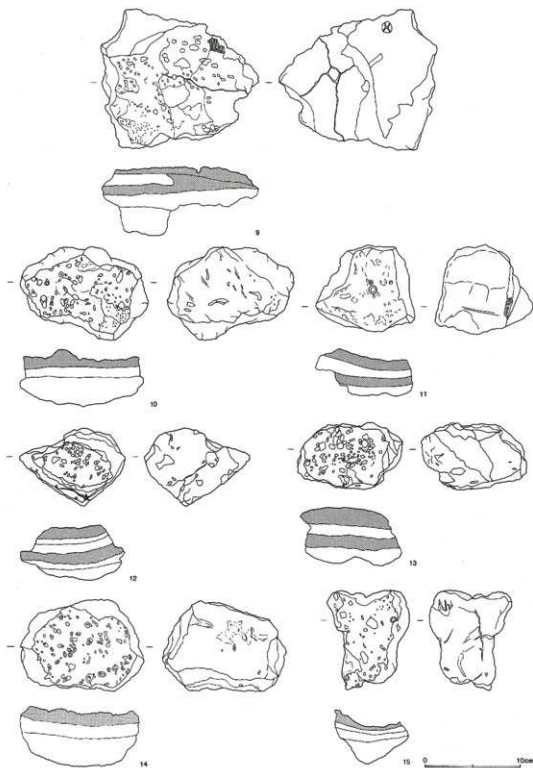
炉壁は、3～48でいずれも溶解炉の炉壁破片である。素材は粘土を基にして砂粒子、小石、滓片、鋳型片、焼土塊、黒鉛化木炭等周辺の混在物を多く取り込んで混ぜている。3は溶解物の湯滓層を2面もつ。表面の溶解物は厚く付着し流動質で上下方向の湯滓の流れが認められる。部分的に径0.5～1.0cmの小さな気泡痕をもつ。色調は紫紅色。裏面の粘土面は白色針状物質、鉄滓チップ、焼土塊、砂粒子を含む。また、スサを混在させ還元された青灰色の粘土面に赤褐色の粘土を残している。4～14・16・18・22は、表面に発泡した湯滓が付着し0.1～1.5cmの円あるいは楕円の気泡痕（ガスの抜け穴がクレーター状に残る）をもつ溶解炉の炉壁片である。

9は、側面が破面に囲まれた不整形の炉壁である。内面の下半部は、濃い緑色にガラス化した溶解物が広がり、上半部にいくにつれ発泡した溶解層は薄くなる。下面から見ると、溶解面は2枚確認できる。内側の溶解面は曲率が弱く、長さ8cmで2mm膨らむ程度である。外側の溶解面は長さ8cmで膨らみは6mmと曲率が高い。上端で見る限り、内面の貼り壁よりも外側の溶解面の方が熱変化が強く、厚さ1cm程の発泡層を形成している。色調は、内側の溶解層は灰色。外側の溶解層は灰褐色をへて灰白色。更に外側は褐色と変化している。1枚目、2枚目とも、褐色の鉄錆や粒状の酸化物が点在する。内壁下端には、長さ1.6cm以上の黒鉛化木炭をかみ込んでおり、他に3cm大の木炭痕も残る。外側の溶解面は上端部で内側よりも溶解層が強く、かつ、雲母状の光沢のある結晶が面的に生成している。胎土の混和物は、内壁側で、若干のスサと5mm大の石粒が見られる。外側の壁は、内側と外側でやや混和物が異なり、内側では8mm大の細かいのみがらと、5mm前後の短いスサが少量含まれている。外側は、細かいガラス質の滓や黒鉛化木炭片、あるいは、7mm大のみがらが点在し、長さ1.4cm程の薄手のスサが多量に混和されている。裏面側部には径1.4cmで、放射割れを生じる鉄酸化物が認められる。胎土自体は、両層とも灰白色の粒子を含む砂質なものである。輪積み単位は、厚さ4.6cm程である。本資料は溶解炉の内、ガラス質の厚くなる炉体下半部の炉壁と考えられる。この資料部分から下側には黒鉛化木炭が見られるという点で還元度が高い空間ということを窺わせる。

16は、側面全面が破面の炉壁破片である。表面の遺存状況はよくないが、本来の内面は濃い緑にガラス化し、5mm前後のガスの抜け穴が一面にあばた状になっている。又、粒状にもり上がり磁着反応をもつ赤褐色の酸化物粒子が表面と側面の破面に点在している。その最大のものは2cm前後。又、裏面に近い灰白色から灰色の炉壁の間に緑青を吹いた青銅の貫入が幅広く見られるのも特色で



第232圖 第5 鈔造遺構群出土遺物(1)



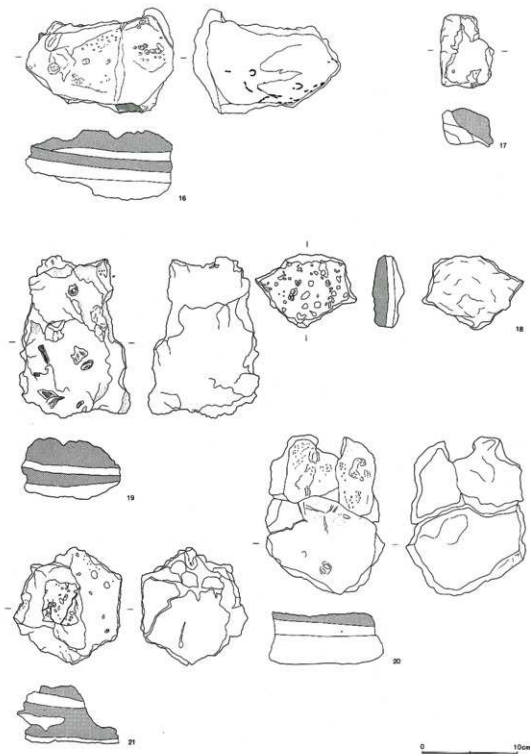
第233図 第5 鋳造遺構群出土遺物(2)

ある。その一部は長軸端部の裏面に厚さ1.5mm程の塊状に露出している。また、裏面の片側全体にも細かい網目状に銅が幅広く貫入している。破面方向から見ると、ガラス質の発泡層は、内側3cm程の厚みで、粒状の赤錆の吹いた酸化物粒子がある。これは鉄鉄の溶解炉を思わせるが、更に外側の3~4cmの発泡したガラス質層より奥側は鉄錆は殆どなく、青銅の貫入層が目立つ。このことは、最初に青銅を溶解し、後に内張りをして、鉄鉄の溶解に用いた可能性を窺わせる。内側の炉壁は、0.7cm大の木炭片や3mm程の赤錆粒子、あるいは、もみがらを若干含んでいる。内張りされた炉壁は、最大1cm程の白色の非溶解鉱物を多めに混じえるという点で、初期の壁体とは胎土の違いがある。長軸端部片側には、1~1.5cm大の木炭痕をかみ込む。

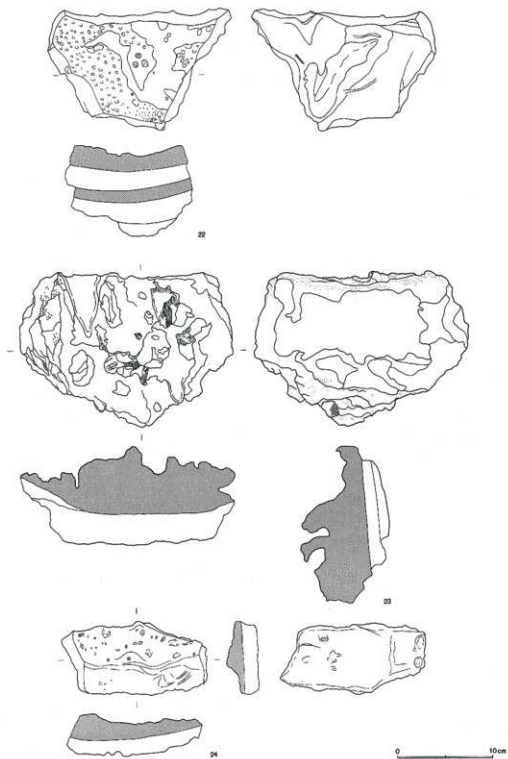
21は、片側半分は破面に3枚の溶解面が見られ厚さ6cmと厚みをもつが残り半分は1.4cmと薄い。内面は厚さ1.2cm程の濃い緑色から灰褐色で発泡している。表面は緑灰色や白色滓と同様の湯滓面が付着している。裏面は茶褐色粘土であるが、砥石として転用されたのか表面は平滑である。

22は、側面が直線状の破面に囲まれた厚い炉壁である。破面には3枚の溶解面が見られる。いずれも内面は、厚さ7mm程が濃い緑色から灰褐色にガラス化し、発泡している。最終操業面の下半部では濃い緑色の5mm前後のガスの抜け穴が全面に広がり、その上半部から灰褐色のガラス質の溶解物が垂れてきている。この部分の表面は、風化がはげしく、直下の小さい気孔層がスポンジ状に露出している。破面や内面には茶褐色の酸化物が点状に散在する。炉壁胎土は灰白色の中小の石や滓の小片を含み、1cm強のスサも多量に見られる砂質土である。内外の3枚ともほぼ同様の胎土と熱変化をしている。内側から3枚目の初期の炉壁は厚さ2.3cm程が灰白色に熱変化し、さらに、外側1.5cm程が赤褐色に酸化している。本資料の原位置は炉体下半から炉底部にかけての位置と推定される。炉底部内面は、濃い緑色でガスの抜け穴が全面に見られる特徴的なガラス質層である。その部分の滓層はほぼ3mm程の厚みで表面のみが滓化している。

23は、内面に木炭痕が目立つ炉壁片である。側面は全面破面で、上下面には輪積時の水平方向の剝離面が見られる。輪積単位は上下方向で内側が11cm、外側が8.5cmの2枚である。溶解面としては、部分的に2枚認められるため少なくとも1回の補修が考えられる。内側の壁面は、長軸端部とそれ以外の面で質感が異なり、長軸端部はガラス化層が薄く、表面が微小なガスの抜け穴状に発泡している。主体をなすそれ以外の面は、最大長さ5cm×幅3cm大の木炭痕が顕著に見られ、内側全体が厚さ6.5cm程、棚状にせり出している。色調は、表面では付着酸化物のため茶褐色。ガラス質の地は濃いうぐいす色。滓には大小様々な気孔が残り、一部は炉壁の半溶解物が含まれている。長軸端部側から5cm程の部分にヒダ状に垂れて突き出した部分が見られる。この部分が羽口装着部側からの送風範囲のへりにあたる部分と見られる。従って、本資料の長軸端部側片方は羽口側であったと予想される。また、溶解状態から見て大口径羽口による被熱であろう。炉壁胎土は1~2枚目とも同様なもので、ガラス質の滓片や黒鉛化木炭片、更には鋳型片らしいものも少量混和されている。スサはごくわずかである。胎土はやや砂質で混和物が多い。本資料の原位置を想定して平面形を見ると、少なくとも長さ15cm以上は直線気味で、15cmで7mm程たわんでいる程度である。羽口側も短い現状で判断しても直角気味の平面形であり、本資料の本来の位置である、羽口先レベルの炉体は上下方向にほぼ垂直で、平面方向には隅丸方形の炉体を復元できる。炉壁外面は炉壁内面に沿



第234図 第5 鋳造遺構群出土遺物(3)



第235圖 第5 銹造遺構群出土遺物(4)



第236图 第5 世纪遗物群出土遺物(5)

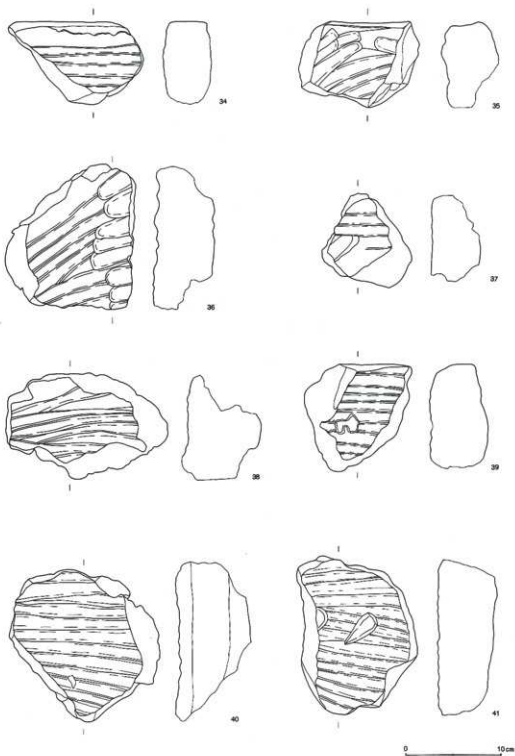
って面的に整形されている。最終作業面の裏面からの厚味は約2.6cmである。

27～29は炉壁面および断面に緑青が吹く遺物である。27は還元した粘土塊であり溶解した湯滓面をもたない。緑青の吹いた部分を半載してみると粘土内面から青銅塊を検出した。分析結果によると酸化銅 (CuO) 61.33%、錫 (SnO_2) 18.88%、二酸化ケイ素 (SiO_2) 10.38%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 4.69%、鉛 (PbO) 2.56%、酸化カルシウムも含まれている。錫が19%と多く鉛も検出されていることから青銅であることが判断される。28は不定形な塊状の鋳型片又は、鋳型の転用品である。本資料は、還元した溶解物を内壁にもたず、灰褐色から赤褐色に酸化した砂質の胎土である。その最大の特色は、内面に厚さ2mmほどの砂質のマネ状の貼り付け面が区別され、更にその内側0.2～1.2cm程には、緑青の吹いた青銅の嵌入物が存在することである。銅の表面は、2～3mmの粒状の集合体となっている。生地となる裏側の壁面は、若干のスサや、かなり多目の長さ7mm大の長いもみぐらを混和しており、一部には、黒錆の吹いた鉄酸化物粒子や黒褐色のガラス質滓、あるいは、1mm大の粒状の滓も混じっている。内面のマネ状の貼り土はその裏面ときれいに剝離している部分もあり、鋳造後の、還元したマネの青灰色とは色調を異にする褐色である。本資料は、鋳造時に仕上げマネの内側に生じたヒビ割れから銅が貫入したものである。内側の仕上げマネの端部は、褐色に発泡しており、鋳造に失敗した鋳型を何らかの別用途に転用したものかと思われる。

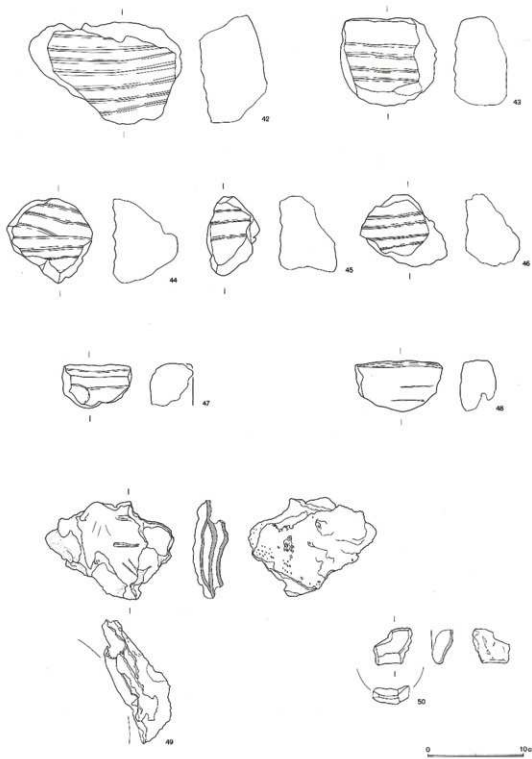
31～33は、粘土で造られた環状のドーナツ型をしたものと考えられる。溶解炉の壁かどうかは断定できないが、鋳型とも考え難い。湯滓の付着はみられないが、内面は被熱を受けわずかに赤色に変化している。胎土は砂粒子、鉄粒、径1～2cm程の石や径3cm程の鉄滓までも混入させる。

34～48は、炉壁1'として分類した一群である。これまでの炉壁粘土とは異なりやや良質の粘土素材を使用している。胎土中には黄白色の粘土塊を混ぜる点が特徴である。また、他の炉壁同様に白色針状物質、滓チップや小石を含む。いずれも厚く剥部破片で7.5cm、48の頂部で3.3cmである。内面は指によるナデの圧痕が付いている。還元された溶解物をもたないが黄褐色の付着物が全面を覆っている。

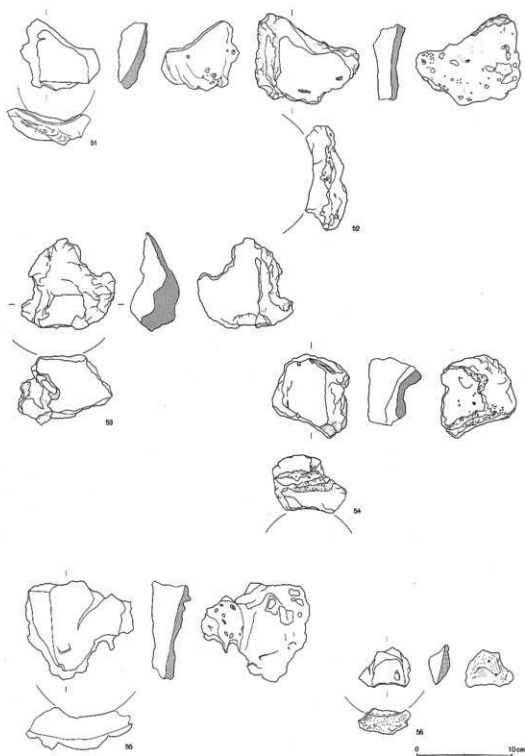
羽口は、49～56である。形態はいずれも破片であるが羽口先端部を残し、50は直径3.0cmの小口径、そのほかは、円形の大口径の溶解炉羽口と考えられる。素材は粘土で白色針状物質、砂粒子、径1mm程の細かい鉄滓粒、径2mmの石を混在する。外面には流動質の湯滓が0.2～1.0cm程の厚さで付着し、色調は鈍い黒色か紫紅色である。断面を観察すると青灰色の還元粘土層、そして、送風される内面は赤褐色の酸化粘土層である。羽口は溶解時の高温および冷却等の要因で内面が歪みと粘土のヒビ割れを起こしているのが特徴である。52・53は羽口粘土を胎土分析した。その結果、炉壁粘土と近似していることが裏付けられた。54・55は金属的分析を行ない、54は先端部を欠き、側面も破面となる大口径の羽口破片である。外面は黒色のガラス質に溶解し、垂れつつある。又、表面には1～3mm大の緑青の吹いた青銅の粒が半分顔を出す形で点在していることも特色である。なお、滓化した表面全体には冷却時のチリメン状のシワも生じている。羽口胎土中には滓粉や丸味を帯びた小さな石粒が見られ、白色の1mm以下の細かい砂粒がかなり多く混和されている。また、細い纖維状のスサもある程度入っている。内面には穿孔部の穴の整形時に付けられたナデや長軸方向のス



第237図 第5銅造遺構群出土遺物(6)



第238圖 第5 銅造遺構群出土遺物(7)



第239図 第5 铸造遺構群出土遺物(8)

ジ状の絞り目が残る。基部側は、肉厚2.5cmの羽口側と羽口を炉体に支えた粘土部分が残りに、外側に向かって溶解部も開いている。色調は外側の溶解部が濃い黒褐色。羽口胎土は一部を除いて赤褐色。先端部は灰色に熱変化し、本来の羽口先は欠け落ちている。55は大口径の羽口破片である。推定内径は直径約12.0cm。表面は溶解し発泡している。長さ2.6cm程の木炭痕が一部に残る。羽口胎土は滓粉や4mm大の錆びた鉄粒、さらにさまざまな色調の石粒を含み、砂質である。内面は粗くナデ整形されており、やや波状である。一ヵ所だけ幅1.5cmのナデ整形時の工具痕らしきものが長軸方向に向かって見られる。器内には斜め方向に粘土の接合痕らしいものも見られる。色調は溶解した表面が灰褐色、一部は紫紅色の酸化気味の雰囲気窺わせる。溶解部の厚さは最大1cm。羽口の胎土側は赤褐色の酸化焼成である。羽口は先端部に向かって急激に薄くなり、端部の滓はやや内側にたれている。溶解面には点状に褐色の鉄酸化物が付着している。本羽口は炉壁から突き出す形で、少なくとも10cmは炉内に突き出してたと推定され、成形痕から見ておそらく、炉壁と一体で成形されたものと考えられる。内面には大きなヒビ割れが生じている。

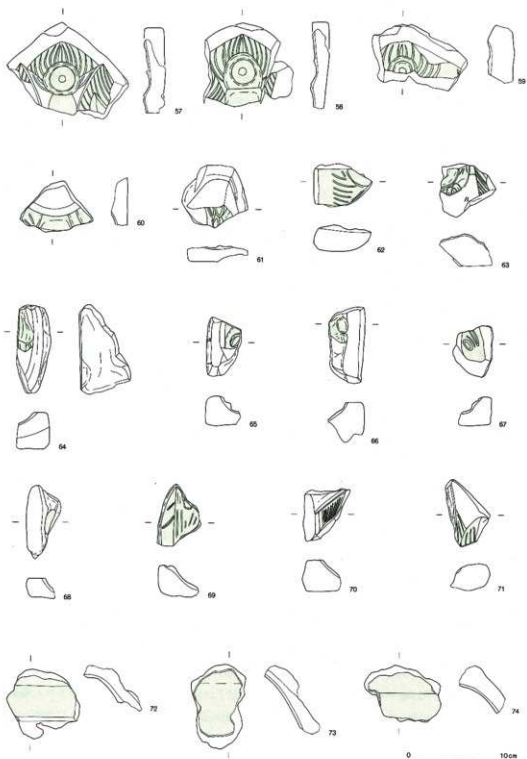
鋳型は、57～136が梵鐘鋳型、141～155は仏具鋳型、140は不明である。

検出した梵鐘鋳型は龍頭・笠型・乳・縦帯・横帯・ジョウ・素文の池の間等の部分である。調査時において鋳型のまとまりを遺構と照らしながら取上げたが必ずしも遺構単位で梵鐘鋳型の個体差を区別することができなかった。このため、遺物は第5鋳造遺構群として大きく捉えた方が理解できる。特に、第1・2・3号鋳造土壌と第1号鋳込み跡で検出した梵鐘鋳型の多くは同一個体の可能性をもつ。

梵鐘鋳型は基本的には本体部分を基型によって製作されている。このため、横方向の同心円で挽かれ、鋳型面に基型の条線が残っている。龍頭や乳は別作りであり、それぞれの抜型を使用して製作し、後から梵鐘本体の鋳型を切り抜いて埋め込むという方法が取られたと考えられる。基型と抜型とは、鋳型胎土が異なる。基型では、外側から荒真土、中真土、仕上げ真土の順で粘土が塗り込まれる。荒真土は厚さ1.5～3.0cm程で暗茶褐色の土に砂粒子、小石、滓片、焼土塊、鋳型片等の混入物が多く見られきめが荒い。中真土は0.5～1.3cmの厚みをもち鈍い黄褐色をしている。きめやや細かく砂粒子、小石、滓片を混入する。仕上げ真土は0.3～0.1cmの厚味をもちきめ細かい。鋳込んだ際に溶解物が直接流れ還元状態になるため、器肌面は青灰色になる。57～71の龍頭と106～125の乳は抜型で製作されている。

57～71は抜型で製作された龍頭である。この内57～63は上部の宝珠部分である。57の鋳型は山形に形造られ中心に径3.8cmの宝珠をもち周辺に左右対象の火炎を表現している。さらに、一段凹ませて龍のたてがみ部分が型どられている。山形の周縁部分は幅1.6cm程の合わせをもつ。素材は一体で白色針状物質や砂粒子を含むきめの細かい良質の粘土が使われている。抜型で押された龍頭部分は湯が流れたため青灰色に還元されている。合わせ部分は赤褐色である。側面および裏面は平たく成形されている。58も同様である。57と58は対になって使用されていたものと考えられる。59は宝珠部分であるが57と比べ宝珠と合わせの部分の幅が狭く火炎の長さが短いのが特徴である。64～71は龍を型取った部分の鋳型である。

72～79は笠型である。笠型は天井部張りをもち上部は緩やかな膨らみを形造る。外縁の屈曲と高



第240圖 第5 鈔造遺構群出土遺物(9)

きは72や79の鋳型でおおよその形状は理解できる。笠形の推定直径56.8cmである。72・79は笠形の端部と考えられる。

80～82・84は梵鐘のどの部位にあたるか不明である。85～105は素文であり池の間を中心とした部分の破片と考えられる。

106～125は拔型で造られた乳の鋳型である。1本で4個の乳を縦に配列している。1本の大きさは106で見ると長さ11.6cm、幅3.3cm～2.6cmである。また、1個の乳は径2.7cm、深さ0.8cmで半球状をしている。底面および側・端面は丁寧に成形され、舟底型をしている。内面の乳を形造る面は青灰色に還元され、部分的に黒味の付着痕が見られる。乳の使用方法は、拔型に必要な本数(梵鐘の乳の間1区画に必要な数を縦4×横4個と想定すれば、4区画で16本となる。)をあらかじめ製作し、型焼きしておく。それを基型で製作した梵鐘鋳型の本体に切り込んで埋め込むものと考えられる。その際に埋め込んだまわりの補修用粘土が106・108・116の資料には付着したまま見られる。本資料と同種の乳の残片を第8と第9号製造遺構群にて検出した。

126～134は縦・横帯である。135～139は梵鐘鋳型を載せる基底部のジョウ部分の鋳型と考えられる。素材は梵鐘鋳型同様粘土により造られ外・中・仕上げ真土を塗って基型で挽かれている。ジョウはドーナツ型をしており、上面は平たく水平であるが、わずかに中央部分に段をもち内側が低い。梵鐘先端にあたる部分の鋳型である。還元された青灰色の面は幅6.3cm、内側と外側の両端にはわずかながら赤褐色の酸化面をもつ。これは中子と外型の合わせ面と考えられる。推定直径は外周で51.4cmである。

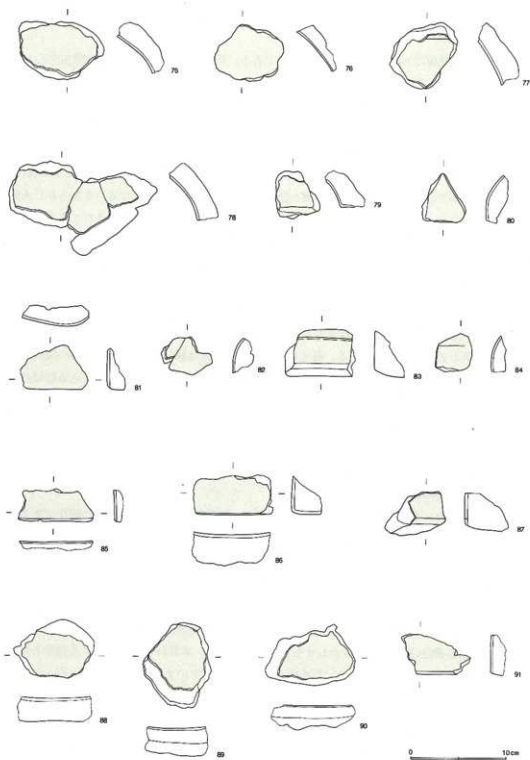
140は不明鋳型である。大きさは径17.5cm程、残存する厚さは4.0cmである。真土は非常に細かく砂質であり、全体が仕上げ真土と同質の粘土と考えられる。形態は表面が17.7cmで3mmの曲率をもちわずかながら湾曲している。ほぼ中央で交差する「+」字状の凹みをもち全体が青灰色の還元面である。第1号鋳込み跡出土。

141～145は拔型による獸脚鋳型である。141は頭部・脚部先端を欠損した半身の破片である。残存部位は歯・牙と横帯・足帯の一部である。144は大型の獸脚鋳型と考えられ、頭部の目の一部である。本資料と同種の獸脚鋳型は第6製造遺構群から出土している。

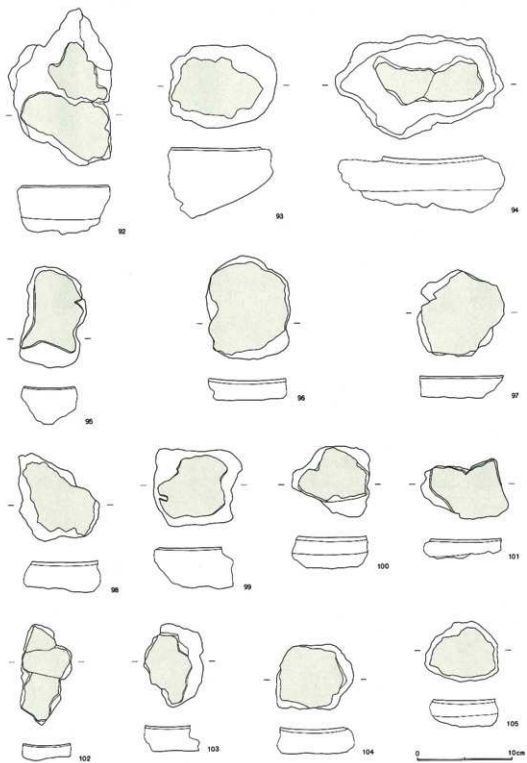
147は型焼きされた種型と考えられる。胎土は砂粒、白色針状物質を含むきめの細かい粘土である。形態はほぼ円形と推定され、表・裏面とも平坦であり、側面は逆台形状に裾をすぼめる。また、表面には中央が円形に青灰色の還元面をもつが、色調が淡く直接湯を流したとは考え難い。さらに、周縁部分には赤褐色の幅1.6cm程の合わせをもつ。おそらく、本資料は生型法による種型と思われ、この円形の種型の上に生型砂を載せて型を作り型焼きせずにそのまま注湯する方法を試ったものと推測する。考えられる製品としては種型の逆台形という形態から鏡の可能性が強い。

148・149・151は釘隠しの飾り金具鋳型である。本資料と同類の鋳型は第30号溝跡から出土している。形態は六葉で猪目の透しをあしらい中央は放射状の刻みをもちその中心はつまみ状の突起をもつ。釘隠しの鋳型である。

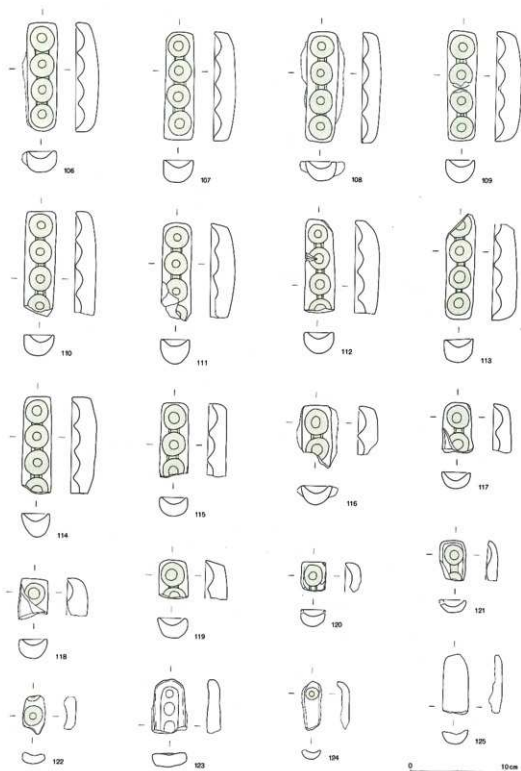
150・154はつまみ鋳型である。どのような製品のつまみであるかは不明。154はダイヤモンド型に切り込まれたつまみに花卉状の刻みをもつ円形となる。つまみの精巧な切り込みは口が狭いこと



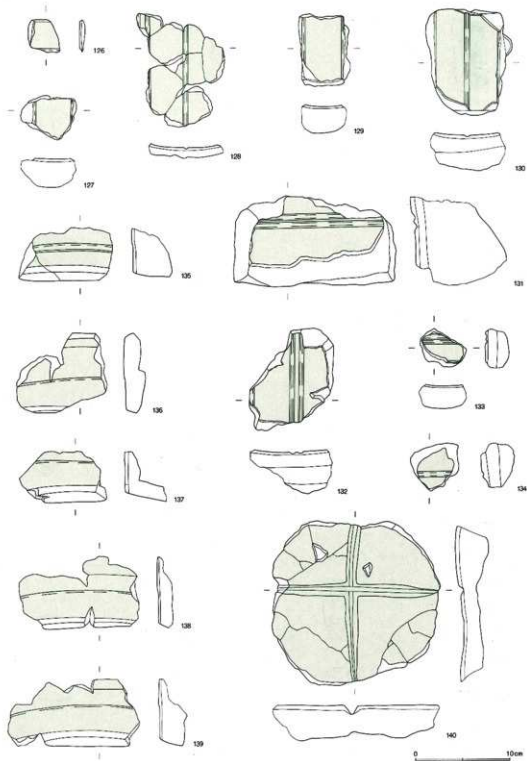
第241図 第5 鈔造遺構群出土遺物00



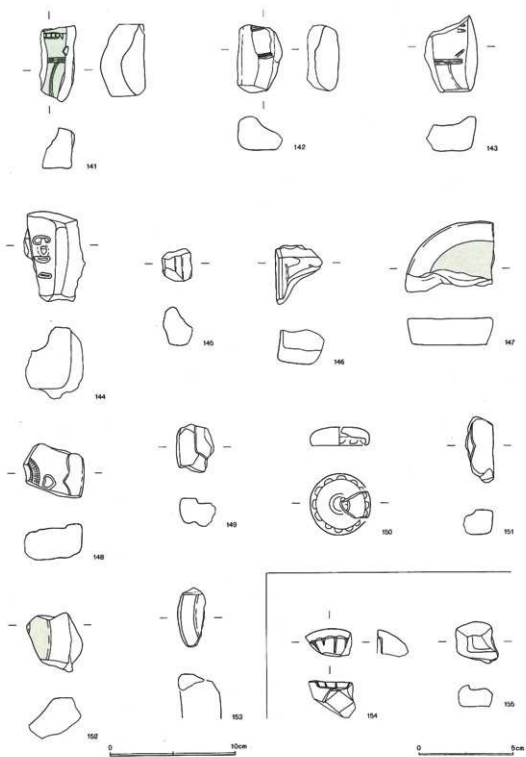
第242圖 第5 鑄造構群出土遺物(1)



第243図 第5 鋳造遺構群出土遺物(2)



第244圖 第5 銅造遺構群出土遺物(3)



第245図 第5 鈔造遺構群出土遺物04

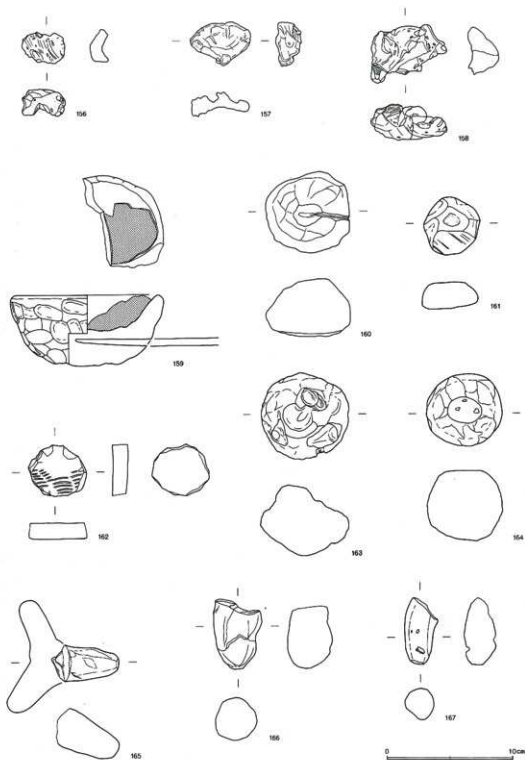
から蠟型によるものと考えられる。胎土は砂粒、白色針状物質を含むきめの細かい粘土である。色調は還元面が見られず赤茶色である。未使用の鑄型と考えられる。

152・153は容器鑄型である。

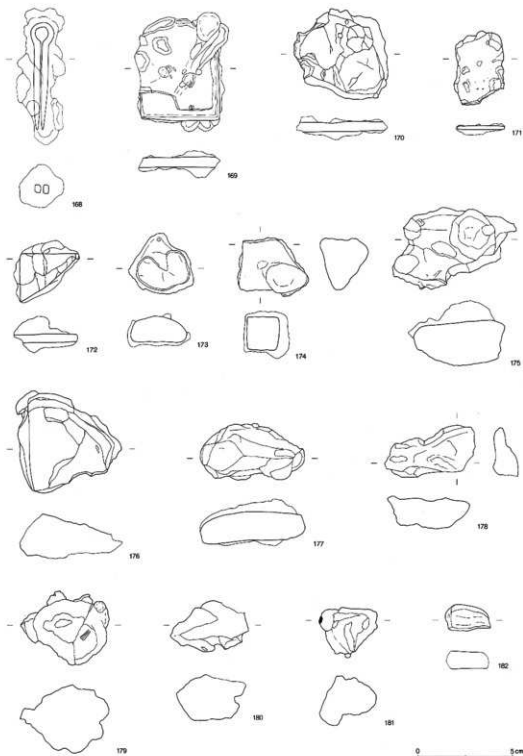
滓は、156～158・180～183である。156は、指頭大の側面二面に破面が見られる黒色無光沢のガラス質滓である。表面は、木炭痕と黄灰色の還元土が見られる。上面に広く、チリメン状のシワが目立つ。側面から下面にかけては、4mm幅で二条、10mm幅で一条の流動状になっている。中央は、1.4cm幅の木炭痕状、側面には、2mm×1mm以下の白色の角張った鉱物が黒色滓の中に数多く散在している。気孔は、円から楕円で、微細なものが散在する。表面のごく一部に紫紅色の酸化色が存在する。大きな気孔や木炭痕の凹みには、褐色の土が残る。破面片側の付着土の一部は褐色に錆化している。157は、鳩の卵大の凹凸のある薄い椀形の滓である。色調は、表面、破面とも無光沢の黒褐色。表裏面とも1cm前後の木炭痕？とチリメン状のすじが目立つ。小さな破面が表裏面や側面に散在し、破面には黒色滓の中に1mm以下の白色の角張った鉱物が溶け残っている。短軸片側端面には、黒錆が滲み、全体的には、磁着の極めて弱い本資料の中で唯一磁着が強く、1mm以下の鉄粒を内包している可能性がある。下面端部に1ヶ所赤褐色の炉壁質の酸化土が付着している。滓表裏面の半分程は、紫紅色の酸化色が残る。158は、5cm大の楕円形を呈し、断面椀形で、表面全体が灰白色の滓である。長軸端部の側面1ヶ所に小さな破面がある。それ以外は長軸端部から側面にかけて、3.5cm×1.0cm程の一部が黒鉛化した木炭痕があり、他は完形。表裏面には、1cm以下の木炭痕とも何かの圧痕とも見られる明らかな圧痕が全面に広がる。裏面の一部は、チリメン状になり、一部は紅色の酸化物が覆っている。表裏面に1～2mm大の褐色土に錆びた粒子が付着する。1mm以下の青黒い粒状の滓も点在する。破面には、楕円形の中小の気孔が散在する。又、気孔の一部は、上面を中心に表面が蜂の巣状に露出している。白色鉱物は小さく、全面に多量に含まれ、全体には灰褐色のまだら状に見える。側面から底面の椀形は、下部に面的な接触物(赤褐色の酸化炉壁が微量付着)があったことを物語る。その位置は、酸化のきれいな炉壁と黒鉛化気味の木炭痕から見て炉床側と見られる。181は重くキラキラしている。部分的に緑青が吹く。

道具は、159～167である。159は手づくね成形された「トリペ」の受け部の約1/3程の破片である。胎土は有色の砂粒と鉄薄片を含む繊維維も若干認められる砂質のものである。内側には、底面から口縁部にかけて、1/2程の面積で0.8mm以下の厚さに黒褐色で光沢のある湯滓の付着物が残っている。全体の色調は、めまぐるしく変わり、細かい指頭痕の残る表面は赤褐色を呈し、器内は2mm程の厚さの吸炭層をへて紫褐色となる。内面には黒褐色の酸化物(滓)が張りついている。滓の剝離した一部の表面は灰色である。付着した滓の表面には粒状の鉄錆状のものが点在し、そのひとつには磁着反応がある。下面の破面には長さ7cm近いスジ状の圧痕がある。

160・163は半球状土製品である。素材は粘土で砂粒子を含む。形態は円錐形をしており、手づくね成形の素焼きされたものである。160の底面は高熱を受け青灰色の還元状態である。上面の山形部分はやはり被熱を受け酸化状態である。163の上面は3箇所指押さえの跡をもちつまみ易くしている。160同様に酸化状態である。底面は赤褐色で素焼きされたままである。用途については不明である。しかし、出土状況をみると、160は第9号鑄造土壌から、163は炉体2号から出土し、い



第246図 第5 鈔造遺構群出土遺物⑬

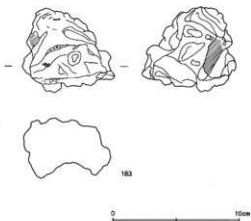


第247圖 第5鈔造遺構群出土遺物00

ずれも、炉壁を多く出土している。このことから鋳型に関連する道具よりも溶解炉に関連する道具の可能性が高い。161・162は円盤状製品である。161はまわりが面取りされた平たい石製品である。162もまわりが面取りされた平たい須恵器臺の破片であり、鋳造道具としての転用品であると考えられる。164は球状石製品である。上下にわずかながら平たい自然面を残す。用途不明。165・167は三叉状土製品である。

鉄塊は、168～177・179である。168は鉄製品である。173・175は鉄塊のなかでもメタルの残存度が高く金属探知機で測定すると特Lの値が得られた。174は広い平坦面を上にした場合(図化した場合)に断面は「V」字状で、環状又は棒状の鋳造品。長軸両端のどちらかの凹凸を破面と見て上下方向と考えると、平面形は片寄った三角で、細身の獣脚の中央部破片となるかもしれない。

銅塊は178である。全体に緑青が吹き銅メタルの塊と考えられる。重さは45g、第1号炉跡の基盤に張り込まれた粘土層下から検出した。



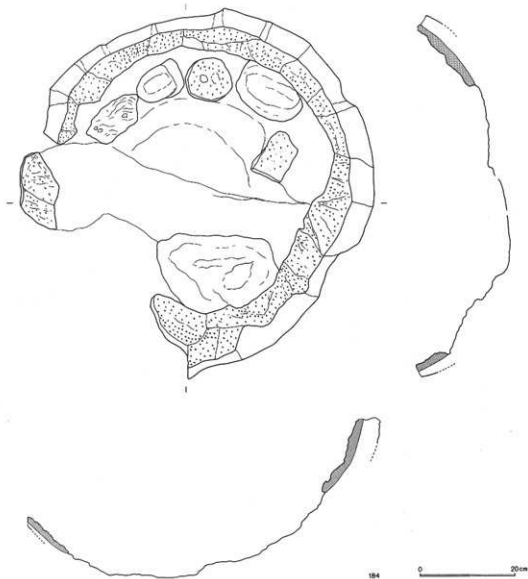
第248図 第5鋳造遺構群出土遺物(1)

第5群出土遺物観察表 (第232～249図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	甕		19.0	6.3	D I	A	茶褐色	20%	S S K 9	常滑
2	甕	28.4	3.8		B D	A	暗褐色	10%	P-14-m-1	渥美

第5群出土鋳造遺物観察表 (第232～249図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
3	炉壁	10.4	8.3	5.2	195		炉体4号No70		炉1
4	炉壁	5.8	12.1	4.3	314		S S K 9		炉2
5	炉壁	6.7	8.7	5.7	270		炉体5号No23		炉2
6	炉壁	8.9	10.9	5.4	380		炉体5号No16		炉2
7	炉壁	7.6	7.7	4.6	210		炉体5号No31		炉2
8	炉壁	16.7	12.4	4.1	480		炉体5号No20		炉3
9	炉壁	14.7	16.5	7.1	1074		炉体3号No8	分析資料No14	炉2
10	炉壁	9.4	12.4	5.0	470		炉体2号No11		炉2
11	炉壁	8.9	10.3	4.3	285		P-13-1-7		炉3
12	炉壁	8.0	12.0	5.3	250		S S K 5		炉1
13	炉壁	6.6	10.6	5.8	390		P-14-e-7		炉2
14	炉壁	9.3	12.4	5.6	520		炉体2号No7		炉2
15	炉壁	10.5	7.9	3.9	200		炉体4号No35		炉1
16	炉壁	15.6	10.5	7.0	848		第2号炉No119	分析資料No13	炉4
17	炉壁	7.3	5.6	3.7	120		S S K 9 P-13-1-3		炉1
18	炉壁	7.5	9.8	3.3	155		炉体5号No27		炉2
19	炉壁	16.6	10.5	7.0	840		炉体5号No32		炉1
20	炉壁	16.2	12.5	5.4	983		炉体4号No85		炉1
21	炉壁	12.3	10.5	5.3	530		炉体5号No17		炉3



184 0 20cm
 (第2号溶解炉)

第249图 第5铸造遗構群出土遺物(0)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
22	炉壁	12.4	18.6	8.5	1341		SSK 9	分析資料No16	炉3
23	炉壁	15.6	22.5	10.4	1850		炉体4号No69	分析資料No15	炉1
24	炉壁	7.7	14.3	3.4	310		SSK 9		炉2
25	炉壁	13.4	14.0	7.4	785		炉体4号No77		炉1
26	炉壁	13.0	13.6	5.8	540		炉体4号		炉1
27	炉壁	5.1	8.6	3.2	122		炉体1号No1	胎土分析No28	炉4
28	炉壁	8.4	9.0	5.8	300		炉体4号No1	分析資料No12	炉4
29	炉壁	7.1	8.7	2.9	176		炉体4号No1		炉4
30	炉壁	10.5	16.6	5.8	1260		第1号鋳込みNo11		炉1
31	炉壁	7.7	9.3	7.3	575		炉体5号No14		炉1'
32	炉壁	10.3	11.6	6.7	775		炉体5号No15		炉1'
33	炉壁	10.1	14.0	9.1	1360		炉体5号No29		炉1'
34	炉壁	8.7	12.5	5.1	540		SSK 9		炉1'
35	炉壁	8.9	12.3	5.9	610		SSK 9		炉1'
36	炉壁	15.2	13.3	6.3	1170		第1号鋳込みNo188		炉1'
37	炉壁	9.2	9.3	5.1	340		炉体4号No31		炉1'
38	炉壁	10.9	17.1	7.8	1100		炉体4号No48		炉1'
39	炉壁	11.3	11.1	6.1	710		炉体4号No3		炉1'
40	炉壁	15.8	15.5	8.6	1543		SSK 9		炉1'
41	炉壁	16.1	12.1	6.5	1270		SSK 9		炉1'
42	炉壁	10.6	15.9	6.7	1010		SSK 9		炉1'
43	炉壁	9.1	10.1	5.6	500		SSK 9		炉1'
44	炉壁	8.8	8.8	6.8	320		炉体4号No82		炉1'
45	炉壁	8.2	5.5	6.0	200		SSK 9		炉1'
46	炉壁	7.4	8.7	5.7	255		SSK 9		炉1'
47	炉壁	4.5	7.3	4.3	130		SSK 9		炉1'
48	炉壁	5.3	9.2	3.6	170		SSK 9		炉1'
49	羽口	10.2	13.5	4.8	313	直径 (23.0)	SSK 9		羽口
50	羽口	3.8	3.7	1.8	15	直径 (6.9)	SSK 9		羽口
51	羽口	7.1	7.9	2.9	83	直径 (7.8)	P-13-h-8		羽口
52	羽口	10.8	8.2	4.0	210	直径 (14.2)	SSK 9	胎土分析No26	羽口
53	羽口	9.3	9.2	5.9	250	直径 (14.2)	第2号炉No61	胎土分析No25	羽口
54	羽口	7.2	7.8	3.6	232	直径 (10.8)	SSK 1 No13	分析資料No27	羽口
55	羽口	10.1	11.0	3.9	250	直径 (12.0)	炉体5号No13	分析資料No26	羽口
56	羽口	3.9	5.0	2.1	40	直径 (9.4)	P-13-h-9		羽口
57	梵鐘	龍頭	9.0	11.5	2.3	240	宝珠径 3.8	SSK 1 No1	鑄型
58	梵鐘	龍頭	8.5	8.9	1.6	166	宝珠径 4.1	SSK 2 No15	鑄型
59	梵鐘	龍頭	4.9	9.0	2.7	177	宝珠径 3.1	P-13-pNo9,11	鑄型
60	梵鐘	龍頭	5.3	7.7	1.7	50		SSK 2 No22	鑄型
61	梵鐘	龍頭	6.7	6.9	1.6	65		SSK 2 No11	鑄型
62	梵鐘	龍頭	4.5	6.2	2.7	58		SSK 1 No99	鑄型
63	梵鐘	龍頭	5.5	5.8	3.4	56		SSK 2 No33	鑄型
64	梵鐘	龍頭	9.3	3.6	3.8	110		SSK 1 No96	鑄型
65	梵鐘	龍頭	6.2	3.7	3.1	60		SSK 1 No120	鑄型
66	梵鐘	龍頭	8.1	3.8	3.8	100		SSK 1 No86	鑄型
67	梵鐘	龍頭	3.6	2.8	2.9	50		P-14-m-7	鑄型
68	梵鐘	龍頭	7.7	3.6	2.0	50		SSK 1 No.73	鑄型
69	梵鐘	龍頭	6.5	4.5	3.2	65		SSK 1	鑄型
70	梵鐘	龍頭	5.3	4.6	3.3	68		第1号虎洋	鑄型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
71	梵鐘	龍頭	6.3	4.2	2.7	60	P-13-P-9	鋳型
72	梵鐘	笠形	4.4	7.2	1.7	75	第1号鋳込みNo160, 169	鋳型
73	梵鐘	笠形	6.7	4.9	2.2	102	第1号鋳込みNo168	鋳型
74	梵鐘	笠形	4.8	7.5	2.6	105	第1号鋳込みNo71	鋳型
75	梵鐘	笠形	5.1	8.0	2.3	129	第1号鋳込みNo112	鋳型
76	梵鐘	笠形	5.0	7.0	1.5	59	第1号鋳込みNo159	鋳型
77	梵鐘	笠形	5.1	5.4	2.4	100	第1号鋳込みNo95	鋳型
78	梵鐘	笠形	5.3	13.2	2.1	325	第1号鋳込みNo157, 200, 202	鋳型
79	梵鐘	笠形	3.9	3.4	2.5	48	第1号鋳込みNo125	鋳型
80	梵鐘	笠形	4.9	4.1	2.1	30	第1号鋳込みNo22	鋳型
81	梵鐘	中子	4.1	6.9	1.9	45	第1号鋳込みNo185	鋳型
82	梵鐘	笠形	3.7	5.2	2.1	23	第1号鋳込みNo183	鋳型
83	梵鐘	ジョウ	4.9	7.0	3.0	86	P-13-1-9	鋳型
84	梵鐘	笠形	3.9	3.7	1.5	19	第3号炉	鋳型
85	梵鐘		3.3	7.7	1.0	25	第1号鋳込みNo40	鋳型
86	梵鐘		3.2	4.2	8.0	115		鋳型
87	梵鐘	ジョウ	4.1	3.5	3.7	85	炉体1号No17	鋳型
88	梵鐘		4.5	7.1	2.5	120	第1号鋳込みNo171	鋳型
89	梵鐘		6.7	6.1	3.0	180	第1号鋳込みNo29	鋳型
90	梵鐘		4.7	7.3	2.6	130	P-14-m-1	鋳型
91	梵鐘		3.9	6.5	1.6	35	第1号鋳込みNo225	鋳型
92	梵鐘		11.3	9.3	5.2	760	第1号鋳込みNo20	鋳型
93	梵鐘		6.1	9.3	7.4	645	P-14-i No10	鋳型
94	梵鐘		4.1	10.4	5.8	865	第1号鋳込み	鋳型
95	梵鐘		7.7	5.6	3.8	218	S S K 1 No119	鋳型
96	梵鐘		9.4	8.0	2.1	240	第1号鋳込みNo67	鋳型
97	梵鐘		8.8	8.7	2.3	197	第1号鋳込みNo57, 67	鋳型
98	梵鐘		6.7	6.8	3.3	208	第1号鋳込みNo232	鋳型
99	梵鐘		6.3	6.7	4.2	333	第1号鋳込みNo25	鋳型
100	梵鐘		5.4	7.1	3.3	170	第1号鋳込みNo68	鋳型
101	梵鐘		5.8	7.3	2.0	88	P-14-m-1	鋳型
102	梵鐘		9.5	4.9	1.5	85	S S K 1 No89, 92	鋳型
103	梵鐘		7.1	4.7	2.6	130	第1号鋳込みNo56	鋳型
104	梵鐘		6.3	6.6	2.3	158	第1号鋳込みNo43	鋳型
105	梵鐘		5.3	6.9	2.8	140	第1号鋳込みNo18	鋳型
106	梵鐘	乳	11.4	3.2	2.3	103	乳径2.2 乳深0.8 S S K 1 No 3	鋳型
107	梵鐘	乳	11.3	3.1	2.1	100	乳径2.6 乳深0.8 S S K 1 No 9	鋳型
108	梵鐘	乳	11.6	3.3	1.8	33	乳径2.6 乳深0.7 S S K 1 No 6	鋳型
109	梵鐘	乳	11.5	3.0	2.3	100	乳径2.5 乳深0.9 S S K 1 No 2	鋳型
110	梵鐘	乳	11.0	3.2	2.2	90	乳径2.1 乳深0.7 S S K 1 No 5	鋳型
111	梵鐘	乳	10.1	3.1	2.2	85	乳径2.5 乳深0.7 S S K 1 No 7	鋳型
112	梵鐘	乳	9.8	3.2	2.2	78	乳径2.3 乳深0.7 第1号鋳込みNo88	鋳型
113	梵鐘	乳	11.1	3.1	2.3	90	乳径2.5 乳深0.8 S S K 1 No123	鋳型
114	梵鐘	乳	10.2	3.1	2.4	83	乳径2.7 乳深0.8 S S K 1 No 4	鋳型
115	梵鐘	乳	7.8	3.0	1.9	55	乳径2.6 乳深0.7 S S K 1 No59	鋳型
116	梵鐘	乳	6.5	3.2	2.1	45	乳径2.7 乳深0.8 S S K 1 No52	鋳型
117	梵鐘	乳	5.2	3.3	1.6	30	乳径2.4 乳深0.9 S S K 1 No115	鋳型
118	梵鐘	乳	4.3	3.1	2.1	20	第1号鋳込みNo89	鋳型
119	梵鐘	乳	4.0	3.1	2.0	30	乳径2.0 乳深0.7 第1号鋳込みNo83	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
120	梵鐘 乳	3.1	2.6	1.0	8	乳径2.2 乳深0.7	S S K 1 №18		鋳型
121	梵鐘 乳	4.2	2.7	1.2	15		P-13-p-9		鋳型
122	梵鐘 乳	3.4	2.3	1.2	13		S S K 1 №127		鋳型
123	梵鐘 乳	5.7	3.3	1.4	30		№18		鋳型
124	梵鐘 乳	5.0	2.0	0.9	10		S S K 2 №14		鋳型
125	梵鐘 乳	6.0	2.6	1.3	25		S S K 1 №17		鋳型
126	梵鐘 横帯	2.8	3.0	0.6	7		S S K 1 №43		鋳型
127	梵鐘 縦帯	4.2	4.2	3.0	72		Q-13-d-2		鋳型
128	梵鐘 縦帯	10.3	7.3	1.1	75	縦帯幅0.5 帯間2.9	S S K 1 №16,20,21		鋳型
129	梵鐘 縦帯	6.6	4.8	2.8	140	帯間3.8	S S K 1 №116		鋳型
130	梵鐘 縦帯	9.9	8.9	3.7	350	縦帯幅0.5 帯間2.9	S S K 1 №117		鋳型
131	梵鐘 横帯	7.2	13.7	9.6	1570	横帯幅1.5	S S K 1 №8		鋳型
132	梵鐘 縦帯	9.5	7.2	4.5	283	縦帯幅1.5 帯間3.7	S S K 1 №10		鋳型
133	梵鐘 横帯	2.3	3.9	2.4	351	横帯幅1.0 帯間1.7	第1号鋳込み№197		鋳型
134	梵鐘 横帯	3.6	3.8	3.5	84		P-13-p-№12		鋳型
135	梵鐘 ジョウ	5.5	8.7	4.1	210		炉体1号№22		鋳型
136	梵鐘 ジョウ	7.6	9.3	2.2	128		炉体1号№18		鋳型
137	梵鐘 ジョウ	5.4	8.5	1.6	105		第1号鋳込み		鋳型
138	梵鐘 ジョウ	7.5	12.2	1.5	80		第1号鋳込み S S K 10		鋳型
139	梵鐘 ジョウ	7.1	13.7	2.8	80		第1号鋳込み S S K 10		鋳型
140	不明	17.1	17.3	4.0	1075		第1号鋳込み№187		鋳型
141	獸脚	5.8	2.8	3.1	40		S S K 9		鋳型
142	獸脚	5.1	3.5	2.2	40		P-14-i-7		鋳型
143	獸脚	6.0	4.2	2.7	49		P-14-m-5		鋳型
144	獸脚	7.1	4.0	5.6	78		第1号鋳込み		鋳型
145	獸脚	2.5	2.3	3.0	15		P-13-l-1		鋳型
146	獸脚	4.5	3.7	2.7	28		炉体4号№72		鋳型
147	鏡	6.6	6.8	2.0	88		P-13-h№6		鋳型
148	仏具 飾り金具	4.5	3.6	2.4	45		P-14-m-4		鋳型
149	仏具 飾り金具	3.6	3.0	2.0	25		P-14-e-8		鋳型
150	仏具 つまみ			1.5	5	直径4.8 つまみ径1.6	Q-13-d-2		鋳型
151	仏具 飾り金具	5.1	2.2	1.9	28		S S K 9		鋳型
152	容器	4.0	4.1	2.2	35		P-14-m-5		鋳型
153	容器		2.1	1.3	10.0				鋳型
154	仏具 つまみ	1.3	2.2	1.3	4		P-14-i-7		鋳型
155	仏具 不明	2.0	2.2	1.1	3		Q-13-d-2		鋳型
156	鉄滓	2.1	3.4	1.2	13.2		第1号鋳込み	分析資料№45	滓4'
157	鉄滓	2.0	3.4	4.6	15.1		第1号鋳込み	分析資料№46	滓1
158	白色滓	3.8	5.9	2.1	34.5		第1号鋳込み	分析資料№47	白色滓
159	トリベ				148	口径11.4 器高(5.6)	炉体2号№2	分析資料№38	土器
160	半球状土製品	6.3	6.1	45	138		S S K 9		土器
161	円盤状土製品		4.3	2.0	43	直径4.4	P-13-p-9		土器
162	円盤状土製品	4.0	4.5	1.3	30		P-13-h-9		土器
163	半球状土製品			5.4	160	直径(7.0)	炉体5号№1		土器
164	球状土製品		6.9	5.5	234	直径5.9	S S K 9 P-13-l-3		石
165	三叉状土製品			3.0	35		P-14-m-4		土器
166	三叉状土製品			3.3	50		S S K 9		土器
167	三叉状土製品			2.4	25		S S K 9		土器
168	鉄製品	7.0	2.4	2.2	37		P-13-l-5		塊1

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
169	鉄塊系遺物	4.7	6.2	1.3	47.2		P-13-1-3		塊1
170	鉄塊系遺物	4.8	4.6	1.1	39.2		P-13-1-7		塊1
171	鉄塊系遺物	5.2	7.5	1.0	11.7		SSK9		塊2
172	鉄塊系遺物	6.5	5.4	3.1	20.3		P-13-1-3		塊1
173	鉄塊系遺物	3.2	3.3	1.5	34		P-14-1-4		塊1
174	鉄塊系遺物	2.8	3.7	2.4	59.9		分析資料No5		塊1
175	鉄塊系遺物	4.1	5.9	3.4	113		P-14-m-5		塊1
176	鉄塊系遺物	5.4	5.3	2.2	126.8		Q-13-d-3		塊1
177	鉄塊系遺物	2.9	5.5	2.5	63		P-14-i-7		塊1
178	銅塊	2.5	4.3	1.5	45		粘土下層		銅1
179	鉄塊系遺物	3.5	4.6	3.5	51.5		P-14-e-7		塊1
180	鉄滓	4.1	2.6	2.4	17.4		P-13-1-8		他の滓
181	銅滓	3.1	2.6	2.5	30.9		P-13-1-5		銅1
182	鉄塊系遺物	1.3	2.3	0.9	10		P-14-i-4		塊1
183	鉄滓	6.5	6.9	4.9	148.5		SSK9分析資料No21		他の滓
184	炉壁			5.0		外径77.0 高さ32.2	第2号溶解炉		炉4

第23表 第5 鋳造構群一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-05 SSK01	SS-05 SK01	P-13-P	方形	1.80		0.30	N-35'-W
SSK02	SK02	P-13-P	長方形	1.80		0.25	N-6'-W
SSK03	SK03	P-13-P	長方形	1.85	1.54	0.35	N-22'-W
SSK04	SK04	P-13-1	円形	1.50		0.48	N-1'-W
SSK05	SK05	P-13-1	楕円形	2.34	1.41	0.90	N-20'-W
SSK06	SK06	P-14-m	長方形	2.00	1.63	0.35	N-1'-E
SSK07	SK07	P-14-m	長方形	1.40	0.68	0.10	N-59'-E
SSK08	SK08	P-14-m	長方形	2.30	1.63	0.13	N-19'-W
SSK09	SK09	P-14-i	楕円形	4.40	4.06	1.00	N-89'-E
SSK10	SK10	P-13-1	方形	2.30	1.82	0.25	N-15'-W
第1号鋳込み	第1号鋳込み	P-13-P					
第1号溶解炉	第1号炉	P-13-P	円形	0.66			
第2号溶解炉	第2号炉	P-13-1	円形	0.77			
第3号炉	第3号炉	P-13-P					
第1号炭滓	第1号炭滓	P-13-P					
炉体1号	炉体1号	P-13-1					
炉体2号	炉体2号	P-13-1					
炉体3号	炉体3号	P-14-i					
炉体4号	炉体4号	P-14-i					
炉体5号	炉体5号	P-13-1					

b 第6 鑄造遺構群

調査区東側の第1斜面肩部のやや平坦な台地上に展開する鑄造遺構群である。東側には第7鑄造遺構群、北側には第5・8鑄造遺構群が存在する。本遺構群の南側には鑄造施設は確認できず、一様、東斜面に展開する鑄造遺構跡が本群を南端として一度区切れるものと考えられる。しかし、第14・15鑄造遺構群の存在が確認されたことを考え合わせれば、やや距離を置いて更に南側に伸びる斜面にも鑄造遺構群の存在が予想される。

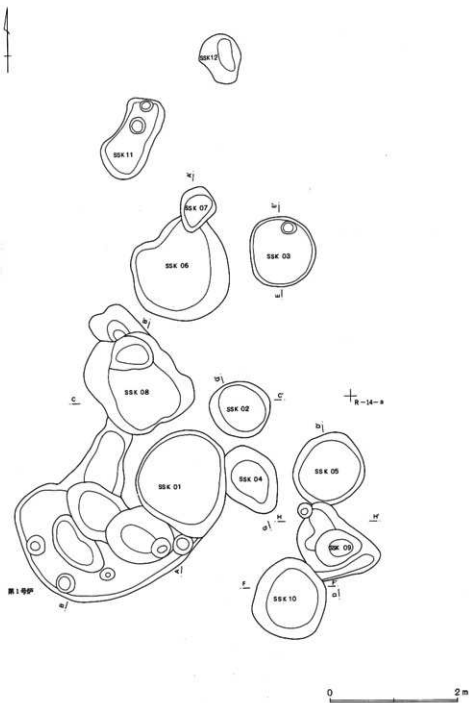
本群は滓や炉壁を含む堆積層とその下から検出された小規模な鑄造土壌の集合体で構成されている。検出された遺構は第1～12鑄造土壌と第1号鑄込み跡である。

出土した鑄造遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口、粘土塊である。

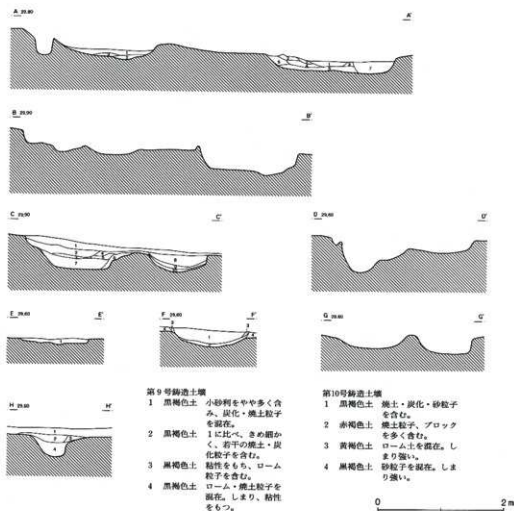
本遺構群を特徴づける遺物として鑄型がある。鑄型は2875gを計量したが、この内獸脚鑄型を多く検出し、このほか、容器鑄型、梵鐘鑄型も検出された。また、炉壁・羽口の溶解遺物は遺構出土よりもグリッド出土が約3倍、鉄塊・滓・木炭等の廃滓遺物はやはりグリッド出土が6倍と多く、本遺構群の周辺あるいは埋没後に廃滓場として利用されたことをうかがわせる。遺構内からは溶解作業に関連する遺物が極端に少ないことも注目される。



第6 鑄造遺構群 (南から)



第250图 第6铸造遺構群全体図(1)



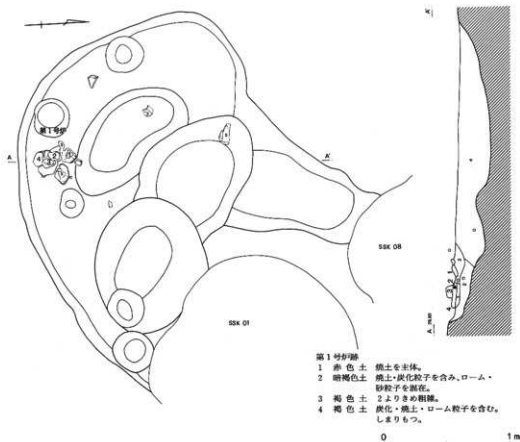
第251図 第6鋳造構群全体図(2)

遺構

第1号炉跡 (第252図)

本群の南西にあたり、形態はやや大型の不整形な掘り込み内に小型の楕円形をした土壌が3基重なり合って検出された。東側には第1鋳造土塊、北側には第8鋳造土塊と重複関係にある。規模は東西2.80m、南北2.86m、深さ14から24cmである。本土塊は鋳造土塊と考えられるが南寄りの位置に溶解炉の跡と考えられる部分を検出した。正確なところは不明であるが第1号炉跡とする。

第1号炉は土塊掘り方を第1～第4層によって埋め戻された整地層の上面で検出された。第4層はしまりをもちこの層の先端部を焼土・炭化・ローム粒子を含む第2・3層で埋め戻される。この上層は赤色の焼土を主体とした焼けた第1層を確認した。この焼土層の上に径15cm程の石と炉材と考えられる粘土塊(1～3)と弧を描き外側に開く炉壁片(4)を検出した。整地面が焼けていること、大きな石を伴うことから溶解炉が設置された場所と思われる。



第252図 第6群第1号炉跡

第1号鑄造土壌 (第253図)

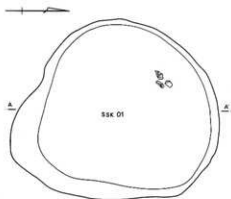
本土壌は、第1号炉を伴う土壌の北東の位置にあたる。形態は円形であり、底面は中央やや東寄りが深く皿状をしている。規模は径1.55m、深さ29cmである。覆土は第1層が焼土・炭化粒子を含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第2号鑄造土壌 (第253図)

本土壌は、第6鑄造遺構群の中心にあたり他の鑄造土壌に囲まれている。形態は円形であり、底面は中央部がやや深く掘鉢状である。規模は径0.97m、深さ33cmである。覆土は第8～10層があたり鉄滓を含む褐色土で覆土と考えられる。一方、第9・10層はローム・砂粒子を含みしまりをもち整地層と判断された。この整地層中から獸脚鋳型の合わせ(12)を検出した。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

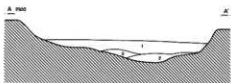
第3号鑄造土壌 (第254図)

本土壌は、北寄りに位置し、西側には第6・7号鑄造土壌が存在する。形態は円形であり、底面は中央やや凹み皿状をしている。規模は径1.07m、深さ8cmである。覆土は焼土・炭化・ローム粒



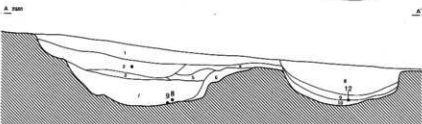
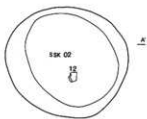
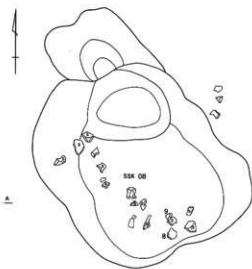
第1号鑄造土塊

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。
- 2 褐色土 1に比べ、ローム粒子混在。
- 3 暗褐色土 しまりやや弱く、ローム・焼土粒子を含む。



第2号・第4号鑄造土塊

- 1 暗褐色土 焼土・砂・炭化粒子を含み、しまり弱い。
- 2 暗褐色土 1に比べ、しまり強く、きめ細かい。ローム・焼土・炭化粒子を含む。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体。(貼り床する。)
- 4 黄褐色土 ローム・砂粒子を主体。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを混入。焼土粒子を含む。
- 6 暗褐色土 きめ細かく、しまりもつ。ローム・炭化粒子を含む。
- 7 暗褐色土 きめ細かく、しまり強く、焼土・炭化粒子を少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。(鉄滓混入)
- 9 褐色土 ローム・砂粒子を含み、しまりもつ(ローム貼り込み)
- 10 黄褐色土 砂・ローム粒子を含む。



0 1 m

第253図 第6群第1・2・8号鑄造土塊遺物分布図

子を含みしまりの弱い暗黒褐色土である。また、覆土中から焼土や炉壁を検出した。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第4号鑄造土壌 (第254図)

本土壌は、第1号鑄造土壌の東側に隣接して検出した。形態は菱形をし、底面は中央やや低く皿状をしている。規模は長径1.00m、深さ18cmである。覆土中からは拳大の礫を多く出土する。また、獸脚鑄型(第257図7・13・15)も検出した。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第5号鑄造土壌 (第254図)

本土壌は、第4号鑄造土壌の東に位置し、第9・10号鑄造土壌が南側に連続して存在する。形態は円形であり、底面は平坦で皿状をしている。規模は径1.10m、深さ15cmである。覆土中からは羽口、獸脚鑄型の合わせ、三叉状土製品を検出した。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第6号鑄造土壌 (第254図)

本土壌は、第3号鑄造土壌の西側に位置する。北側には第7号鑄造土壌と重複関係にあり本土壌が古いことが断面観察により確認されている。形態はやや不整形円形ながらも、底面は平坦である。規模は長径1.55m、深さ22cmである。覆土は第1・2層が焼土・炭化粒子を含み砂粒子を混在させ、第5層は焼土・炭化粒子を多く含む。また、獸脚鑄型を検出した。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第7号鑄造土壌 (第254図)

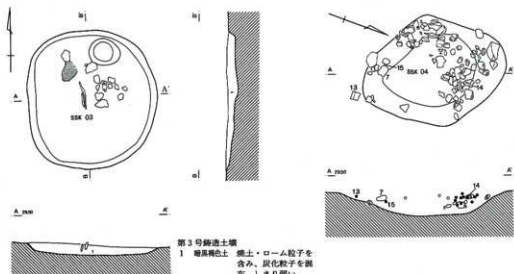
本土壌は、第6号鑄造土壌を壊して北側に造られている。形態は円形であり、底面は平坦である。規模は径0.55m、深さ25cmである。覆土はロームブロックを多く含む第7層である。鑄造土壌としたが柱穴の可能性も考えられ土壌の機能や性格については不明である。

第8号鑄造土壌 (第253図)

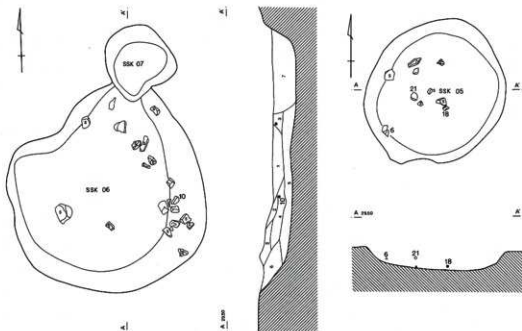
本土壌は、第2号鑄造土壌の西側に位置する。形態は不整形円形をしており北側はピット状の掘り込みと重複している。底面は中央が深く壁ぎわには浅いテラスをもっている。平面観察では確認できなかったが、断面観察によると3基の鑄造土壌が存在していた可能性が考えられる。最も古いのは第7層を覆土とする鑄造土壌(A)、次に第4・5層を覆土にもつ鑄造土壌(B)、そして最後に造られた第1～3層の堆積層をもつ鑄造土壌(C)の順である。土壌Bの第4・5層はロームを主体とし貼床された作業面の可能性が高い、この層を切り込んで土壌Cの覆土が堆積し、しかも3層はロームを主体とした黄褐色の貼床層である。ただし、第7層を土壌Bの掘り方と捉えれば土壌Aの存在はないこととなる。少なくとも、第8号鑄造土壌は第4層の作業面と第3層の作業面の2面が存在し同じ場所に造り替えられたものと考えられる。それぞれの規模は不明であるが全体の規模は長軸1.58m、短軸1.32m、深さはそれぞれAが48cm、Bが7cm、Cが22cmである。検出した遺物は8・9の大型の獸脚鑄型である。

第9号鑄造土壌 (第250・251図)

本土壌は、北側に第5号、南側に第10号鑄造土壌が存在し、挟まれた位置にある。形態は楕円形



第3号跡造土壇
1 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む、炭化粒子を混在。しまり強い。



第6号・第7号跡造土壇
1 暗褐色土 焼土・砂粒子を含む。
2 黄褐色土 炭化・ローム・砂粒子を含む。
3 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む。
4 明褐色土 3よりやや明るい。しまり強い。
5 明褐色土 焼土・炭化粒子をやや多く含む。
6 黄褐色土 ローム粒子、ブロック、砂粒子を含む。
7 暗褐色土 ロームブロック、焼土・炭化粒子を含む。

0 1 m

第254図 第6群第3～7号跡造土壇遺物分布図

で中心がピット状に深く掘り込まれている。規模は長径1.22m、深さ46cmである。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第10号鑄造土壌 (第250・251図)

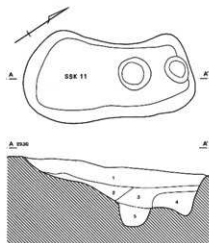
本土壌は、第9号鑄造土壌の南側に位置する。形態は円形であり、底面は中央やや東寄りが高く皿状をしている。規模は径1.14m、深さ22cmである。覆土は第1層が焼土・炭化砂粒子を含み、下層の第2層は6cm程の赤褐色土が堆積し、焼土粒子および焼土ブロックを含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壌としたが土を多く含む。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

第11号鑄造土壌 (第255図)

本土壌は、第6号鑄造遺構群の中でも北側に位置する。形態は隅丸長方形であり、底面は北壁および西壁、南壁側が深く掘り込まれ、2基の柱穴を検出した。規模は長軸1.34m、深さ28cmである。覆土は地山の砂礫層の砂礫を多く混在させ、ピット内は灰褐色土の砂質土を主体としている。第1層が焼土・炭化粒子を含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壌としたが土壌の機能や性格については不明である。

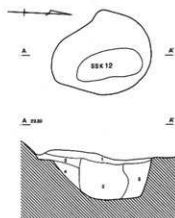
第12号鑄造土壌 (第255図)

本土壌は、第11号鑄造土壌の東側に位置する。形態は不整楕円形であり、底面は平坦であるが深く楕円状をしている。中央やや東寄りが高く皿状をしている。規模は径1.55m、深さ29cmである。覆土は地山に見られる砂礫を多く混在させる。断面観察から判断すると柱穴の可能性もあるが機能や性格については不明ながらも鑄造土壌としておく。



第11号鑄造土壌

- 1 黒褐色土 砂利、ローム・砂粒子を含む。
- 2 暗褐色土 砂利を多く含む、しまりややもつ。
- 3 褐色土 砂利を含み、しまりややもつ。
- 4 黄褐色土 若干の焼土粒子、砂利を多く含む。
- 5 灰褐色土 砂質土を主体。砂利を混在。



第12号鑄造土壌

- 1 暗褐色土 炭化物を含み、砂利、ローム土を混在。
- 2 黒褐色土 若干の焼土・炭化粒子を混在。砂利を多く含む。
- 3 暗褐色土 砂利を主体。
- 4 黄褐色土 砂利を多く含む。

0 1m

第255図 第6群第11・12号鑄造土壌

遺物

鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊1951g、炉壁15966g、銅滓63g、鉄滓23692g、木炭614g、白色滓528g、石2185g、鑄型2825g、土器1227g、羽口1913g、粘土塊239gである。

遺物は各遺構覆土および上層を覆っていた堆積層内から検出したグリッド出土遺物の合計である。遺物は計量比から見ると鑄型・土器は遺構内の方がグリッド出土遺物より多いことが窺え、炉壁・羽口の溶解遺物、鉄塊・鉄滓・白色滓・木炭の溶解時にできる廃滓遺物はグリッド出土の方が多いことがわかった。このことは、堆積層が自然の堆積物で構成されたのではなく鑄造遺物の組成から溶解炉と廃滓とが見られ本遺構群内で溶解作業を行っていた可能性が推測できる。また遺構内からは鑄型が出土しており第3号鑄造土壌などは鑄込み土壌としての性格を持っていたことが推測できる。さらに、注意されることは鑄造土壌とした中に拳大の石を多く出土する土壌が見られ石の性格や用途については不明である。

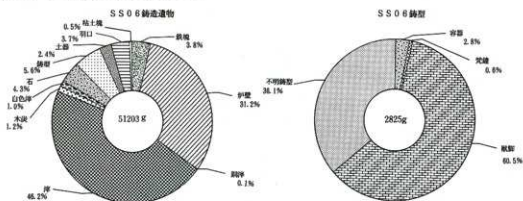
鑄型種類は、容器83g、梵鐘18g、獸脚1818g、不明906gを計量し、全体量は少ないが比率的には獸脚鑄型を多く検出した。また、グリッドから梵鐘鑄型を一片18g検出した。鑄型から判断して第6鑄造遺構群は獸脚の付く仏具容器製品の生産を行っていたものと考えられる。

炉壁は1～4である。1～3は溶解面をもたないことが特徴と言える。素材は粘土で素焼きされている。形態は上面に幅6cm程の平坦面をもち厚さ10cmのドーナツ型の炉台の一部と考えられる。4は溶解炉の頂部で「上こしき」と呼ばれる部分の破片と考えられる。素材は粘土であり、上端および下端にはそれぞれ平坦面をもつ。上端の残存幅は3.0cmで赤褐色をしている。下端の残存幅は4.5cmで青灰色をしている。下端部分は「こしき」と接するものと考えられる。内面は溶解物の付着は見られず、粘土表面を指ナデした痕をそのまま残す。また、還元されたため色調は青灰色である。裏面は炉壁粘土の一部が剝離している。

羽口は5・6である。羽口は粘土で造られ、形態は円筒形をした大口径と考えられる。内面は赤褐色でナデ整形され、外面は湯滓の付着が見られる。先端は幅1.2cm程の面を残しザラザラした青灰色の還元状態になっている。湯滓の付着面とは状態が異なり羽口先端の特徴である。内寸の羽口径は5で12.0cm、6で10.4cmである。

鑄型は7から20まであり、18は不明であるが、その他は大型の獸脚鑄型である。この内12・13・20は合わせ蓋と見られる。10は外型右側面に幅2.0cm、厚さ1.1cmの粘土紐がはり付いて残る。12の合わせにも同様の粘土紐が付いている。このことから、獸脚鑄型は獸面の模様が付く箱型の外型と合わせ蓋は粘土紐によって固定されていたことが窺える。11は、両端が欠けた未使用の獸脚鑄型である。胎土は、1mm以下の不透明な白色粒子を中心に白っぽい有色砂粒を1/2程含む砂質土である。スサは入らないが0.5mm程の径をもつ微細なスガ認めらる。内側は獸脚端部を示す外型である。文様は7本の長軸方向へ向かう「V」字状のすじから、こぶ状の突出部をへて4条のキザミとなる。獸脚下端部と考えられる。裏面中央の背面部分は、最大深さ1.6cm程が被熱の結果発泡し、稜の片側は厚さ5mm程が溶解し、やや流動気味である。また、その部分に限り1.2cm程の木炭痕が2箇所認められる。色調は、内側の獸脚面から蓋の接合部にかけて赤褐色に酸化しており、それ以外は発泡部分も含めて灰色に熱変化している。本資料のように外面が発泡し、内面の獸脚片面近くまで還

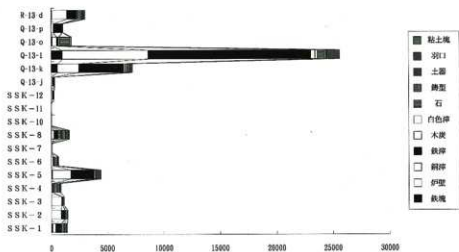
第24表 第6群鋤造遺構群遺物計量表(1)



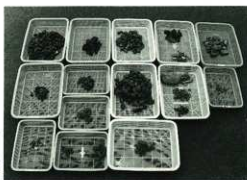
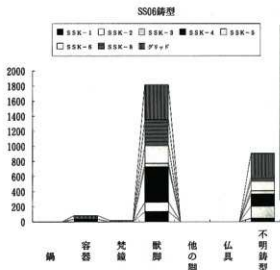
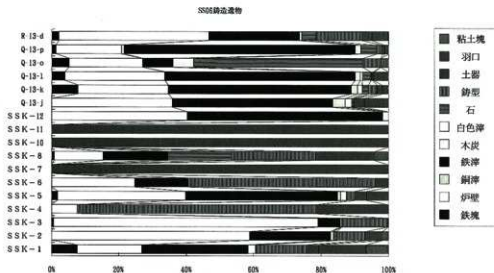
小番号	鉄塊	伊壁	銅屑	鉄屑	木炭	白色埴	石	鉄屑	土器	羽口	粘土塊
SSK-1	116	279	0	466	0	30	2	213	51	290	95
SSK-2	0	875	0	366	0	13	15	125	75	0	27
SSK-3	7	915	0	78	5	0	0	161	0	0	0
SSK-4	0	87	0	0	0	0	0	627	190	0	0
SSK-5	80	1580	2	1988	40	75	11	95	160	286	0
SSK-6	0	160	0	107	0	0	0	358	25	0	0
SSK-7	0	0	0	0	0	0	0	0	60	0	0
SSK-8	12	238	0	312	1	0	310	465	285	0	67
SSK-9	0	0	0	0	0	0	0	9	26	0	0
SSK-10	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0
SSK-11	0	110	0	158	5	0	0	0	0	0	0
SSK-12	0	115	0	153	12	0	2	0	10	23	0
Q-13-k	963	1940	3	3827	133	104	120	186	195	140	0
Q-13-l	1904	7650	48	14118	380	185	815	104	88	1192	0
Q-13-o	59	494	0	184	0	112	925	98	0	0	44
Q-13-p	14	212	10	742	18	0	50	19	8	12	0
Q-13-q	66	1371	0	878	20	0	128	274	80	145	6
合計	1951	12886	63	23692	614	528	2185	2905	1227	1813	229

小番号	鍋	容器	炭塊	厚	他の鍋	仏具	不明鋤型	日用品小計	仏具小計	鋤型小計
SSK-1	0	0	35	0	135	0	0	43	35	135
SSK-2	0	0	0	0	123	0	0	2	0	123
SSK-3	0	0	0	0	0	0	0	161	0	161
SSK-4	0	0	0	468	0	0	159	0	468	627
SSK-5	0	0	0	30	0	0	45	0	30	95
SSK-6	0	0	0	234	0	0	124	0	234	358
SSK-7	0	0	0	345	0	0	60	0	345	925
Q-13-f	0	48	18	463	0	0	212	48	481	841
合計	0	83	18	1818	0	0	908	83	1836	2825

SS06鋤造遺物

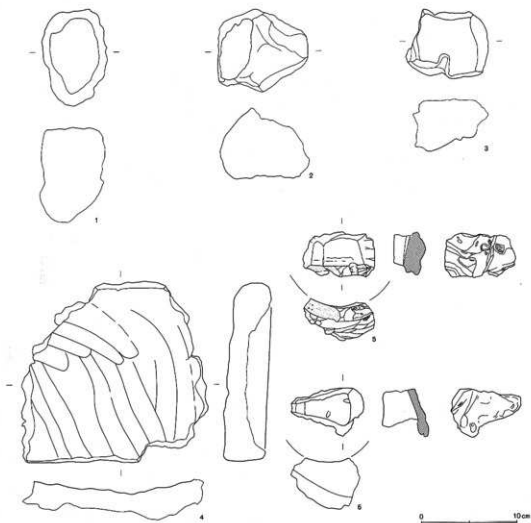


第25表 第6 铸造遺構群遺物計量表(2)



元気味に熱変化している例は本遺構群の鋳型片に共通してみられる。こうした熱変化の推移は一度型焼きによって酸化焼成された鋳型が、鋳込みによるものではなく、二次的に加熱されたためと考えられる。これは内側の鋳型面の未使用状況と考え合わせると鋳型が他の用途に転用されたためによるものと見られる。

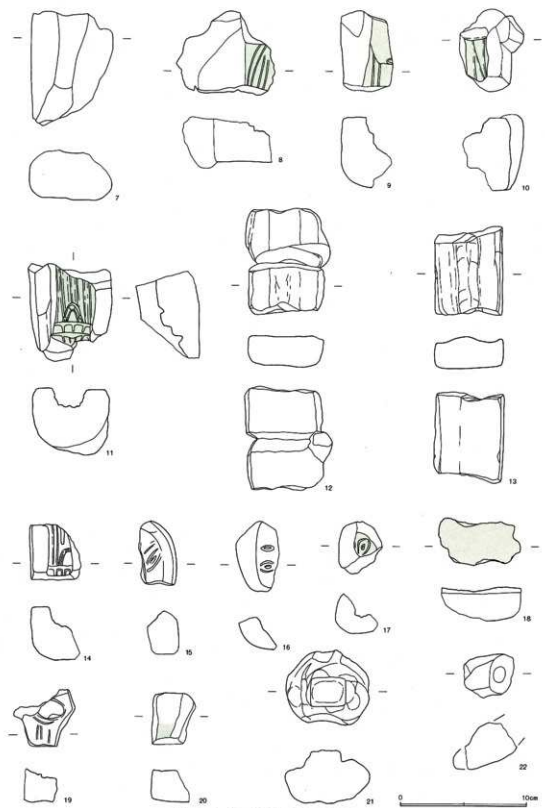
道具は21の半球状土製品と22の三叉状土製品を検出した。



第256図 第6 鋳造遺構群出土遺物(1)

第6 群出土鋳造遺物観察表 (第256・257図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
1	炉壁	9.9	6.5	9.9	605		第1号鋳込みNo.4		炉1'
2	炉壁	8.5	9.3	7.3	460		第1号鋳込みNo.7		炉1'
3	炉壁	5.0	8.0	6.9	275		第1号鋳込みNo.3		炉1'
4	炉壁	18.7	18.0	4.4	1195		第1号鋳込みNo.6		炉2
5	羽口	4.7	7.5	3.4	75	直径(12.0)	SSK 5		羽口
6	羽口	5.1	7.7	5.0	100	直径(10.4)	SSK 5 No.4		羽口



第257图 第6 铸造遗物群出土遺物(2)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
7	獣脚	9.0	6.5	3.7	199		S S K 4 No16	鋳型
8	獣脚	5.4	6.8		100		S S K 8 No 1	鋳型
9	獣脚	5.9	3.9	5.5	90		S S K 8 No 2	鋳型
10	獣脚	6.5	5.0	5.8	154		S S K 6 No 3	鋳型
11	獣脚	7.6	5.5	5.2	135		R-13-d-5	鋳型
12	獣脚 合わせ	8.1	6.5	2.4	140		S S K 2 No 1 R-13-d-5	鋳型
13	獣脚 合わせ	6.9	5.5	2.5	100		S S K 4 No19	鋳型
14	獣脚	4.4	3.6	3.9	50		S S K 4 No 4	鋳型
15	獣脚	4.9	2.9	2.5	47		S S K 4 No17	鋳型
16	獣脚	5.5	3.3	1.6	25		S S K 8	鋳型
17	獣脚	4.0	3.1	3.1	20			鋳型
18	不明	3.0	6.3	2.5	40		S S K 5 No 5	鋳型
19	獣脚	3.2	4.0	2.4	28		S S K 6	鋳型
20	獣脚 合わせ	4.0	3.0	2.5	35		S S K 1	鋳型
21	半球状土製品	5.7		4.1	116	直径6.5	S S K 5 No 3	土器
22	三叉状土製品			3.3	35		S S K 2 覆土	土器

第26表 第6 鋳造遺構群一覧表

新番号	旧番号	位置	形状	長軸	短軸	深さ	主軸方向
S S -06 S S K01	S S -06 S K01	R-13-d	円形	1.55		0.29	N-1'-W
S S K02	S K02	R-13-d	円形	0.97		0.33	N-10'-W
S S K03	S K03	Q-13-p	円形	1.07		0.08	N-1'-E
S S K04	S K04	R-13-d	菱形	1.00		0.18	N-10'-W
S S K05	S K05	R-13-d	円形	1.10		0.15	N-1'-W
S S K06	S K06	Q-13-p	楕円形	1.55		0.22	N-9'-W
S S K07	S K07	Q-13-l	円形	0.55		0.25	N-9'-W
S S K08	S K08	Q-13-o	楕円形	1.58	1.32	0.48	N-30'-W
S S K09	S K09	R-13-d	楕円形	1.22	0.90	0.46	N-1'-E
S S K10	S K10	R-13-d	円形	1.14		0.22	N-1'-E
S S K11	S K11	Q-13-k	隅丸長方形	1.34		0.28	N-30'-E
S S K12	S K12	Q-13-l	楕円形	1.55		0.29	N-27'-W
第1号炉	第1号鋳込み	R-13-c	楕円形	2.86	2.80	0.24	

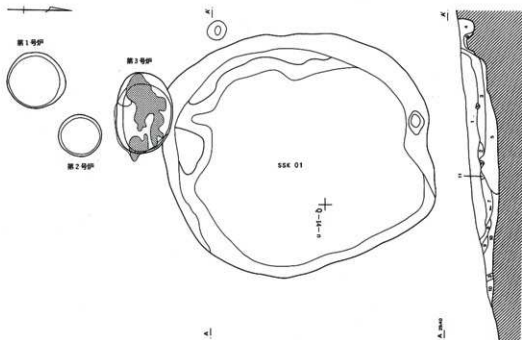
c 第7 鋳造遺構群

本群は、東側の二段からなる緩斜面に展開する第5～13鋳造遺構群の中でも南側に位置し、周辺には西側に第6 鋳造遺構群、東側に第10・12鋳造遺構群、北側に第5・8 鋳造遺構群が存在する。これらの第5～13鋳造遺構群は東側の2段からなる緩斜面に展開し梵鐘を始めとして小仏像、器、飾り金具、獣脚等の仏具用品を生産している。本群は中でも南側寄りのQ-14区、緩斜面上部にあたり、東側の斜をやや下った位置に第10鋳造遺構群の梵鐘鋳造土壌である第1号鋳造土壌が存在する。

検出遺構は第1号鋳造土壌と第1・2・3号炉、第1号廃滓である。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口の鋳造遺物を検出した。特に鋳型は梵鐘鋳型のみ12634gを計量した。

このことは、本遺構群が梵鐘鋳造に関わっていたことが窺える。



- | | | | |
|--------|---|---------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒子 (径5~10mm)、炭化粒子 (径5~23mm)、小砂利多く含み、きめ粗雑。 | 6 黄褐色土 | やや明るい。 |
| 2 暗褐色土 | ややしまり、粘性もつ。 | 7 明褐色土 | 1に近似するが、やや暗い、焼土・炭化粒子を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 炭化粒子 (径5mm)、焼土粒子 (径2~5mm) を含み、しまり強くきめやや細かい。 | 8 砂 利 | 小砂利を主体。 |
| 4 暗褐色土 | ややきめ細かくしまり強い。 | 9 砂 礫 | 砂礫を多く含む。 |
| 5 黄褐色土 | ローム粒子を含み、しまりもつ。 | 10 褐色土 | 焼土粒子 (径2~5mm)、砂利を含み、きめ粗雑。 |
| | | 11 砂 質土 | |

0 2m

第258図 第7 铸造遺構群全体図

遺構

第1号铸造土坑 (第259図)

形態は南北方向にやや長い隅丸長方形をしている。規模は南北4.40m、東西3.80m、深さ56.9cmである。土壌は鉄滓や銅滓、炉壁片を多く含む廃滓とも堆積層とも見られる土に覆われ平面形態の検出は当初できなかった。これらの廃滓遺物を1mメッシュの小グリッドで取上げ徐々に掘り下げていくが、滓を含んだ土は非常に硬くしまっており、幾度となく鉄滓や炉壁片を掘り出すため移植ごては折れ曲がり、手ばちを使っても思うように掘り進められない。終いには移植ごてを持つ手にまめができ、手首がしびれる始末である。

確認面から傾斜面に合わせて全体に20cm程掘り下げたところで西側の土壌平面形が確認でき、かなり北側に広がる大きな土壌であることが判断できた。しかし、この時点でも東側の形状ははっきり掴めなかった。そこで、最初に設定した断面観察用のベルトに沿ってトレンチを開け底面までの

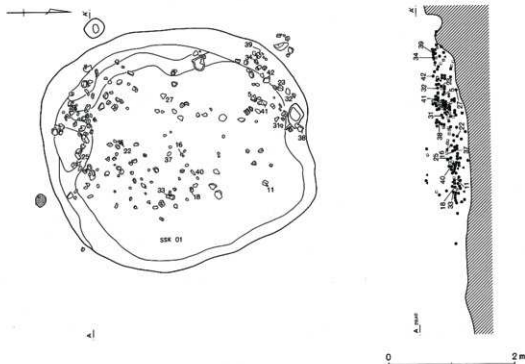
深さと東側の立ち上がりの確認作業を進めた結果、底面は廃滓層から70cm程でほぼ平坦面を検出。東側は立ち上がりがなく断面「L」字状の掃き出し型であることを確認した。こうして土壌の形態・規模を掴んだところで、再び、10cm程掘り進むと鉄滓や炉壁片に混じって今度は梵鐘の鋳型片を多く出土するようになった。

土壌は小砂利や礫を含む地山のローム土を「L」字状に切り込んで造られており、東側は地山のローム面と同じ高さに底面は掘り込んでいた。中央のわずかに一段掘り窪められた平坦面は焼土粒子、炭化物片が残存している。

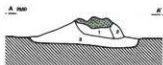
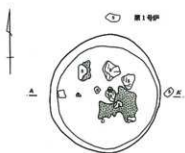
本遺構は梵鐘鋳造鋳込み土壌と考えるのか、あるいは、作業場にあたるかと考え、これに伴う鋳込み跡は第10号鋳造土壌群内の第1・5号鋳造土壌があたると考えてよいのか不明である。

第1号炉 (第260図)

第1号鋳造土壌を覆っていた廃滓堆積層と同じ面で確認した。12~15cm程の石を数個まとまって検出。中央部に炉壁を伴っていた。形態は浅い円形をし、径0.93m、掘り方深さ6cmである。断面観察によると覆土は焼土・炭化粒子を含む掘り方埋土の第3層を基盤にして第1・2層の粘性土が上面を覆っている。その上に崩壊した炉壁片の残片を検出した。出土遺物は鉄塊8g、炉壁1085g、鉄滓95gである。石については計量できなかった。

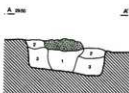
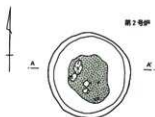


第259図 第7群第1号鋳造土壌



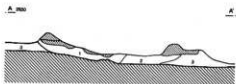
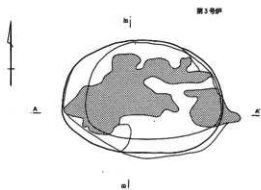
第1号炉

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 2 暗褐色土 1に比べて、明るく粘性をもつ。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子含む。しまり強い。



第2号炉

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子含む。しまりもつ。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子含む。しまり強い。



第3号炉

- 1 砂質土 砂を主体。しまり、粘性なく、きめ細かい。
- 2 暗褐色土 炭化材を多く含む。炉内部の覆土と考えられる。
- 3 黒褐色土 砂利、焼土・炭化粒子を含み、しまり強い。

0 1 m

第260図 第7群第1～3号炉跡

第2号炉 (第260図)

第1号炉と第3号炉の中間に位置する。第1号炉と同様第1号鑄造土塊を覆っていた廃滓堆積層と同じ面で確認した。8~12cm程の石を数個検出。中央部に炉壁を伴っていた。形態は浅い円形をし、径0.67m、掘り方深さ25cm程である。断面観察によると覆土は焼土・炭化粒子を含む掘り方埋土のしまりをもつ第3層を基盤に焼土・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。その上に崩壊した炉壁片の残片を検出した。出土遺物は鉄塊15g、炉壁60g、鉄滓138g、木炭10g等である。

第3号炉 (第260図)

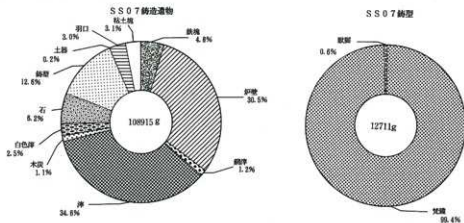
第1号鑄造土塊の南側上部にあたる。第1・2号炉と同様に廃滓堆積層と同じ面で確認した。砂質土を主体として、その中心には鉄滓が広がって検出された。形態は楕円形である。長軸1.27m、短軸0.90m、掘り方深さ7.5cmである。断面観察によると、砂利、焼土・炭化粒子を混在するしまりをもった堆積土の地山を掘り込んで、炭化材を多く含む暗褐色土と砂質土が認められた。出土遺物は鉄滓155gを計量した。

遺物

鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊5330g、炉壁33618g、銅滓1351g、鉄滓38137g、木炭1222g、白色滓2702g、石6866g、鑄型12711g、土器246g、羽口3267g、粘土塊3465gを計量した。遺物の大半は第1鑄造土塊から出土したものである。特徴としては鑄型の殆どが梵鐘鑄型で占められ、わずかに77gだけ獸脚鑄型であった。また、銅滓と考えられるやや緑色気味の滓やブルー色の滓、そして、緑青の吹く滓を検出した。この銅滓と共に白色滓の検出が特徴である。

炉壁は、いずれも溶解炉の破片である。素材は粘土を基にして砂粒子、小石、滓片、鑄型片、焼土塊、黒鉛化木炭等周辺の混在物を多く取り込んで混ざっている。1は大きい破片である。表面は溶解物が厚く付着し、径0.1~1.7cmの大きささまざまな気泡痕を全面にもつ。上下方向の湯滓の流れが認められる。色調は灰褐色で白色滓と同質の滓が全体に付着している。裏面は横方向の弱いナデによって整形された茶褐色の粘土面である。3は、表面が灰白色に発泡し、全面に4mm以下の円、あるいは楕円の気泡痕(ガスの抜け穴がクレーター状に残る)をもつ溶解炉の炉壁片である。側面は直線状の6つの破面に囲まれており、その破面には2枚の湯滓(発泡)層が見られる。裏面は灰褐色、次に暗紅色の砂質の酸化面が残る。ごく少量ながら、板状でスジ目の弱い、1.5cm以下の短いスサが混入されている。又、ガラス質の滓小片も若干点在する。側面の破面の内、下面のみが内側から半分程溶解しており、壁の輪積部の収縮に沿ったヒビ割れ部分が溶解したものと推察される。なお、下端部の内面は、発泡したガスの抜け穴が大きく、上端部ではごく小さい。このことから本資料は、炉床中心よりやや上がった、胴部下端から底部に移行する部分の炉壁片であろうと見られる。内面の発泡部表面や側面の破面には、2~5mm大の褐色の鉄錆が付着しているのも特色である。裏面には、こうした現象は全くなく、この状態は土中で二次的に固着したものは少ないと見られる。なお、少なくとも発泡した溶解面が2枚は認められるため、内張りの補修を行い、溶解炉として再度使用されているものと判断される。内張りされた壁の溶け残りの厚さは、薄いところで1cm、厚いとこ

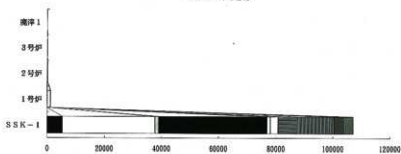
第27表 第7 鋤造遺構群遺物計量表(1)



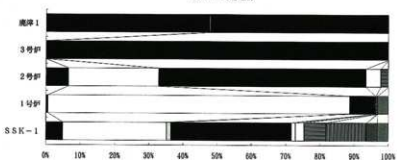
小番号	鉄塊	伊壁	鋤滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鋤型	土器	羽口	粘土塊
SSK-1	5287	32473	1351	37727	1212	2702	6856	12711	248	3287	3425
1号伊	0	1985	0	95	0	0	5	0	0	0	49
2号伊	19	59	0	138	11	0	3	0	0	0	0
3号伊	0	0	0	155	0	0	0	0	0	0	0
南岸1	20	0	0	22	0	0	0	0	0	0	0
合計	5300	33018	1351	38137	1223	2702	6856	12711	246	3287	3453

小番号	瓦	容壁	瓦壁	鋤壁	他の壁	仏具	不明鋤型	日用品小計	仏具小計	鋤型合計
SSK-1	0	0	8887	0	0	0	0	0	8887	8657
SSK-1' 伊	0	0	3987	77	0	0	0	0	4044	4044
合計	0	0	12834	77	0	0	0	0	12711	12711

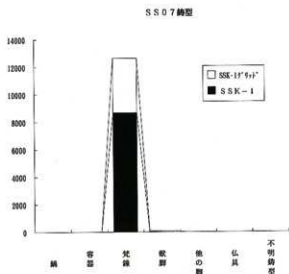
SS07 鋤造遺物



SS07 鋤造遺物



第28表 第7 鑄造遺構群遺物計算表(2)



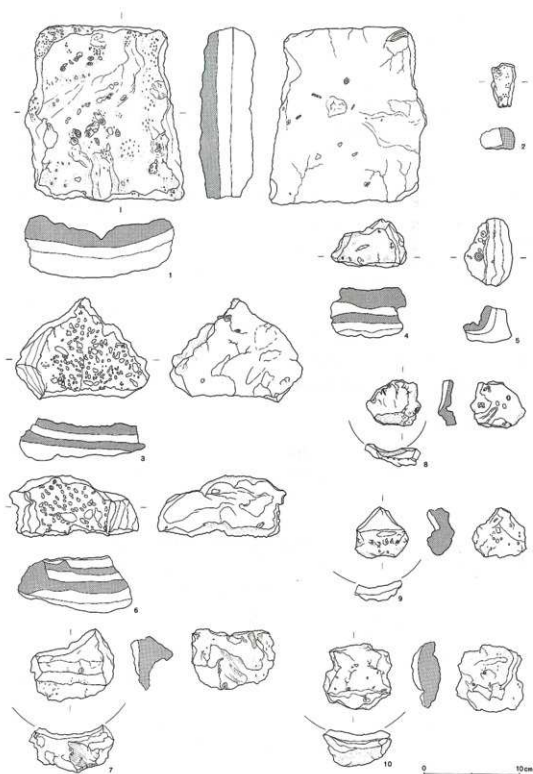
ろで約2cmである。一応、発泡部分の厚い方を下と考えておくが、破面の灰白色に発泡した部分の一部は、3枚の可能性もある。溶解した壁面のうち、表層2mm程が特に灰白色化しており、その内側の滓化した部分は灰褐色である。4・6の炉壁も同様である。5は表面黒色で光沢をもつ。還元された部分がやや薄く「L」字状の形状をしている。2方向に見られる粘土は胎土が異なる一方は炉壁胎土の外側に見られるやや荒めの滓、焼土、鑄型片、砂粒等を含む粘土で、もう一方はきめ細かく滓、砂粒を混在させている。これらのことから、溶解炉炉壁でも送風の当る位置で羽口装着のため炉壁に窓を開けた部分の可能性が考えられる。

羽口は、7～10である。形態はいずれも小破片であるが羽口先端部を残し、円形の大型羽口と考えられる。素材は粘土で砂粒子・径0.03mm程の細かい鉄滓粒・径2mmの石を混在する。外面には流動質の湯滓が0.2～1.0cm程の厚さで付着している。色調は鈍い黒色か紫紅色である。内面は黄褐色の粘土が残るが溶解時の高温および冷却等の要因で歪みと粘土のヒビ割れを起こしているのが特徴である。

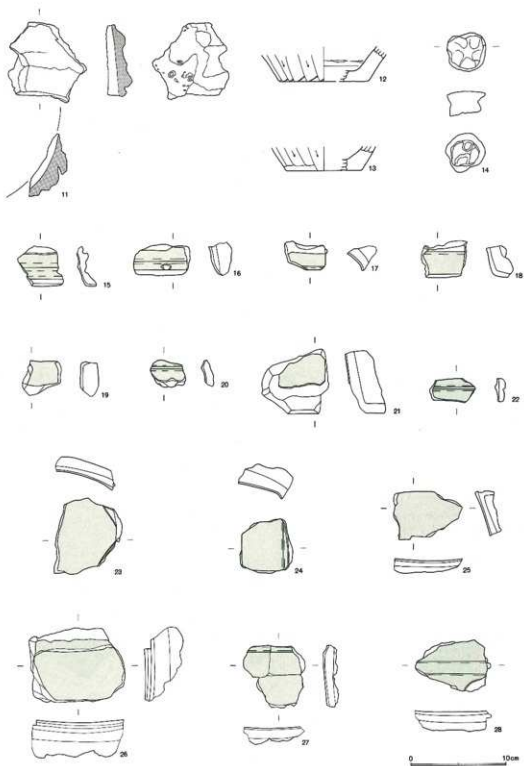
土器は、12・13の常滑焼きを検出。12は片口鉢底部である。底部平たく、体部は下から上方向に木口状工具によるケズリを施す。内面は平滑であり、見込部分を指頭で調整した際の凹みをもつ。13は甕底部である。底部平たく、体部は下から上方向にケズリを施す。内面には自然軸が付き平滑。

道具は、14の円盤状土製品を検出。断面形態は上下が左右に突出して中央部に凹みをもつ。手づくね成形である。上面は被熱され還元化している。胎土は砂粒子と短い白色針状物質を含んでいる。

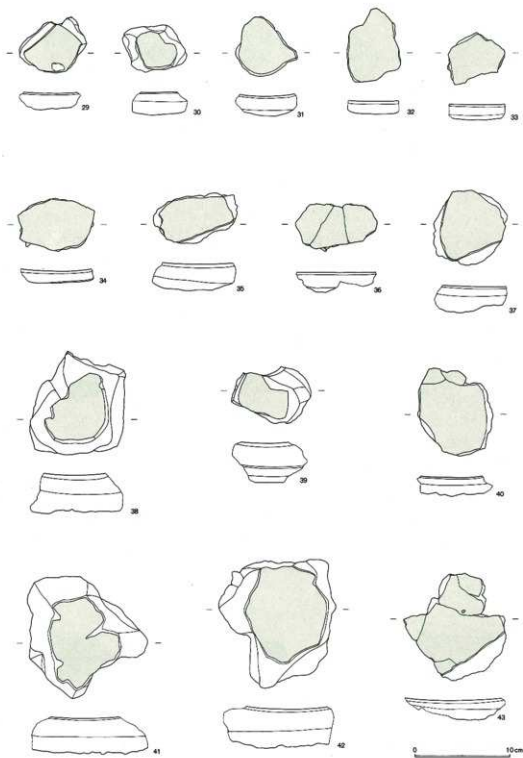
鑄型は、15～44が梵鐘鑄型である。検出した部位は笠型・撞座・横帯・駒の爪・素文の池の間等の部分である。梵鐘鑄型は基本的には本体部分を基型によって製作されている。このため、横方向の同心円で挽かれ、鑄型面に基型の条線が残っている。龍頭や撞座、乳は別作りであり、それぞれ



第261圖 第7 鑄造遺構群出土遺物(1)



第262圖 第7 銅造遺構群出土遺物(2)



第263図 第7 鈎造遺構群出土遺物(3)

の抜型を使用して製作し、後から梵鐘本体の鑄型を切り抜いて埋め込むという方法が取られたと考えられる。基型と抜型とでは、鑄型胎土が異なる。基型では、外側から荒真土、中真土、仕上げ真土の順で粘土が塗り込まれる。荒真土は厚さ1.7~2.0cm程で暗茶褐色の土に砂粒子、小石、滓片、焼土塊、鑄型片等の混入物が多く見られきめが荒い。中真土は0.5~1.0cmの厚みをもち鈍い黄褐色をしている。きめやや細かく砂粒子、小石、滓片を混入する。仕上げ真土は0.1~0.3cmの厚味をもちきめ細かい。鑄込んだ際に溶解物が直接流れ還元状態になるため、器肌面は青灰色になる。44の撞座鑄型は抜型で製作されている。

15~20は駒の爪部分の破片であると考えられる。特徴としてこの部分に柔らかい膨らみをもつ横帯が巡っている点である。21~23は笠型である。特徴として笠型の上部は扁平で急激に屈曲して笠型下部に至る形態と考えられる。27は横帯が巡る。25~43は素文であることから池の間等の部分と考えられる。44は抜型による撞座である。撞き木を受けるために設けられた蓮華文様の部分で文様意匠は複弁八葉蓮華文と推定される。蓮弁部分は欠損しやや膨らみをもつ子葉が中房部分に接する。中房の推定径6.0cm、この内、葉幅は1.1cmである。葉は細かい条線が放射状に伸び、外縁に堺線を挽き葉先端に蓮珠を表現している。

45は獸脚鑄型である。形態は小型で断面形は「凹」型をしている。製作法は抜型によると考えられ、あらかじめ、獅噛みの形を木彫りしたものを粘土に型押しをする。裏面は製作台の上に載せられているため平坦である。側面もやや内傾気味に成形されわずかながら曲線的に立ち上がっている。このことは、抜型を押すときや抜くときに側面に力がかかること、そして、合わせ蓋を固定させる際の粘土で押さえられることなどが要因として考えられる。本遺物は歯と右端部に牙が見られ中央に膝頭を表現したと考えられる2本の沈線が施されている。胎土は緻密で砂粒子を含む。色調は茶褐色で、還元面は青灰色である。

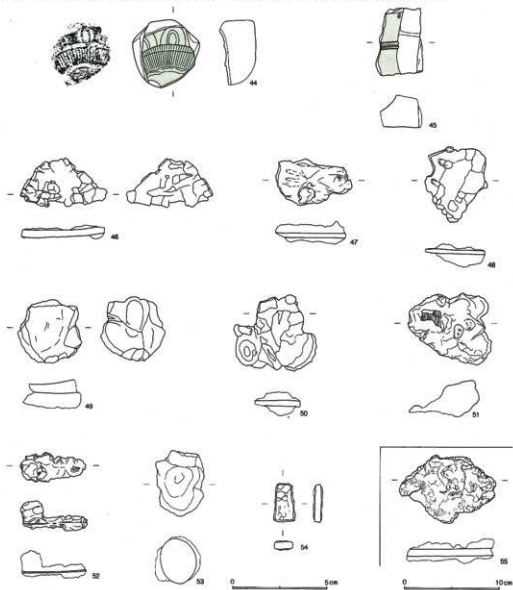
第7群出土遺物観察表 (第261~264図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
12	鉢		3.7	9.5	D I	A	褐色	20%	Q-14	常滑
13	甕	28.4	2.5	8.0	D I	A	灰色	15%	S S K 1	常滑

第7群出土鑄造遺物観察表 (第261~264図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	炉壁	18.2	15.8	5.9	1710		S S K 1	炉3
2	炉壁	2.2	4.6	2.2	20	直径(14.4)	Q-14-n-7	炉1
3	炉壁	10.2	13.7	4.2	410		S S K 1 分析資料No 9	炉1
4	炉壁	5.0	8.0	5.1	150		Q-14-i-8	炉3
5	炉壁	7.0	5.2	3.8	100		S S K 1 No123	炉1
6	炉壁	6.2	12.8	5.9	340		S S K 1	炉1
7	羽口	6.9	8.8	4.1	120	直径(14.6)	Q-14-i-6	羽口
8	羽口	5.8	4.8	1.5	20	内径3.1	Q-14-i-4	羽口
9	羽口	5.5	5.2	1.6	55	内径6.5	Q-14-i-8	羽口
10	羽口	6.9	7.0	3.0	90	直径(14.8)	Q-14-m-2	羽口
11	羽口	7.7	8.0	1.5	100	内径11.4	S S K 1 No111	羽口
14	円盤状土製品	4.0	4.1	2.4	30		No 1 Q-14-i-9	土器
15	梵鐘	3.3	4.2	1.2	19		Q-14-i-8	鑄型

鉄塊は、46～55である。46は、三角形の平面形を持ち、放射割れの目立つ薄い鉄片である。ごくゆるく内側に湾曲し、上下方向はほぼ直線状である。赤錆は全体に見られ、部分的に黒錆や白色の錆、さらに茶色の水状の酸化液が滲んでいる。片面の7割程が錆ぶくれによって剥離しており、色調は、全体に茶褐色で部分的に黒褐色である。鍛造品か、鋳造品かは不明である。49は、直線状の4ヶ所の破面に囲まれた、ゆるく内側に反る鉄片である。中核部の鉄片は、厚さ4mm程で、端部に放射割れがやや見られるものの、全体にはしっかりしている。ゆるい内反りの横断面や上下方向にもやや内反り気味である点などを加味すると、鋳造品の体部破片の可能性が高い。色調は鉄部分は黒褐色。部分的に赤褐色の錆が広がる。端部に鉄表面の黒錆化した部分が認められ、0.2mm程の気孔が若干見られる点も鋳造品を窺わせる。55は金属分の非常に多く残す鉄塊である。



第264図 第7 鋳造遺構群出土遺物(4)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備	考	分類
16	梵鐘	3.0	5.6	2.3	50		SSK 1 No.88		鋳型
17	梵鐘 笠形	3.6	2.5	2.4	24		Q-14-i-6		鋳型
18	梵鐘	2.9	5.3	2.3	40		SSK 1 No.99		鋳型
19	梵鐘	2.6	3.2	1.9	26		Q-14-i-6		鋳型
20	梵鐘	2.1	3.5	0.9	10	横帯幅0.5			鋳型
21	梵鐘 合わせ	3.2	4.8	2.8	132		SSK 1		鋳型
22	梵鐘	2.3	4.5	1.1	10	横帯幅0.5	SSK 1 No.82		鋳型
23	梵鐘 笠形	6.1	7.5	1.1	94		SSK 1 No.141		鋳型
24	梵鐘 笠形	4.8	5.3	2.7	75		SSK 1		鋳型
25	梵鐘	5.0	7.1	2.0	47		SSK 1 No.28		鋳型
26	梵鐘	6.4	9.3	3.7	255		Q-14-i-8		鋳型
27	梵鐘 横帯	6.1	6.0	1.5	48		SSK 1 No.161		鋳型
28	梵鐘	5.2	7.1	2.1	73		SSK 1		鋳型
29	梵鐘	4.9	5.1	1.8	58		SSK 1		鋳型
30	梵鐘	3.7	4.0	2.5	69		Q-14-i-8		鋳型
31	梵鐘	6.0	5.7	2.2	69		SSK 1 No.150		鋳型
32	梵鐘	7.5	5.5	1.3	55		SSK 1 No.142		鋳型
33	梵鐘	4.3	5.8	1.7	43		SSK 1 No.96		鋳型
34	梵鐘	5.4	7.8	1.3	56		SSK 1 No.132		鋳型
35	梵鐘	4.3	7.8	2.8	115		SSK 1		鋳型
36	梵鐘	4.7	8.5	2.1	60		Q-14-i-8		鋳型
37	梵鐘	7.1	6.8	2.8	85		SSK 1 No.85		鋳型
38	梵鐘	6.8	6.3	4.2	380		SSK 1 No.154		鋳型
39	梵鐘	3.9	5.3	4.2	130		SSK 1 No.134		鋳型
40	梵鐘	7.6	7.2	2.0	110		SSK 1 No.156		鋳型
41	梵鐘	9.3	7.1	3.7	460		SSK 1 No.124		鋳型
42	梵鐘	10.1	8.5	4.1	57		SSK 1 No.139		鋳型
43	梵鐘	9.5	10.3	2.1	175		SSK 1		鋳型
44	梵鐘 撞座	3.5	3.6	1.9	20		Q-14-i-8		鋳型
45	獸脚	3.5	2.5	2.1	15		Q-14-m-9		鋳型
46	鉄塊系遺物	2.9	3.4	0.6	10.3		SSK 1 分析資料No.31		塊1
47	鉄塊系遺物	2.4	4.0	1.1	9.7		SSK 1		塊2
48	鉄塊系遺物	3.9	3.2	1.0	12.4				塊2
49	鉄塊系遺物	3.3	3.2	1.6	24.1		分析資料No.32		塊2
50	鉄塊系遺物	4.0	4.2	1.2	22.0				塊2
51	鉄塊系遺物	3.5	4.0	1.7	22.6				塊2
52	鉄塊系遺物	1.5	3.4	1.2	3.1		SSK 1		塊2
53	鉄塊系遺物	3.3	2.4	2.3	35		SSK 1		塊1
54	鉄塊系遺物	1.9	0.9	0.3	3.4		Q-14-i-4		塊1
55	鉄塊系遺物	6.8	10.0	2.0	149.4		SSK 1		塊1

第29表 第7 鋳造遺構群一覽表

新番号	SSK01	旧番号	SK01	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-07	SSK01	SS-07	SK01	Q-14-m	隅丸長方形	4.40	3.80	0.56	N-5'-W
	第1号炉		1号炉	R-14-a	円形	0.93		0.06	
	第2号炉		2号炉	R-14-a	円形	0.67		0.25	
	第3号炉		3号炉	Q-14-m	楕円形	1.27	0.90	0.07	
	第1号鹿潭		第2鹿潭	Q-14-m					

d 第8 鑄造遺構群

本群は第3区の中央部分にあたり東側第1斜面の肩部に位置する。遺構は台地の平坦部を窪穴状に切り込んで北壁から西・南壁を作り出し作業面は整地し、東側は壁を持たず地山と同じ高さで続く第4号鑄造土壌を形成している。この鑄造土壌内に第3号鑄造土壌を検出し、また、前面にあたる東の斜面部分には梵鐘鑄造土壌と考えられる第1号鑄造土壌を検出した。周辺には、東側に第5鑄造遺構群が、また、南側には第6鑄造遺構群が検出され、北側には第9鑄造遺構群が検出された。

本群は第1～4号鑄造土壌、第1・2号炉、焼土塊集中区、炉体1号、円形還元状遺構、そして、第4号鑄造土壌内で検出した第1～21号廃滓である。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口の鑄造遺物を検出した。特に鑄型は41111gを計量し、梵鐘鑄型が圧倒的に多く出土した。このことは、本遺構群が梵鐘鑄造に関わっていたことを示唆している。

遺構

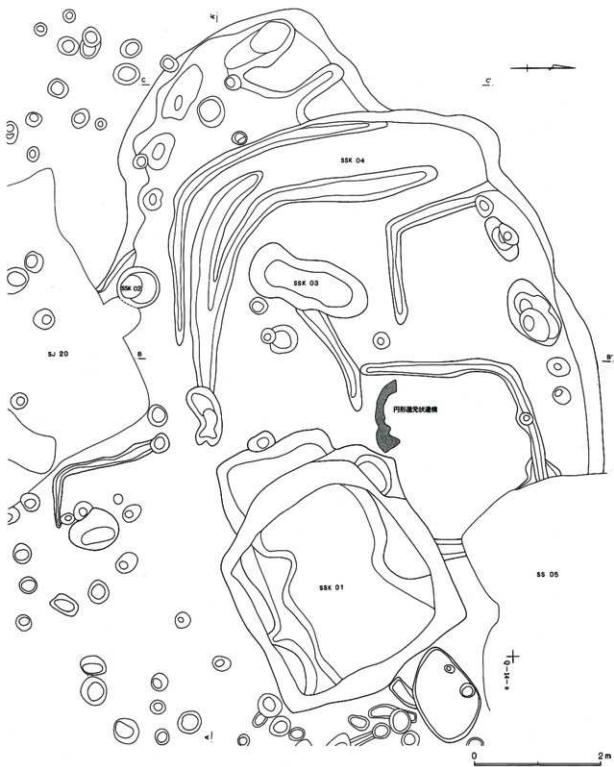
第1号鑄造土壌（第267図）

東側の第一斜面部にあたる。東側には第5鑄造遺構群、南側には第6鑄造遺構群が存在する。土壌は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口を含む赤褐色の焼土砂粒子層に覆われていた。特に、緑青の吹いた銅の微粒子が焼土砂粒の中に多く混じって検出された。本土壌はこの第2・3・4層の堆積層に覆われ平面形態の検出は当初できなかった。これらの層を順次取り除き遺物を1mメッシュの小グリッドで取上げ徐々に掘り下げた。主だった遺物は出土位置および出土の高さを記録した。第5層に達したところで土壌の形態を掴むことができた。このため、最初に設定した断面観察用のベルトは土壌の対角線上の断面観察を余儀なくされた。第5層中からも多くの鑄造遺物を検出したが、なかでも梵鐘鑄型片を多く出土した。

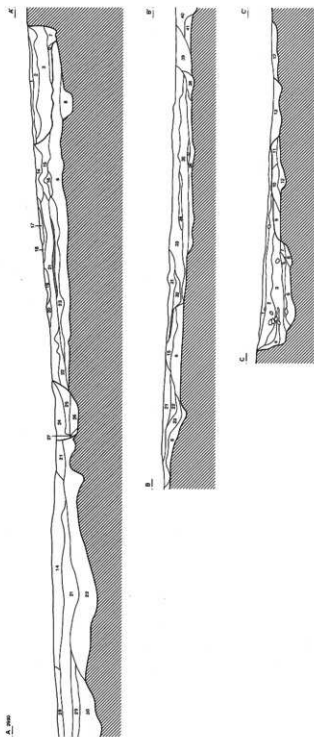
形態は方形をしており西側にテラスをもつ。掘り込みは深く地山の砂利混じりのローム層を抜いて礫混じりの砂利層を掘り込んでいる。底面は中央部が最も深く壁際は僅かに立ち上がる。また、北壁側は1段のテラスを、南壁側は2段のテラスをもつ。規模は南北3.210m、東西3.43mにテラス部分が0.64m、深さは最も深いところで1.00mである。

本遺構は梵鐘鑄造鑄込み土壌と考えられる。掘り込みが深く、周辺からは梵鐘鑄型や中子砂と考えられる焼土砂が多く検出していることから、おそらく梵鐘鑄型の型ばらしまで本土壌内において行われたものと推測できる。しかも、この規模の土壌からすれば大型の梵鐘が鑄込まれたと考えられ、鑄型製作における作業場としては整地作業面をもつ第4号鑄造土壌が想定される。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を多く検出した。中でも土壌内からは鑄型は第282図～283図の44～81(48～50は除く)に見られるように梵鐘鑄型が主体を占める。また、上層のグリッド出土鑄型には仏具の容器や獸脚、磬の鑄型を検出した。



第265図 第8 鑄造遺構群全体図(1)



- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物、腐萍を多量含み、やや砂質でハード。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化物、ローム粒子を少量含み、やや砂質でハード。
- 3 黒褐色土 炭化物を多量、焼土粒子を微量、腐萍をまばらに含み砂質。
- 4 黒褐色土 砂質ロームのブロックを縦らに含む。
- 5 暗褐色土 砂質ロームを多量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含み、非常に砂質。
- 7 暗褐色土 粒子の粗い砂質ロームを多量含む。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを少量含み、やや粘性があり、砂質。
- 9 黒褐色土 腐萍、炭化物を多量含む。
- 10 黒褐色土 焼土・ローム粒子を微量含む。
- 11 黒褐色土 腐萍、炭化物少量含み、ややハード。
- 12 黒褐色土 腐萍を少量、ローム粒子を微量含む。
- 13 黒色土 砂を少量含む。
- 14 暗褐色土 焼土・ローム粒子、炭化物を少量含み、やや砂質でハード。
- 15 黒褐色土 非常に砂質。
- 16 黒褐色土 焼砂を多量、炭化物を少量含む、非常に砂質。
- 17 暗褐色土 焼土、焼土粒子を少量含む。
- 18 暗褐色土 焼土粒子を少量含み、砂質でハード。
- 19 暗褐色土 腐萍、焼土粒子を少量含む。
- 20 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 21 黒褐色土 腐萍片、焼土粒子、炭化物少量含む。
- 22 黒褐色土 腐萍、焼土粒子を多量含む。
- 23 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 24 暗褐色土 細砂、腐萍、焼土・炭化粒子を多量含み、砂質が強い。
- 25 黒褐色土 炭化粒子を多量含み、砂質土、礫を少量含む。
- 26 暗黄褐色土 焼砂、焼土・炭化粒子を少量含む、砂質。
- 27 黒褐色土 炭化粒子を含む。
- 28 暗褐色土 細砂、焼土粒子、腐萍やや多く含む。
- 29 黒褐色土 細砂を多量、炭化粒子を少量含む。
- 30 暗黄褐色土 粘性が強く、礫を含む。(地山)
- 31 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を含み、やや砂質。(伊原系層)
- 32 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を微量含む。しまりゆるい。
- 33 黒褐色土 焼土粒子、炭化物をまばらに含む、非常に砂質。
- 34 暗褐色土 焼砂を多量含む。
- 35 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を含み、やや砂質。
- 36 黒褐色土 砂質でやや粘性がある。
- 37 黒褐色土 炭化物を多量含む。
- 38 黒色土 小砂利を含み、しまりよい。
- 39 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を微量含み、ややしまりゆるい。
- 40 黒褐色土 小砂利を多量、焼土粒子を微量含む。
- 41 暗褐色土 小砂利、暗茶褐色ロームを含む。

第266図 第8 鈔造遺構群全体図(2)

第2号鑄造土壌 (第268図)

第8鑄造遺構群内の南側に位置する。形態は浅い円形をし、径0.67m、深さ10cmである。断面観察によると覆土は炭化物を多量に含む第1層が存在し遺構の性格を特徴づけている。

出土遺物は炉壁と滓を少量検出した。

第3号鑄造土壌 (第268図)

本土壌は第8鑄造遺構群の中心的な竪穴遺構である第4号鑄造土壌内の整地作業面に検出された。第4号土壌のほぼ中央にあたり形態は不整形円形である。規模は長軸1.95m、0.83m、深さは整地表面から10cmと浅い掘り込みをもつ土壌である。土壌は地山の砂利層を掘り込みこのため底面はほぼ平坦ではあるが全体が砂利である。断面観察によると覆土は焼砂・炭化物・焼土塊を含む赤褐色土で覆われ、部分的に焼土が堆積し地山の砂利は被熱され赤く焼けていた。また、土壌中央や北寄りには凹みをもちこの部分からは焼土粒子・炭化物に混じって滓を検出した。

出土遺物は鉄塊・炉壁・鉄滓の溶解及び鹿滓遺物の割合が多く、鑄型の検出は見られない。

このことから、遺構の状態と考え合わせると溶解の関連遺構か或いは梵鐘鑄型等の型焼き炉とした施設の可能性が考えられる。

第4号鑄造土壌 (第265図)

本土壌は第8鑄造遺構群の中心的施設である。同時に、東側緩斜面における梵鐘を初めとする仏具鑄造の中心的施設とも考えられる。本土壌内から検出された遺物は非常に多く、特に覆土中の遺物は二次的な鹿滓が認められそれぞれの単位を第1号鹿滓～第21号鹿滓として捉え処理した。また、第1・2号炉および焼土塊集中区、炉体1号もこの第4鑄造土壌内に存在する。

第4号鑄造土壌は、覆土中に多くの鹿滓層をもち、焼土層も確認された。このため、土層の堆積はかなり細かく認められ、西側の台地側から東側の斜面方向に堆積している。形態は、台地の東側緩斜面を竪穴状遺構に掘り込み北側から西及び南側にわたって壁をもち東側は掘り込み底面が地山と同じ高さであるため壁はなく開放されている。いずれの壁もほぼ直立気味に立ち上がっている。西側に「コ」の字状の張り出しをもっている。底面の状態はほぼ平坦に整地されている。断面観察による第6層は掘り方の埋土と考えられ、地山の砂礫層を全体に覆った整地層と考えられる。土壌の掘り方は第1鑄造遺構群の第1鑄造土壌に見られたように幅18～43cm、深さ5～16cmの溝が「L」字状に掘られていた。溝の方向は規則的で鑄造土壌の方向に沿っており、何れも東側の壁をもたない開放された斜面側に排水口をもっている。これらの溝は地山が砂礫層にもかかわらず作られている点で本土壌が防湿設備を必要とした作業場であったことが窺える。

円形還元状遺構 (第268図)

第1鑄造土壌の西側にあたる。形態は円形のドーナツ状をした遺構と推定される。調査においては半円のみ残存し検出できた。上面は平坦で青灰色をした還元状態である。幅20cm前後、推定直径は1.10mである。